

宵闇色の空

夏樹夕

空色惑星

<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

○ も く じ ○

やさしい闇の	005
魔法使いと黄色いペンギン	055
マイペース	071
灰色の雨	089
トリックスター	107
夫婦	123
あの星が流れたら	139
雪の色	149
冬	195
NとかMとか	201
紙飛行機	211
グレーは白か、それとも黒か。	229
天使が私を撃ってくる	243

「銀河物語」シリーズ	
セレスティンの宝石	259
ガニメデの女王	271
ベガの王女とグノーシス	283
アーヌングの語り手	303
独りぼっちの異邦人	311
作品紹介	316

やさしい闇の

妙な夢だ。

そう思いつつ目をあけた歩美は見知らぬ天井に顔をしかめた。だが次の瞬間、昨日の出来事を思い出し、自分の愚かさに苦笑いを漏らす。

自暴自棄になつてはいたが、まさか三十歳も過ぎて自分がこんな事をするとは思つてもみなかった。昨日はそう、酔つていたのだ。五年も付き合ひ、婚約までしていた男に振られて。

会社帰りに呼び出されたのは、考えてみれば久々だった。重要な話があると告げられたとき、歩美はどんな話をされるのか予想していた。ここ数ヶ月、彼がそれを切り出す日を恐れ、待ち望んでいたのだ。

待ち合わせ場所には珍しく、彼が先に待つていた。紺色のスーツに歩美の見た事のないネクタイ、シャツ。あきらかに、歩美の知っている彼の趣味ではない。

「待たせたかしら？」

「いや」

歩美の姿を確認するように、ちらりと視線を上げたものの再びうつむく。

「ごめん、本当に——」

声は小さく、苦しげな響き。

「何？」

「遊びのつもりだったんだ、彼女のことは——でも……」

7 宵闇色の空

顔を上げ、助けを乞うような瞳を歩美に向ける。

「……そう」

歩美は笑みを浮かべる。彼にとっては慈愛の、歩美にとっては自嘲の笑み。

彼に他に女がいることを歩美はついぶん前から知っていた。知っていて、知らないふりをしていた。みつともない真似をしたく無い、その一身で全てを黙殺した。

そんな風に思えるのは彼がその程度の男だったからか。それとも彼を愛しているふりをしてる自分が好きだったからか。

彼の言い訳を聞きつつ、歩美は冷静に自問していた。

「——だが、彼女が妊娠した」

耳に飛び込んできた言葉。

「そうなの」

答えた声は歩美自身、驚くほど平常だった。

彼はこの場所ただ一人、安っぽいテレビドラマの主人公みたいに滑稽な演技を続ける。

「俺ははじめをつけたい。だから別れてくれ——」

「わかったわ。じゃ、さよなら」

簡素に答え、歩き出す。歩美は振り返ろうとも思わなかったし、事実振り返らなかつた。哀しくは無かつたし、混乱もしていなかつた。所詮、自分にとってその程度の

男だったのだろう。

歩美はこの五年を振り返り、どうして自分があの男を好きになったのか、どこを愛していたのかを思い出そうとした。けれど、頭には何も浮かんでこない。思い出せない。この五年、彼に対し、自分がどんな想いでいたのかわからない。

タイミング良くやってきた電車に乗り込む。

*

電車から降り、歩美は我に返る。

間違えた。

ここはいつもの下車駅ではない。だが、見覚えがある。——高校の時、利用していた駅だと気づいたのはすぐだった。

どうしてこんな所で降りてしまったのだろう。振られた事に自分でも思わないほどショックを受けているのだろうか。

まさか、そんな。

歩美は苦笑する。

時刻表を調べると、乗り換えの電車は一時間以上待たなければならぬ。ため息を一つつき、駅を出る。

誘蛾灯のように駅前には小さなコンビニ。そこで発泡酒の六缶パックを買い込み、土

9 宵闇色の空

手に向かった。

部活動に一生懸命だったあの頃。朝、夕方、何度も走った川沿いの土手。辛くて、嫌でも、やめたいとは思わなかった。

このまま高校まで歩こうかとも思ったが、買い物袋の中身が重い。土手へと降りるコンクリートの階段に腰を下ろす。

暗い川のせせらぎが気持ちよく耳に響く。遠くを走る車が時折ライトを向けるものの、辺りを照らしているのは弱弱しい月の光だけ。

買い物袋から一本取り出し、プルタブを開ける。二本、三本あくのに時間はかからなかった。酒には強い方ではない。なのに、幾ら呑んでも酔わない。そのかわり、鮮やかに先ほどの会話が蘇る。

『俺ははじめをつけたい。だから別れてくれ——』

『わかったわ。じゃ、さよなら』

あまりにさっぱりした、ドラマにもならないような綺麗な別れ方、振られ方だった。なのに、どうして何度も思い出すのだろう。

「何してんの？」

三十歳過ぎくらい男の声。見回りだろうか。暗い中、土手で一人で飲んでいるのは確かに不自然だ。

「何でもありません」

移動しようと立ち上がり、歩美はべたりと座り込む。頭に酔いはまわっていないのに、足にはきていたらしい。

「呑みすぎじゃない？」

男は隣に座り、

「これ、もらつて良い？」

勝手に一本あける。あまりに失礼な出来事に、歩美は憮然と男を見やる。

妙な男だ。

歩美は男の横顔を見つめる。発泡酒を美味そうに呑みながら、月を見上げている。顔はハーフと言うより、クォーターっぽい感じ。かといつて、美男子でもなく、太陽の下で会ったならば、ありふれた、普通の人と表現するのが良さそうな顔立ち。月の光りが彼の顔立ちの陰影を濃くしている。

落ち着いた響きの声から、三十歳過ぎかと思つていたが、改めて見るとずいぶん若い。二十歳前半、いや大学生だろうか。ジーパンに黒のポロシャツとありふれた格好なので、はつきりしない。

まじまじと歩美が男の顔を見つめていたためだろう、男は恥ずかしげに微笑む。それがまた綺麗で、歩美は魅入られたように微笑み返す。

「僕の顔、何かついでる？」

戸惑った顔もまた、美しい。

11 宵闇色の空

「何も」

歩美はずっと見つめたまま。男は照れ隠しのようにまた勝手に一本開け、
「もう一本もらつて良い？」

「……どうぞ」

しばらく無言で呑んでいたら、全て空き缶になってしまった。

「呑み足りない」

歩美がぶすりと呟く。

「そうかな？」

男はまるで酔っていない顔。

「あんたが呑むからでしょ」

酔った歩美は男に絡む。

「ごめん」

悪びれた顔もせず、男は格好だけは大げさに謝る。

「ごめんで済んだら警察いらさない。もっと呑むの！」

「いや、えっと、僕は帰るから」

立ち上がる男のポロシャツの裾を掴む。

「ダメ。あんただけ酔ってないってズルイ」

「あのさ、酔ってるでしょ？ 帰った方がいいよ」

「何言つてるのよ、私は全然酔つてない。あんた、私のお酒盗つたのよ！」

ビシリと音がしそうなほど見事に男を指差す。

「くれるつて言つたじゃん」

呆れ顔。

酔つてる、酔つてないの押し問答を繰り返すこと数分。男は根負けした顔で、

「じゃ、近くの居酒屋でも行く？」

「ええ、行きますよ。行かせていただきます。行つてあんたを酔いつぶしてやる」

「……無理だと思ふけど？」

男は何故か不敵に笑う。だから歩美も同じ顔で——男には酔つ払いがヘラヘラ笑つてゐるようにしか見えなかつたが——笑つて見せる。

「フフフ、大丈夫。負けたら私が奢るから」

そしてどこか、居酒屋に連れて行つてくれたのだ。男の宣言通り、男は幾ら飲んでも酔つた様子はなく、逆に歩美は呑みすぎて意識を失つてしまった。

ベッドの中で歩美が居心地悪く寝返りをうっていると、

「起きた？」

彼が現れる。昨日思つた通り、何処にでもいそうなありふれた顔でしかない。ただ、年齢は三十歳くらいだろう。若く見間違えるなどどうにかしている。あの時点で相当酔つていたのだろうか。

13 宵闇色の空

上半身を起こし、ふらつく頭を支えようと頭に手をやる。

「ごめんなさい。今、何時でしょうか？」

呑み過ぎた為だろう。体がだるいし、頭が痛い。

「九時過ぎつて所」

「やばっ、仕事——」

立ち上がろうとして、ベットに沈み込む。とてもじゃないが起き上がれない。

「連絡しといたよ」

彼の手には歩美の携帯。

『職場』つてどこでしょ？」

確かに登録しといたのだけれど……勝手に他人の携帯を使うだなんて、なんて礼儀知らずなのだろう。いや、この場合は大変助かったのだけれど。

歩美が何と言おうか戸惑っていたところ、

「——ごめんね」

沈み込んだ男の声。昨日のような大げさな身振りはない。

「いえ、助かりました」

恐縮しきった男の様子に歩美は一瞬、頭が痛むのも忘れ頭を下げる。その途端、眩暈に襲われる。

あれだけ呑んだのだ。二日酔いにならないわけがないのだが、それにしても酷い。

「いや、じゃなくて——」

言いよどむ男に歩美は慌てて衣服を確認する。

スカートは皺だらけで見るも無残だが、ストッキングさえもつけたまま寝てしまったのだから仕方がない。ブラウスは一番上のボタンが外れているけれど、寝苦しくて自分で外した気がする。

どこもおかしくない。昨日の格好のまま。

酔っ払って絡んだあげく、泊まらせてもらったのだからこちらが謝らなければならぬのに、何を謝られることがあるのだろうか。

「飲み過ぎちゃって」

「え？ えーつと……」

歩美の不確かな記憶の奥底に、かなりの額の支払いをした記憶が蘇ってくる。だが、あれは仕方ない。男は財布を持っていなかったのだし、酔った歩美が奢ると宣言したのだから。

今月は貯金を切り崩さなければ生活できそうもない。頭が痛むのはそのせいもあるのだろうか。

「お酒強いですね」

男は歩美よりもずいぶん飲んだはずなのだが、まるで酔った様子がなかった。

「まあ……ね」

15 宵闇色の空

「私は頭がずきずきして——」

「痛み止め飲む？」

「有難う。でもこれ以上ご迷惑をおかけする訳にはいきませんから」

「言いはするものの、当分起き上がれそうもない。」

「僕は別に構わないけど？」

「……じゃあ、もうちよつとだけベットをお借りします。もう少ししたら帰りますから」

頑固な歩美の言葉に男は微笑み、

「本当にいいよ、いつまでいたって。僕はちよつと出てくるから」

扉の閉まる音が聞こえた。

*

いい匂いにつられ、歩美は目を覚ます。

枕もとに置かれた時計はすでに一時過ぎ。ずいぶん長い間寝ていたらしい。

「やつと起きた。気分はどう？」

「まあまあです」

頭は相変わらず痛い、気分はずいぶん良くなっている。二日酔い特有の嫌な汗で体中気持ち悪いが、あれだけ呑んだのだから当然だろう。

「お粥食_べる?」

この匂いはお粥なのか。

意識した途端、お腹は大きな音を鳴らす。

「あまり食事作らないから、レトルトだけど」

これ以上、迷惑を掛けたくはないと言ったはずだが、背に腹は替えられない。

「いいえ、有難うございます」

「そんなにかしこまらなくて良いよ、森さん」

男はついできと言った様子で言い置き、台所に向かう。

「そんなわけには——つて、どうして私の名前を?」

「高校の同級なんだけど……覚えてない?」

覚えていないと首を振る。とにかく、歩美の高校時代の思い出と言えば部活動しかない。

「そっか。じゃ、改めて茅ヶ崎です。よろしく」

軽く頭を下げ、

「でもそれじゃ、」

驚いた顔。

「昨日は知らない相手に酔って絡んでたの? 森さん、そんな人だとは思わなかった。危ないよ?」

17 宵闇色の空

「あんた——茅ヶ崎君が話しかけてきたんじゃない」

同級生とわかり、途端口調を改めるのもどうかと思うが、相手が砕けた口調である以上、こちらでも丁寧にやる必要はない。顔見知りであるならば無論の事。

「そうだつけ？」

「そうよ」

自信を持って歩美が答えるので、茅ヶ崎はそれ以上反論しようとはせず、質問を変えた。

「あんなどこで何してたの？」

「何つて……呑んだたのよ」

「川を見ながら？」

「そうよ、あんたこそ何してたの？」

「散歩」

「あんな場所を？」

街頭がありはするものの、何も無い寂しい場所だ。

「月を見ながらブラブラしていると気持ち良いんだよ」

その言葉に歩美はふっと息を吐いた。始めの印象通り、悪い人間じゃない。

「でも、勝手に人のお酒を呑むのはどうかと思うわ」

「だって、くれるって言ったでしょ？」

三十歳過ぎた男が『だって』なんて言っても可愛くない。

「あれは事後承諾よ。私はあんたが呑むから仕方なく「あげる」って言ったの」

子供のように歩美は頬を膨らませる。

「森さんってそんな人だとは思わなかった」

茅ヶ崎は呟くように先ほどと同じ台詞を言い、おかしげに笑いはじめる。

「何よ」

ぶすりと歩美。

「いや、だって森さんって大人びた優等生ってイメージだったから……」

十年以上昔の話。歩美は同窓会にもここ十年くらいは顔を出していない。茅ヶ崎の中の歩美はあの頃のイメージのまま、現実の歩美とのギャップに呆れているのだから。

歩美は気恥ずかしさと、妙な腹立たしさから顔を赤くする。

「悪かったわね」

「何かあったの？」

茅ヶ崎はクスクス笑いをようやく引つ込め、真面目な顔でたずねる。話をうまくそらせたと思っていた歩美はびくりと震える。

「何かって？」

わかっついてはぐらかす。

19 宵闇色の空

「川を見ながら酒盛りしなけりやならない理由」

「……関係ないでしょ」

「そうかなあ？ 僕、絡まれた上にベット盗られてるんだけど」

回りくどく責めるやつだ。

歩美は一つ息を吐き、顔を背ける。

「すてられたのよ。婚約者に」

どうしてこんな事を話しているのだろう。歩美は自問するが、答えはない。茅ヶ崎に迷惑をかけたから？ それとも茅ヶ崎の持っている独特の雰囲気のせいだろうか？

「どうして？」

優しく、力強い声。歩美に非がないと信じきっている声。

それまで、歩美は泣きたいなんて思わなかったのに、何故だか涙があふれてくる。

「別の女を妊娠させたから、責任とるって」

「そっか——酷いやツだね」

酷い？ 違う。酷いのは私だ。私のプライドを満足させるために別れてやらなかった。

彼はずっと苦しんでいたはずだ。

ぎゅつと布団を握り締める。

でも、仕方ないじゃない。私は好きだったのよ、彼の事。——嘘だ。好きだなんて錯

覚だ。彼の何処に好きになる要素があったというのだ？

冷静な自分自身は彼を否定していた。けれども、それでも、理由なんてなくただ彼が好きだった——好きだったのだ……。

涙が一筋零れ落ち、堰を切るように嗚咽が漏れる。

「お粥、持ってこようか？ 冷めちゃったかも知れないけど」
非難も同情も、励ましもない声があるがたい。

「……ありがと……」

茅ヶ崎が言っていた通り、食事はコンビニで買ってきたらしい温めただけのお粥と、インスタントのほうれん草の味噌汁、それに栄養ドリンクだった。

腹がくちくちなれば、眠くなる。十分眠ったはずなのに、歩美の臉は重い。

「寝ていいよ」

茅ヶ崎が優しく言う。

「そんなわけにはいかないわよ。明日は仕事行かなきゃ」

それに着替えなければ気持ち悪い。

歩美は睡魔と闘うが、

「明日は日曜だけど？」

「……そうだっけ？」

答える声はすでに重く、引きずり込まれるように眠りに落ちる。

21 宵闇色の空

自分が思わなかったほど精神的に疲れていたんだらうか。茅ヶ崎が布団を掛けなおしてくれている気配に「ありがと」と呟くが、声になっていたのか歩美にはわからなかった。

*

次に目が覚めたのは二十時も過ぎた頃だった。リビングで歌番組を見ていた茅ヶ崎は、寝室の歩美に声をかける。

「気分どう？」

寝すぎたため、まわらない頭で歩美は答える。

「まあまあ」

「飯食べる？」

答えるように大きなお腹の音。歩美は赤い顔で、お腹をさすりながら、頷く。

「起きられる？」

「大丈夫」

ふらりとするものの、何とか立ち上がる。着たままだったブラウス、スカートは見るも無残だ。

そのまま歩美がリビングに姿を現すと、茅ヶ崎はテレビから一瞬だけ歩美に目を向ける。

「その格好じゃ食べに行けないね」

自分の目で見える以上に顔など酷いかもしれない。歩美は鞆から化粧ポーチを取り出し、

「洗面所借りていい？」

茅ヶ崎が指差すドアへ駆けこむ。

「あ、そうだこれ」

ドアを閉める直前、思い出したように茅ヶ崎が声をあげ、買い物袋を歩美に手渡す。

「何？」

「歯ブラシとか」

「——ありがと」

出かけたときについでに買ってきたのだろう。手回しが良い。

洗面所の鏡に映る歩美の顔は二日酔いと寝すぎの為、見事にむくんでいた。

「酷い顔」

思わず笑みが漏れる。こんなに飲んだのは学生の時以来だろう。

買い物袋の中身を取り出す。歯ブラシセット、化粧も落とせる洗顔フォームにタオル、ヘアブラシ。最低限だか、ないよりは良い。

茅ヶ崎は一人暮らしらしい。片付けは出来ないようだが掃除はしているようだ。

顔を洗い、髪を整えていると、リビングから声が掛かる。

「うどんと蕎麦、どっちが良い？」

「うどん……本当にごめん、迷惑掛けて」

洗顔しながらマツサージし、手早く化粧を済ませると、リビングに戻る。

テーブルは4人用のちよつと大きなものだが、物があふれている。手を伸ばせば届く範囲に物を集中させているらしい。

「さつぱりした——ごめんね」

「何が？」

「迷惑かけて」

「良いつて言わなかった？」

怒った様子もなく、淡々とした顔で答える。

茅ヶ崎が何を考えているのかわからないが、とりあえず歩美は胸を撫で下ろす。

昨日、こちらが奢ったので、その分親切にしてくれているのかもしれない。

「これ飲んで」

茅ヶ崎は冷蔵庫からジュースを取り出す。昼に飲んだ栄養ドリンクと同じく、こちらにも大きく『鉄分』とある。

歩美は不思議に思いつつも、ありがたくもらう。確かに女性は貧血になりやすいのではあるが……歩美は貧血気味ではない。普通の栄養ドリンクでも構わないというの

に。

「三十分くらいしたら来ると思うから」

茅ヶ崎は自分の真向かいの椅子の上に積み上げられていた荷物を手早く片付ける。机の上の荷物も同じように右から左へ。

歩美は手伝わぬほうが良いだろうと判断し、しばらくしてようやく空いた椅子に腰掛ける。

「本当にありがと」

茅ヶ崎は布巾で机の上を拭きながら、

「ありがと」も「迷惑かけてごめん」も何度も聞いたからもういいよ。僕は好きでやってるんだし、その分昨日してもらったんだから」

これ以上言うのはしつこいだろうと、歩美は話題を変える。

「うどん屋さん、近くにあるの？」

「学校前にあつたでしょ？」

「ああ、」

学校帰りに何度か立ち寄った。蕎麦屋、お好み焼き屋、ピザ屋、ソフトクリーム屋

「まだやってたんだ」

「コンビニ出来たから売上はさっぱりらしいけど」

「そうなの」

茅ヶ崎はこの辺りの事に詳しい。

「ずっとここに住んでるの？」

「高校の時からね」

「地元は？」

「電車で二十分くらいのこと」

話す事もないので、歩美は疑問に思ったことを質問し、茅ヶ崎は当り障りなく答える。そうこうしているうちに時間は過ぎ、うどんが届いた。だが、茅ヶ崎は歩美の分しか頼まなかつたらしく、ワカメうどんが一杯だけ。

「茅ヶ崎君、食べないの？」

「——お腹いいから」

何故か後ろめたげな表情になる。歩美は深く追求せず、うどんに手をつけた。

食べ終わり、食器を片付け終わるとする事もない。歩美は何となく一緒にテレビを見る。

クイズ番組が終わった所で歩美は椅子から立ち上がる。

「じゃ、帰るね」

「もう？」

時計を見やった茅ヶ崎は納得した顔で、

「じゃ、送るよ」

「悪いから良いわ」

「散歩のついで」

そう言われたら断り切れない。

何故か安堵している自分の気持ちを不思議に思いつつ、歩美は手早く荷物をまとめめる。

電車の時刻は昨日と一緒だろう。そう歩美は考えていたのだが、駅について時刻表を確認すると、二時間後の最終電車まで電車がいない。

「嘘」

「田舎だからね」

苦笑交じりに茅ヶ崎は答え、

「そこで時間つぶす？」

駅前のファミレスを指差す。

「……茅ヶ崎君、帰って良いよ？」

「僕のおごり。森さん、お腹空いてるでしょ？」

見通されてる。

二日酔いの気分の悪さがなくなつた今となつては、お腹が空いて仕方がない。何せ今日はまだ、お粥とうどんしか食べていないのだ。

「じゃあ、遠慮なく」

「どうぞどうぞ」

そこでも、茅ヶ崎は紅茶を飲んでいただけで何も食べようとはせず、歩美は恐縮しながらも結構な量を食べた。

歩美が食べ終われば時間をつぶす為、二人は他愛もないおしゃべりに花を咲かせる。

「あ、電車」

茅ヶ崎の声に、歩美は一瞬何の事かわからなかった。

だが、茅ヶ崎が指差す方を見れば、乗るはずだっただろう電車が無常にも去ってゆく。

「嘘、あれ最終」

歩美は慌てて店を飛び出す。

駅員に尋ねると、まさしく先ほど見かけた電車が歩美が乗るはずだった電車であることが証明され、歩美は肩を落とす。

遅れてやってきた茅ヶ崎は、困りきった表情の歩美を見つけると、クスクス笑い始める。

「何よ、私が馬鹿だって笑いたいのね」

茅ヶ崎は違うと首を振り、耐え切れなくなったのか大きな笑い声を上げる。

「違うよ。今日一日で森さんのイメージかなり変わったから……森さん、しっかり者

だって思ってたけど、そうじゃないんだね」

笑い声は止まらない。

「そうよ、どうせ抜けてるわよ」

「そう言う意味じゃなくて」

「どう言う意味よ」

「そうだな……以外に可愛いつて事かな」

その言葉に歩美は顔をしかめる。元婚約者も付き合い始めた最初の内はそう言っていた。

「怒らないで、誉めてるんだから」

「でしようね」

歩美は歩き出す。慌てて茅ヶ崎は後を追いかけて

「どこ行くの？」

「歩いてでも帰る」

「無理だよ」

「やってみなきゃわからないわ」

こうなれば意地だ。プライドの問題だ。

茅ヶ崎がついてこないよう、足を速める。

「それより、もう一晩泊まっていきなよ」

そういうわけにはいかないわ。
歩美は風をきるように歩く。

*

「痛くない？」

「……まあ」

茅ヶ崎の背中におぶさり、歩美は悔し紛れの言葉を吐く。捻挫した足首が痛くて仕方ない。

たかだか三百メートルも歩いていないはずだ。体力の衰えを実感し、哀しくなる。もう、若くはない。

「コンビニでも寄ろうか？」

「うん」

茅ヶ崎にはおとといから迷惑の掛け通しだ。もう一度「ごめん」と言いたいが、何度も「いいよ」と言っていたから、また言うとならぬ気が悪くするだけかもしれない。

かけるべき言葉を見つけれないまま、店に到着する。必要な物をカードで買い込み、再び茅ヶ崎の部屋に戻る。

「ベット、また借りてごめんね」

居心地の悪さを感じつつ、歩美はベットに入る。

「気分どう？」

「だいぶ良いよ。もうちよつと頭痛いけど」

「……そう」

ばつが悪そうな顔。呑みすぎたのは自分の責任で茅ヶ崎はなにも悪くない。本当にいい人だ。

電気を消し、部屋は暗くなったものの、歩美は眠りすぎているため寝つけない。だが、起き出すのも悪いので、じつとベットに入ったまま天井を見つめていた。

一時間ほどして、リビングで寝ている茅ヶ崎の動く気配がする。

「――腹減った」

小さいがはつきりした呟き。今日一日、茅ヶ崎は歩美の目の前で一度の食事をしていない。

もしかして、茅ヶ崎は貧乏なんだろうか？ だとすると、自分の為に余分なお金を使わしてしまったのではないだろうか。

「誰かいるかな……」

玄関のドアを静かに開け出て行く気配。友人にお金を借りにも行ったのだろうか。そう思うと歩美はますます不安になった。

茅ヶ崎は散々「いいよ」なんて気前のいい事言っていたけれど、本当はそんな経済状態じゃなかったのだろう。「ごめん、迷惑掛けて」なんて言葉じゃ詫び様がない。

自分はなんて事をしてしまったのだろう。茅ヶ崎が戻ってくるまでの一時間半、歩美は自分のやった事に対して酷く悔やんでいた。

*

出て行ったとき同様、ドアは静かに開いた。だが静まり返った空間にはそれでも響く。

歩美はループしている思考を一旦中断し、何と謝るべきか言葉を捜す。

「ごめん、はすでに言った。迷惑掛けて……もすでに言ってしまったている。謝ろうにも言葉がない。」

リビングと寝室を結ぶ引き戸を開ける音。流れ込んでくる甘い香り。

女性の元へ行っていたのだろうか。三十歳過ぎの茅ヶ崎に彼女の一人や二人いて当然だ。

妙な失望感に歩美は自分を疑う。もしかして、彼にすてられたことを茅ヶ崎にもすてられたように混同しているのだろうか。

部屋の中へ滑りこんでくる足音。歩美は目をつぶり、寝たふりをする。声を掛けようにも、言いたい事があり過ぎて言葉に出来ない。

「大丈夫かな」

茅ヶ崎の呟き声。歩美に対しての言葉ではなく、自分自身へ問い掛けのような響き。「……一口ぐらいなら——大丈夫だよな」

暗闇だと言うのに、茅ヶ崎は目が利くらしい。音も立てずベットの枕もとに立つ。歩美を伺っている気配。

歩美は内心慌てながらも、死んだように眠ったふりを続ける。早く部屋から立ち去って欲しいと願いつつ、行かないで欲しいとも思う。混乱した頭はまともに機能せず、自動的に歩美の得意なポーカーフェイスを続ける。

ふわり、歩美の首元に茅ヶ崎の気配。首筋に顔をうずめ、次の瞬間、小さな痛みに驚き歩美は目を開ける。

猫の目がそばにあった。金色に輝いているそれは茅ヶ崎の瞳で、肌は発光でもしているかのような白さ。酔った歩美が見たよりも数段美しい顔がそこにあり、同じく驚いた顔をして、じっと歩美を見つめている。

夢、だろうか。

歩美は混乱したまま、茅ヶ崎を見つめる。

茅ヶ崎はうつすらとやさしげな、それでいて怪しい笑みを浮かべる。歩美は魅入られたように同じく笑みを浮かべる。

香料をかき消すかのようなはつきりとした血の匂い。歩美は痛みが走った首筋に手

をやる。ぬるりとした感触。それが何であるか、瞬間頭に浮かんだ。

「もつたいない」

茅ヶ崎は歩美の首元を見つめ、唇を舐める。

「……ヴァン。パイア？」

「そうだよ」

これが現実であるはずがない。

茅ヶ崎はごくごく普通の外見で、美しいなんて露ほども思わせるような容姿はしていない。まして、ヴァン。パイアなどいるものか。

「私の血、おいしい？」

夢だと判断し、歩美は怪しい美しさを持つ茅ヶ崎に尋ねかける。

「とても」

にこりと微笑む顔は絵にもできないほど。

茅ヶ崎はヴァン。パイアだからご飯を食べなかったのだ。一日、歩美がそばにいて、血を啜る時間などなかっただろう。それではお腹が空いてしまうのも当然だ。

「もつと飲む？」

「……いいの？」

「お腹、空いてるんでしょ？ 私の血で良ければお腹いっぱい召し上がれ」

茅ヶ崎は歩美の首元に再び顔をうずめる。

歩美は徐々に瞼が重くなり、この夢もいつか見た妙な夢に似ているなと思いつつ意識を失った。

*

気だるさに襲われながら歩美は目を覚ました。カーテンから漏れる光が眩しくて仕方ない。いくら二日酔いとはいえ、寝すぎた。だが、昨日と違って頭の痛みはない。「妙な夢だったな」

ベットを整えながら思い出すのは、妙な夢の事。茅ヶ崎がヴァンパイアで、自分が襲われる夢。あまりにリアルで、生々しかった。

現実の茅ヶ崎は本当にいい人で、何処にでもいるような平凡な顔立ち。彼がヴァンパイアなど、まして人を襲うなど考えられない。「何であんな夢見たんだろ？」

「……おはよう」

戸惑い気味の茅ヶ崎の声がリビングから響く。

「おはよう」

「気分は？」

「いいよ。迷惑かけてごめんね」

手早く身支度を整えてリビングに姿を現す。時計は八時頃だったはずだが、外は

昼のように明るい。

テーブルにはコンビニで買ったらしい、サンドイッチとオレンジジュース、サラダが並んでいた。

「気を使ってくれなくてもいいのに」

「いや、でも——」

「茅ヶ崎君は本当にいい人だよね」

その言葉に、茅ヶ崎はまじまじと歩美を見つめ、顔をそらし、哀しそうにため息を吐く。

「どうしたの？」

「……何でもない」

茅ヶ崎の様子が気にはなつたが、歩美は深く追求しない事にした。誰にだって秘密の一つや二つはあるものだ。それを追求するほど自分は下世話ではない。

オレンジジュースは好きなのに、何故か飲みたいと思わなかった。オレンジの酸味のあ
る甘い香りが鼻腔をくすぐるが、よい香りだとは思うが、ちっとも美味しそうとは思えない。

そんな自分自身に首を傾げつつ、歩美は義務的にオレンジジュースに口をつける。

「……不味っ」

とてもじゃないが飲めたものじゃない。腐り、澱みきった下水の水でも口に入れた

気分。口直しにとサンドイッチに手を伸ばす。

「……何、これ」

まるで砂を食べているようだ。じやりじやりと口の中で音がしそうな歯ざわり。茅ヶ崎の手前、何とか飲み下すが、とてもじやないが美味しいなんてお世辞にも言えない。

「美味しくない？」

心配そうな茅ヶ崎の声。歩美は愛想笑いを浮かべつつ、頬が引きつるのを抑えきれない。

突然、茅ヶ崎は歩美の足元に座り込み、深深と頭を床につける。

「ごめん！ こんなつもりじゃなかったんだ！」

「え、何？」

歩美も慌てて床に正座し、茅ヶ崎に向きなおる。

「ごめん！ 本当にごめん！ 幾ら謝っても足りないけど、本当にごめん！」

「あの、何？ とりあえず頭上げて、茅ヶ崎君」

「ごめん！ 本当にごめん！」

「うん、わかったから」

自分が謝らなければならぬのに、茅ヶ崎に謝られ、歩美はどうして良いのかわからない。

「なんていうか、その……僕、ヴァンパイアなんだ」

にと、茅ヶ崎は大きな八重歯を見せる。

「……は？」

朝から何を言い出すんだろうか。

「森さん、美味しいからさ」

茅ヶ崎は言い訳がましく言う。

美味しいって何が？ 何か得たいの知れない気味の悪さに歩美は身を震わせる。

嬉しそう、いや、美味しそうな食べ物を思い出した顔で茅ヶ崎はにやついている。

一瞬意識を飛ばしかけた歩美だったが、気を取り直す。

「——本当なの？」

歩美の問いかけに、真剣な面持ちで茅ヶ崎は首を縦にふる。

馬鹿など思いつつ、歩美はあの、妙な夢を思いだし、ぽつりと呟く。

「あれ、夢じゃなかったんだ」

「ごめん」

「……朝起きたらだるかったのも、私に鉄分取らせてたのもそのせいだつて事？」

茅ヶ崎は素直に頷く。私の心配をしてくれてるいい人じゃなくて、最初から私の血の為に優しくしてくれていたつて事だろうか。

考えると頭が痛い。

「ごめん。でも、凄く我慢はしてたんだ。森さんの血、美味しい事わかってるけど、土曜日は飲み過ぎてた。だからそうだったし」

飲みすぎてるのは一日酔いでって意味じゃなく、血を吸われ過ぎてってことのようにだ。

歩美はどっと疲れを感じる。

「でもさ、」

茅ヶ崎は気遣うように言葉を続ける。

「本当に美味しいんだよ、森さんの血。あの頃と味変わってなくて、ちょっと感動しちゃったよ」

「あの頃って？」

「時々寝てたでしょ？」

「……保健室か」

そう言えば、昨日のような事があったかもしれない。

あの頃、部活に一生懸命だった歩美は、授業中よく眠っていた。教室の机というのはいかんせん寝心地が悪い。だから昼休みを利用して保健室のベットの中にもぐり込むこともあった。だが、保健室で寝れば寝るほど体はだるさを増していた。良く眠れるから深く眠り過ぎているのだろうと思っていたら……そう言う理由だったのか。

「なんでそれならそうと最初に言ってくれなかったわけ？」

39 宵闇色の空

「僕がヴァンパイアだってわかってても普通に接してくれる？ 頼んだら吸わせてくれた？」

「しなかったわよ」

即答。当たり前でしょとばかり、歩美は茅ヶ崎から一步遠ざかり、睨みつける。

「つていうか、絶対に近づかない」

「—でしょ？」

言われなれているのか、茅ヶ崎にダメージの様子は無い。

「あんた、その為に私を留めようとしたわけ？」

茅ヶ崎はほとんど、いやまったく食事をしなかった。けれど、だからって茅ヶ崎が吸血鬼だなんて普通絶対思わない。

茅ヶ崎はおかしそうに首を振り、

「それは思い過ぎし」

「……そう」

バツの悪い顔をしつつ、歩美は玄関に向かって歩を進める。

「どこ行くの？」

「帰るのよ。お世話になりました。どうも有難う」

「いや——」

茅ヶ崎の声を振り切るようにドアを開けた歩美は、そのまま硬直した。

眩しい、なんてもんじゃない。

熱い、ギラギラとした容赦ない光の渦。

茅ヶ崎は急いでドアを閉め、茫然自失の歩美をリビングに運び床に寝かせる。急いで氷枕を抱かせ、冷たいスポーツドリンクを飲ませる。手元にあったどこかのパンフレットで扇いでいると、歩美は落ち着いてきたらしい。瞬きを繰り返し、やがて説明してくれそうな茅ヶ崎を不安げに見つめる。

「こんなつもりじゃなかったんだ」

扇ぎながら、茅ヶ崎は頭を下げる。

「……どういうこと？」

喉は何日も水を飲んでいなかったかのようにヒリヒリと焼け付いている。歩美は不味いスポーツドリンクをそれでも飲み込む。

「怒らない？」

「怒るって？」

何か、これまでに感じた事のない程の嫌な予感。

「あの時は他に手がなくて……これは適切な処置だったと思うよ。森さん、死にかけてたし」

「……何の事？」

尋ねる歩美の背中を冷たいものが走る。

死にかけていた？ どういう意味だろう。彼はヴァンパイアで、私は死にかけていて——それはきつと、血を吸われ過ぎたからで……。

吸血鬼映画のワンシーンが頭に浮かぶ。それを即座に否定する。

そんなことあるわけがない。

「だからさ、生き返らせようとして——わかるでしょ？」

マイペースな茅ヶ崎が腹立たしい。歩美はわからないと首を振り、

「もうちよつとわかりやすく説明してくれる？」

「森さんもヴァンパイアになったんだよ」

ノー天気としか言いようのない笑顔。

ふつふつと湧き上がってくる感情は怒りだろうか。歩美は冷静に分析するが、そればかりとは言い切れない。様々な感情混ざり合い、蠢いている。生まれてこの方初めての心理状態だ。

にこり、歩美は恐ろしいくらいの微笑で茅ヶ崎を見つめる。体と心が歩美自身、不思議なほどアンバランスに動く。見た目は静かに、内部ではこれ以上ないくらいドロドロと。

「じゃ、あんたの血、吸わせて？」

声の調子はいつもの歩美だったが、その奥に含まれる感情は暗くて深い。茅ヶ崎はそれを感じ取っているのか、青ざめた顔で首を振る。

「どうして？」

「えつと、あの、同属の血を飲むのはど、どうかと思うよ」

「そうかしら？」

「それに、ええつと、第一まずい」

嘘だ。明らかに、その動揺の仕方は嘘。そう言えば、夢だと思っていた記憶の中で、何かとても美味しい物を飲んだ覚えがある。あれはもしかしくなくとも彼の血、だったのではないだろうか。

「——美味しすぎてダメって事？」

「いや、えつと……」

怪しいくらいに動揺している。どうやら確信をついたらしい。

「同属の血を吸うなんて倫理的に——」

「寝てる同級生の血を吸うのは良いんだ？」

「だから、ごめん——」

深深と頭を下げる。どんなに頭を下げられようとも、もうどうしようもない。

歩美は茅ヶ崎を壁際まで追い詰め、肩口に歯をたてる。本能的にどうすれば血が吸えるのか理解していることに気づく。何ともやるせない。

観念した顔の茅ヶ崎はされるがままといった表情。

「美味しい」

しばらく啜ってやっと歩美は茅ヶ崎の首元から牙を抜いた。口元を滴る血を歩美は舌で舐めとる。

「——だろうね」

当然だとばかり茅ヶ崎は呟き、

「想い人の血つてのはまた格別だから」

「想い人？」

「字のごとく。自分の事をどんな感情でも良い、考えている相手の血は格別なんだ

よ」

「へ〜」

歩美は感心顔。

「恐怖が最高のスパイスと言われてた時期もあったけど、昨今は親愛の情を持っている相手の血が一番美味しいと言われてるんだ」

茅ヶ崎は首元に手をやり、指についた自分の血を。へロリと舐める。その様子に目を離せず、歩美は上の空で尋ねる。

「茅ヶ崎は私に親愛の情を持つてるってこと？」

「ずっと好きだったからね」

ふてくされたように茅ヶ崎は呟き、バンソウコウと呟きながら寝室に消えた。

好きだった？

血が、ではなく私自身をと言うことだろうか？ でも『だった』って過去形だから、今はそんな風に思っていないのかもしれない。いや、そうだろう。高校卒業して十数年。ずつと思いつづけてるなどありえない。

歩美はようやくやく納得し、肩口にバンソウコウを貼り付け、再びリビングに登場した茅ヶ崎に確認しようと思いをあげる。

「今のつて——」

「血を通して感情伝わったでしょ？」

「どういう事？」

歩美は首を傾げる。

毒蛇だったかと小さく呟き、茅ヶ崎はヴァンパイアについて説明し始める。

茅ヶ崎をヴァンパイアにした男はずいぶんたくさんの人間の血を吸い、魔力を蓄えていた。だから、茅ヶ崎には吸った人間の血を通して相手の感情や考え、時には記憶までも読み取る事ができる。

だが、茅ヶ崎は最近最低限の食事しかしていない。一ヶ所に滞在しているのが長くなりすぎ、血を吸いにくくなってきた。引越しを考えるも、今の暮らし環境が肌に合っているため、引越し予定を延ばすばかりしている。

魔力をさして持たない茅ヶ崎が誠心誠意込めて歩美をヴァンパイアにしたところで、血を吸う最低限の力しか持たないのは仕方ない事。単純にしもべ——魂のない

人形を作りだすのであれば簡単だったが、そんなことはしたくはなかった。

「よくわからないけど、私は何の能力もないって事？」

「そう」

「だけどヴァンパイアだと」

「そう」

「人間的な生活はできないわけ？」

「できるよ」

茅ヶ崎は戸棚の中から錠剤が入っているらしき薬瓶を取り出す。張り付いた笑みを浮かべたマッチョな外国人の写真と、英語ではない小さな文字が書かれた栄養補助錠剤のようなもの。

「これは日光がへっちゃらになる薬、こっちは銀に触っても大丈夫な薬、それはニンクを食べても問題ない薬——」

「どこで売ってるわけ？ こんな怪しいもの」

「普通に。カタログとかネットのショップ」

「……世も末ね」

しみじみ歩美が呟くと、

「そうかな？ 便利な世の中だと思っただけ？」

きよとんとした顔で茅ヶ崎は答える。

日光がへつちやらになる葉をもらい、歩美は外へ出る。記憶にあるより太陽光が眩しさが、先ほど感じた身を焦がすほどの物ではない。

「森さん、どうする?」

「どうつて?」

駅に向かつて歩きつつ、のんびりと会話する。足をひねっているため歩美は早く歩けない。そんな歩美に合わせるように茅ヶ崎もゆっくり歩いている。

「今後の事だよ」

「別に。こんな薬があるんなら今まで通り生活するけど?」

その言葉に茅ヶ崎が重い息を吐き、

「食事はかからなくなるけど、薬代がかさむし、食事をとるのも大変だよ。今の世の中」

「……何が言いたいの?」

「好きでしょ?」

「何が?」

茅ヶ崎が何を言いたいのかわからず、歩美はむっと顔をしかめる。押し問答のとき会話がわずらわしい。

「一緒に暮らさない?」

「……何で?」

歩美はまじまじと茅ヶ崎の顔を見やる。

茅ヶ崎は確かに面倒見がいい。今回の責任をとろうと思っているのかもしれないが、歩美自身に生活力がないわけでもなく、今まで通り一人でも十分やっていくことができる。薬さえあれば今まで通りの生活を送ることも不可能ではなさそうだ。だから、わざわざ責任をとってもらわなくてもいい。

考え込む歩美を見やり、茅ヶ崎は忍び笑いからやがて大笑いになる。

「だから、振られたんだよ。森さん」

歩美の中に流れる血は、明確に気持ちを表しているというのに、本人はまるで気づいていない。大事なことほど見えない、わからないのだろう。

そう思うと茅ヶ崎はおかしくてたまらない。

自分が描いていた森歩美という女性像と、実際の森歩美はずいぶん隔たりがあった。それを知ることができた嬉しさ、そして、気持ちを告げる言葉の難しさ。なんと言うべきか考えていると、

「どういふことよー！」

自分の知らないことを茅ヶ崎が知っている。その事実には歩美は顔を赤くし、同時に腹を立てていた。

「いや、えつとね……」

「はっきり言いなさいよー！」

歩美に言われ、茅ヶ崎は開き直る。本当に天然な彼女にはストレート過ぎるくらいがちょうど良いのかもしれない。

「結婚して下さい」

「……………え？ いや、あの……………その……………」

思つてもみなかつたことを言われ、混乱し、取り留めのない言葉を歩美は吐き出す。茅ヶ崎はおかしそうに笑い、

「別に今すぐ答えてくれなくていいよ」

「何よ、それ」

むつと反論しかけた歩美の眼前に、小さな紙片を差し出す。

「何？」

「きつと必要になるだろうから。僕の連絡先」

「いらない」

「とつときなよ」

すばやく歩美のバッグに滑り込ませる。携帯だの財布だのが邪魔をしてすぐに取り出せない。

「もお、何するのよ」

「いらだつ歩美に、茅ヶ崎はマイペースなまま、

「電車の時間は大丈夫？」

「ヤバイ。じゃ」

挨拶もろくに交わさず、歩美はそそくさと切符を買い、電車に乗り込む。

発車を知らせるベルが鳴り響く中、息を整えつつ構内を見やると、茅ヶ崎が笑みを浮かべこちらを見ていた。発車の警笛が鳴り、電車が徐々に動き出しても、茅ヶ崎は手を振ったりはせず、ただ、何か確信している表情でこちらを見ている。

何もかも見通したその顔に腹立たしさを覚え、歩美は背を向け、座席に座り込む。バッグを漁ると、先ほど茅ヶ崎に渡された紙片。

あまり上手くもない字で、ただ一行、電話番号が記されている。

「何よ」

破ろうかとも思ったが、今が車内であることを思い出し、財布のポケット、レシート
の束に突っ込む。

アパートの鍵を開け、帰宅した歩美は数日前まで馴染みの我が城だったはずの部屋が、なんだか他人の部屋のような気がして首を傾げた。

わずか数日だというのに、どうしてこんな疎外感を感じるのだろうか？

不信に思いつつも、いつも通りの行動をとる。パソコンの電源を入れ、部屋着に着替え、コーヒーを淹れる。いつも通りのはずなのに、そこに違和感を感じて仕方がない。「どうして？」

自問するが答えはない。

とにかく、いつも通りに行動することだと自分に言い聞かせ、メールとニュースのチェックを行う。

やがて、増してゆく違和感の正体が「不安」なのだ気づく。迷子の子供のように、不意に親がいなくなってしまうた絶望的な孤独感。湧き上がる感情を簡単に説明するならばそれしかない。

「なんで？ ここは家よ？ 私は茅ヶ崎の家から帰ってきて……茅ヶ崎？」

茅ヶ崎の事を考えた一瞬、不安感が柔らいだことに気づく。

「茅ヶ崎に関連してる？ 連絡先、どこだっけ？」

財布の中身をばら撒き、数字の書かれた紙片を探す。レシートにまぎれ込ませた紙片はなかなか見つからず、泣き出しそうな自分を無理やり押さえ込み、レシートの山をかき分ける。

「あつた！」

震える指で携帯のボタンを押す。

「茅ヶ崎！」

絶叫。

「……森さん、思ったより時間がかかったね」

電話口から聞こえてくる苦笑交じりの茅ヶ崎の声。はつきりと安堵する自分の気持ちを支える歩美は自覚する。

嬉しい反面、腹立たしい。

「あんた、これ、どういふことよ」

我慢しようとするが、思わず涙が溢れ出しとまらない。茅ヶ崎は歩美の言いたいことをゆつくり聞き取り、

「森さん、説明するより体験してもらったほうが納得するタイプみたいだから……」
「どういふことよ？」

子供のようにしゃくりあげながら、歩美はつかえつかえ言葉を紡ぐ。これほど泣くのは十数年ぶりだろう。

「森さん、ヴァンパイアになったのは今朝だよな？ 生き物って大抵は生まれてしばらくは親と一緒にいるでしょ？」

「……で？」

なんとなく予想しながらも、歩美は茅ヶ崎の言葉の続きを促す。

「親である僕から離れるなんて、今の森さんの精神には無理なんだよ」

「何よ、それ」

「何って言われても……そういう風になってるわけだから」

弱り声の茅ヶ崎。今まさにその状態を体験している歩美は、確かにそういう風になっっているわけ。

「納得できないけどわかった。でも、そうしたら……だから、あんなこと言ったわ」

け？」

「違う」

真剣な声。

「でも、その説明を電話でするのは野暮だからしない」

そう言われ、歩美は頬を染める。

「それで森さん、この後どうするの？」

いつも通りのマイペースな口調に戻った茅ヶ崎が優しく尋ねる。

「どうするって？」

「その状態じゃ、今まで通り一人暮らしは無理でしょ？」

「……………うん」

不承不承といった口調ながらも、歩美はうなづく。ここで強がってみても、孤独感に押しつぶされそうだという感情など、自分ではどうしようもないのだ。

「帰っておいでよ。最低限必要なものだけ持って」

「ちよつと、帰るってどこによ？　ここが私の家よ？」

茅ヶ崎は声を立てて笑い、

「言い直す。僕の家に来なよ。駅で待ってるから」

一方的に電話は切れた。

「……………何よ、無茶なことやって」

腹立たしげに呟きつつも、歩美の手は小さな旅行カバンに荷物を詰めてゆく。

駅までの道を飛ぶように駆け、やってきた電車に飛び乗る。車中は茅ヶ崎への恨み言を呟きつつも、目的の駅が近づき、見覚えあるシルエットが目に入ると、嗚咽に変わる。

誰かに押されるようにして降りた構内には今朝方、車窓から見たままの茅ヶ崎。

「お帰り、森さん」

優しい笑みを浮かべた顔。

存在を目にすると、電話以上の効き目があることを歩美は実感する。飛び込んで来いとばかり両手を広げた茅ヶ崎の手前で、歩美は泣き崩れる。

茅ヶ崎は照れ笑いを浮かべつつも弱りきった顔で、うずくまる歩美に近寄り、

「お帰り」

「……ただいま」

歩美は、声をあげて泣きたい衝動にかられながら答える。

表現しようの無い爆発的で凶暴な感情が暴れている。まるで小さな子供だ。自分の無力さ、そして親という存在の偉大さ、絶対性。

世界は茅ヶ崎を中心に回っている。

今、そう言い切れてしまう自分自身に、不思議と奇妙さを感じない。

「……確かに、結婚するのが一番手取り早い隠れ蓑かも知れないわね」

良い歳した男女が一緒に暮らすとなると、世間をあざむくカムフラージュとしてはこれ以上のものはないだろう。

「そういう意味で言ったんじゃないんだけど……」

不満そうに呟いた茅ヶ崎の言葉は、泣き疲れ、うとうとし始めた歩美の耳には届かない。

「ちよつと、ここで寝ちやダメだよ」

「……わかってる」

言葉ではそういいつつも、まぶたは重い。小さな子供同様、あがらえない様子で眠りの世界へ落ちてゆく。

弱りきった顔をしながらも、茅ヶ崎はあの夜と同じように歩美を抱きかかえる。

「ごめん、迷惑かける……」

睡魔と闘いつつ、歩美は何とか声にする。

「それは言わない約束でしょ？」

「……ごめんね……」

安らかに眠る歩美の顔に、茅ヶ崎はあきらめ混じりのため息をつく。

「本当、森さんってこんな人だとは思わなかった」

魔法使いと黄色いペンギン

「イテテ……呑み過ぎた」

俺は覚醒するとともに、頭の痛みに手をやった。昨夜は久々に良く呑んだ。顔を見せれば何かと小言ばかり言う親父だったのに、最近は何のせいか性格がずいぶん丸くなり、昨日は妙に機嫌良く、酒を持つて訪ねてきたのだ。

「まだ酔つてんのかな……」

頭をさする。

なんだか妙だ。いつもならば天使の輪を持つ、自慢のサラサラヘアが手に触れるはずだった。

「ん？ どうなつてんだ？」

手には何も触れない。それどころか、何かふわふわしたやわらかい……。

言い知れない不安。

部屋の中は薄暗い。乱雑に積み上げた書物と道具類が窓と部屋を埋めつくしている。獣道のように細く顔をのぞかせている床をよたよた歩く。

二日酔いのはずなのに、体はずいぶん軽く、まるで雲の上を歩いているような気分。視線は膝までもないだろう。嫌な予感はずますます大きくなる。

玄関先まで約七歩。いつもなれば五秒掛からないはずなのに、今朝はずいぶん時間が掛かる。

玄関入つてすぐの姿見を見やる。目に付くよう、中央部に張り出された手紙。そ

して、そこに映し出された異様な物体。文面に首をかしげる。すると、同じく鏡の中で首をかしげる黄色いペンギン。

「……………え？」

鏡の中のぬいぐるみは不釣り合いな低い男の声をあげる。

「何だこりやあああああ！？」

連日の残業からやっと開放された。しかも、明日からは三連休。気分的に少々浮かれながら、私——芹沢咲良は会社を出た。

バス停にたどり着き、携帯のデジタル時計を見る。あと三分ほど。寒さに震えながら、吐く息で手を温める。見上げれば、ビルの間隙に広がる暗い闇、数えるほどの星。人工の光が多すぎて、幼いころ目にしてきた星空は望めない。

軽く失望しつつ、向かいのビルに目をやる。見るともなしに看板に目をやり、頭の中で読み上げてゆく。ただの暇つぶし。癖のようなものだったが、

「……………？」

細い路地に黄色の物体がすべり込む。大きな猫だろうか？ だが、派手な蛍光色をした猫などいるだろうか？

首をかしげ、時計に目を落とす。ちょっと見に行つて帰ってくるだけ——だったら

乗り遅れたりしないだろう。好奇心に負け、そちらに足を向ける。

路地からは男たちの言い争う、押し殺した声が聞こえてきた。係わり合いになりたくない。思いつつも私は好奇心に勝てず、そっと覗き込む。けれど、そこに誰の姿もない。ビルの中から声が漏れ聞こえてきているのかもしれない。

黄色い物体は私に背を向け、どこからか漏れてくる淡い明かりの中に座り込んでいる。後姿から見る限りペンギンのぬいぐるみ。自動で動くわけがない。よっぽど疲れているのだろうかと自分自身を納得させ、

「馬鹿馬鹿しい」

つぶやいた瞬間だった。ギョツとした様子でそのペンギンが振り向いたのだ。

「え？」

「見たな」

先ほど聞いた男の声。それがペンギンから発せられていることに気づけないほど距離は離れていなかった。どんなトリックがあるのか、ぬいぐるみが話し、歩いている。

「丁度良い、お前に決めた」

まぶしい光があたりを照らし、戸惑う私を包んだ。

寒さにくしやみをつつし、私は目を覚ました。ぼーつとする頭で辺りを見渡せば、玄関のあがりはなにどうやら倒れ込んでいるらしい。それにしても見覚えある部屋

だった。徐々に頭が働き始め、自分の安アパートだと気づく。

それにしてもなぜ？ 記憶をたどるが、バス停でバスを待っていたところまでしか思い出せない。別に寝起きも悪くないし、低血圧でもないし、酒で記憶を無くした事もない。そもそもお酒なんて今日は呑まなかった。なのになぜ？

自分自身に問いつつ、起き上がる。

「何でこんなところで倒れてるわけ？」

「よお」

男の声に、ビクリと周囲を見回す。が、誰もいない。

「ここだ」

ひぎの上でぴよんぴよんと跳ねられ、ようやくその黄色いペンギンに気づいた。ぬいぐるみだからか、体重は驚くほど軽い。

「……夢？」

「寝ぼけんな」

ぴしゃりと言われ、その荒唐無稽さのため息がでた。今までの平穏な人生はどこにいつてしまったのだろう。

「目が覚めたなら、こいつの百五十七ページを開いてくれ」

ペンギンはどこからともなく分厚い本を取り出す。中世ヨーロッパのお城の地下にでもあればいいような、ほこりっぽい、派手な装丁の本。

恐る恐る開いてみると、インクで書かれた複雑怪奇な図形や、ミミズがのたうちまわっているような文字が書かれている。

「これ、何？」

「魔法書だ」

「へー」

私の反応が予想外だとばかり、ペンギンは強面になる。可愛いが売りのぬいぐるみがそんな顔をしようと努力しても、意味はない。

「世界でも貴重な魔法書を目の前にして、その薄っぺらい反応は何だ」

「知らないわよ、そんなこと。で、これが何？」

開き直り、さつさと用を済ませようとばかり私が尋ねる。

「ま、今回のところは寛大な精神で許してやろう。俺も急いでるんでな」

「で、何ページだつて？」

「百五十七ページだ」

最初のページはばらばら見ることできたのに、中盤からページがくつついているのか開くことができない。

「あれ？ くつついちゃってるのかな？ 開かないんだけど……？」

無理やりこじ開けようと私が入れていると、ペンギンは慌てふためき、

「止める、貴重な本だと言っただろうが、馬鹿」

ポカスカと猫よりも痛くないパンチを私に見舞う。やがてペンギンは疲れたのか、がつくりと肩を落とし、

「お前、魔力無さすぎ」

ポツリと呟く。

「魔力って何よ。私、ただの人間だもん」

「人間でも魔力はあるんだよ」

ペンギンは講釈をうち掛けたが、そろりとその場から逃げようとしている私に気づき、

「待て、どこに行く」

「別に……」

「すぐごと座りなおす。ペンギンは偉そうに腕を組み、

「お前とは契約を結んでんだ」

「いつの間に？ そんなこと頼んでない」

「うるさい。とにかく、お前がどこに行こうと俺には手にとるようにわかるんだ。逃げようなんて無駄な努力はやめとけ」

ペンギンはまたよたと魔法書を開き、

「仕方ない、まずはお前の魔力を上げなきゃダメか」

言葉が終わると同時に、魔法書から光があふれる。それが先ほどペンギンを照らし

ていた光に似ていることに気づいた時にはその光に包まれていた。

金色の光の渦からあふれるように、ピンクの花が舞い、白いリボンが踊り、黄色い星が流れる。光はやがて虹色になり、色を失いつつも、ポップでメルヘンチックな小物が溢れ、私に触れるとポンと弾けるように消滅する――

「……何、この格好」

私は声を失っていた。

「いわゆる魔法少女つてやつだ」

ペンギンの説明はあまりに馬鹿げていた。

戦士、アマゾネス、女コマンドー……と言うならば話はわかる。飾り気の無い黒のタングトツプ。迷彩柄のパンツ。アーミーブーツに、重々しいベルトが肩と腰に巻きついている。

「これのどこが？」

「確かに、昨今の魔法少女ブームとはちよつと違うだろうが、戦闘力はダントツだ」

「魔法少女に戦闘力があるなんて知らなかったわ」

「お前の魔力を手っ取り早く上げるためだ」

私の皮肉をもっともせず、ペンギンはマイペースに話を続ける。

「とりあえず、雑魚を片っ端から倒して経験値稼ぐぞ」

片手を握り締め、赤い丸ボタンの瞳に黒い炎を燃やす。

「このペンギン、ぬいぐるみだけでも危ない。」

「敵って何よ?」

「へボ魔法使いとそいつらの手下」

吐き捨てる。何か因縁があるらしい。深い関わりあいにはなりたくない。私は話題を変える。

「それより、こんな格好で歩いてたらこつちが悪者だと思われるわよ」

若干言葉が丁寧になるのは背に腹は替えられないから。ペンギンは悪人面で口元だけに笑みを浮かべ、

「そのための魔法少女だろうが……長距離から狙え」

「うわあ、そのためのマジカルライフル?」

片手に持った武器を掲げてみせる。

「そうだ」

重々しくうなづく。

「あんた、嫌われてない?」

「それはない。天才である俺がねたまれることはあっても、嫌われるなんて事実はない」

「あ、そう。それより、私、二十歳過ぎてるから、少女つてのはちよっと世間的に問題が……」

「問題ない、変身してる間は少女だ」

意味がわからず、姿見を覗き込む。見返すのは短髪で、ボーイッシュな印象のミリタリーグッズを身にまとった少女。

「うわ、何これ」

「説明しただろうが、変身すれば魔法少女になると」

「……十年くらい前の私の顔とは違うんだけど？」

「そういうもんだ」

話は終わりとばかり。ペンギンがヨチヨチと私に近づく。

「あの、それに私、仕事あるんですけど……」

「明日から世間一般では三連休だろうが」

「……よくご存知で」

残業疲れをとるため、だから過ごす予定だったのだが。

「三日あれば十分だ。それより、俺を抱えあげろ」

「は？」

「この足で長距離歩くのは手間なんだよ」

言われるまま、ペンギンを抱える。口は悪いが、ふんわりと優しい手触りのぬいぐるみを思わず抱きしめる。

「止める、離せ。苦しい……」

「ああ、ごめん」

「つたく、魔力の高いあの場所にたどりつくまで、半日がかりだぞ？」

あの場所というのは、どうやらあのありふれた、何の変哲もない路地のことらしい。途中でガキに追いかけられるわ、捕まるわ、つたく」

見た目のファンシーな可愛さに反して、中身は極悪極まりない。

「それより、この格好で歩くのは悪目立ちするんですけど」

愚痴を漏らすペンギンの言葉を遮り、私は気になっていたことを尋ねる。普通の魔法少女っぽい格好も恥ずかしいだろうが、この格好も十分場違いで恥ずかしい。

「変身解きやいだろうが」

ペンギンが両手をポンとあわせると、変身はたちまち解け元に戻る。

「あんた抱えてるとそれでも目立つんだけど」

「さつきよりはましだろうが」

翌日から始まった経験血の荒稼ぎは驚くほど順調だった。ペンギンが指定した相手——たぶん魔法使いか、その関係者を私はずいぶん距離のある物陰からマジカルライフルで狙い撃ちするだけなのだから。

ライフルは見た目はそのものごついものだったが、魔法少女だけのことはあり、引き金を引くと可愛らしい音とともに、黄色い星だとか、小さな白い花だとか、ピンクのハートが飛出し、金色の光やら銀色の光が相手を貫く。

しかも、自動追跡装置でもついているのか、大体の場所を狙って打てば勝手に目標に当たってくれる。その原理を尋ねた私にペンギンは難しい専門用語を用いて語ったので、私には何のことやらさっぱりわからなかった。

撃たれた相手は怪我をした様子も無く、驚いて倒れることはあつても、ただそれだけ。それについての説明もペンギンはしかけたが、私があくびしているのを見た途端黙り込み、続きを語ろうとはしない。

三日目ともなれば慣れてくる。

「なんだか悪役の気分よ」

スコープを覗き込みながら私が漏らせば、

「馬鹿言え、こつちに気づかないあいづらが悪いんだ」

ペンギンは望遠鏡を覗き込みながら、次の獲物を探す。

「あの青い服の男だ」

「オッケー」

この場にそぐわぬ可愛らしい音とともに、ファンシーな魔法が銃口から飛び出し、相手を貫く。相手はよろめき、辺りを見渡すが、物陰に隠れたペンギンと私には気づかない。狐につままれたような顔をして、そのまま立ち去ってゆく。

「よし、」

ペンギンは精一杯物陰に隠れ、相手が立ち去るのを見届けると、相手に対する罵

冒雑言を吐きつつ、盛大な笑い声を上げる。悪役っぽいと私が思うのは、このせいでもある。

可愛らしいベルの音がして、私の頭上でポンとくす玉でも割れたかのように、色とりどりの花びらが舞う。私の魔力が上がったのだ。これで何度目だろう。魔法で出現したそれらは、地に触れることなく消えてゆく。

「ねえ、もうあのページ開けるくらい魔力アップしたんじゃない？」

私が尋ねるが、ペンギンはそれどころじゃない様子で、

「次はこっちだ、黄色い馬鹿みたいな帽子かぶってる女だ」

「次は、右手の派手なジャケットの若いやつ」

「お次は、その向こう……」

日が沈む頃、ようやくペンギンの気が済んだのか、晴れ晴れとした顔で私を見やる。

「……え？」

「『え』じゃない」

私は強面で微笑む。

「この格好、どう見てもレベルアップしたからよね？」

装備している武器が格段に物騒なものになっている。装甲車の一台や二台、何とかなりそうだ。

「魔法書、貸して」

ペンギンから奪い取るように魔法書を開く。凶形にしか見えなかった文字がすらすら読める。ペンギンがこだわっていたページには『魔法使いを封じる魔法』が記されていた。

「へー、魔法使いを器となるものに閉じ込め、一定の条件をクリアすれば元に戻る魔法……ねえ」

じろりとペンギンを見やる。

「解除の魔法が書いてあるだろ？」

「無いわよ、ほら」

ペンギンに見せる。

「……読めない」

「あんた、自分のこと天才だとか言ってなかった？」

「封じられたときに魔力も封じられたんだよ」

「へー、それで？ 一定の条件つて何言われたの？」

私が詰め寄ると、ペンギンは目をそらし遠くを見やる。

「何て言われたの？」

ペンギンは泣きそうな顔で、

「……みんなと仲良くする」

「ほお」

69 宵闇色の空

私はマジカルロケットランチャーを。ペンギンに向け、
「ちよつと待て、冗談だつて——」
ためらいなく引き金を引いた。

マイペース

日本人形のような、と称される容姿をした智里さんはとてもマイペースな女の子でした。生まれて十七年。誰よりも波乱とは縁のない人生を送っていましたが、高校三年のある日のことです。

「智里」

学校から帰ってきた彼女は居間で難しい顔をしている両親に呼び止められました。

いかにも人のいいおばちゃんな雰囲気の母が見慣れないスーツ姿で正座していました。

「話がある」

重々しく口を開いた父もスーツ姿です。

「座りなさい」

不信に思いながら智里さんは両親の前に腰をおろしました。

「実は——」

声を上げかけた父ですが、考え込むように黙り込み、要領を得ない言葉をつむぐのみ。

日本人形のような、と称される智里さんですが、そこは現代っ子。正座など普段することがありません。五分もたたないうちに足がしびれ、両親の話を聞くどころではなくなってしまうほど。

「……今さらだとは思ったが、お前の幸せを考えるとこうするのが一番いいんじゃないか……母さんとも話し合った結果だ」

「そう」

話を聞いていなかった智里さんでしたが、部屋の中の空気はなんとも居心地の悪いもので、たずね返すこともできません。

翌日はちようど十三日の金曜日でした。智里さんはそれに気づきましたがうちは仏教徒だからと眉一つ動かすことなく、学校へ行く支度を整えました。

「智里っ」

いつものように台所に行くと母が息を呑みました。

「その格好で……?」

何を言いたいのかわからず、智里さんは穏やかにうなづきました。母は泣き出してしまい、智里さんは慌てて落ち着かせるように言い聞かせます。

「大丈夫よ、お母さん。泣かないで」

「母さん、」

父が泣き声を聞きつけたのか、台所にやってきました。いつもならば仕事へ出かけている時間です。

「智里、準備ができたのか」

「智里さんはうなづきます。」

「じゃあ、行こうか」

どうやら送ってくれるようです。今までになかったことだと思っていると、

「智里、元気で……」

「はい、お母さんも」

学校へ行くだけなのに大げさな、と思いながら智里さんは返事を返しました。

学校まで車で二十分ほどなのに、高速を使い、一時間半も走って到着したのは大きなお屋敷の前でした。車に乗るとすぐに眠たくなる智里さんは、道中、ずっと眠っていたので「ここ」がどこかわかりません。

「智里、こっつちだ」

父は慣れた様子でそのお屋敷に入ります。智里さんは顔にクエスチョンマークを浮かべながらも後に続きます。

表玄関と思しき場所にタキシードに似た服装の男がたたずんでいました。

「智里を連れてまいりました」

父は深深と頭を下げ、恐縮しきった様子で話し掛けました。良くはわかりませんが、父の仕事先の関係なのかもしれないと智里さんは思い、慌てて頭を下げました。そうであれば失礼なことをするのは先日部長に昇進した父の為にもなりません。

「智里様、お帰りなさいませ。私は執事長の宇佐美と申します」

執事は智里さんに深々と頭を下げました。

「こちらへどうぞ」

重々しい扉が開き、ドラマのセットよりよほど立派なお屋敷内に智里さん一人招

き入れられました。

「あの、父は？」

執事の案内で長い毛足の高そうな絨毯が張られた廊下を歩きながら智里さんは尋ねます。

「後ほどお会いなさいます。まずはお着替えを」

高級ホテルなのだろうか、と智里さんは思いました。智里さんは家族旅行でも一泊八千円の部屋に泊まったことしかありません。

通された部屋は台所と茶の間と玄関と……家と比べているとなんだか虚しくなってきたので、智里さんは部屋の広さは考えないことにしました。

ゴシック調の窓枠にかけられた淡い草色のカーテンには同色の刺繍が施され優しい彩りです。素敵だなぁと眺めていると、

「失礼します。世話役を仰せつかりました亀井と申します」

三十歳くらいの女性に声をかけられました。黒いタイトスカート姿ですが、ここがお屋敷であることを考えるとメイドかもしれません。

「今日はこちらのお洋服はいかがでしょう？」

彼女が広げて見せたのはモノトーンチェックのワンピース。胸から上は黒一色のデザインです。

「素敵ですね」

「では、こちらにお召し変えを」

言われ、制服のジャケットを脱いだ智里さんでしたが、彼女は部屋を出ようとはしません。いくら同性とはいえ智里さんは人の前で着替えるのには抵抗があります。

「着替えるまで外にいてもらえませんか？」

「わかりました。着替え終わりましたらお呼び下さい。失礼いたします」

扉が閉まるのを確認し、智里さんはいそいそとワンピースを着込みます。それはまるであつらえたように智里さんにぴったりです。

鏡台の前で自分の姿を眺めているうち、ずいぶん時間が過ぎてしまいました。彼女は不安そうな声で部屋の扉を開けました。

「失礼いたします——まあ、よくお似合いですわ」

再び部屋に入ってきた彼女は、智里さんを鏡台の前に座らせ髪を梳きはじめました。

彼女をメイドだと思つてた智里さんでしたが、スタイリストかもしれないと思いつながら、鏡に映る滑らかに動く彼女の手を見つめていました。

「……身代金を支払った直後、犯人側からは何の音沙汰も無くなったのですよ」

「へえ」

「乳飲み子を民家の前に置き去りとは、酷い話ですわ……」

彼女はドラマか何かにはまっているらしく熱心にその話をしていました。智里さん

は興味も無いので適当な相槌を返していると、

「さ、これでよろしいですわ」

やっと終わったようです。これはサービス料に含まれているのかしら、と智里さんは頭をひねりました。

そこへタイミンクよくノックがあり、執事が姿をあらわしました。

「皆様お待ちです」

智里さんは皆様とは誰だろうと思いつらせながら執事のあとに続きます。

「当家の……」

執事は歩きながら左右にある調度品の説明をはじめました。智里さんは退屈なので適当に合いの手をはさみながら、完璧に掃除の行き届いた廊下に塵を見つけてやろうと熱心に目を光らせていました。

「……簡単ではございませんが」

ちようど到着したようです。執事の話はまったく聞いていなかった智里さんでしたが、穏やかに微笑みながら、

「ありがとうございます」

と、答えました。世渡りだけは上手い智里さんです。

通されたそこは食堂と言うことでしたが、宴会くらい楽に開けそうな大広間でした。智里さんはテーブルについている人々の顔を見渡し、驚きました。自分と良く似

た顔が並んでいたからです。

「智里、お帰り」

一番奥にいる初老の男性が嬉しげに声を上げます。

「パパ、先に言っちゃうなんてずるいわ！ 智里さん、さ、席について」

男の右手に座っている自分に良く似た女性が微笑みます。残り二つの席にも智里さんに似た、年上の男性が座っています。

執事に促されるまま、智里さんは引かれた椅子に腰掛けます。高そうな調度品に気落ちしつつも、目の前に並べられた豪華な昼食にお腹は歓喜の声を上げます。

「では、いただきますしょう」

女性の声を合図に、食卓にはゆつたりとした音楽が響き始めます。智里さんは次について食べられるかわからない美味しい食事を堪能し、食卓を囲む四人から繰り出される質問には適当に答えました。

「智里、学校へはいつから行くかね？」

食後、旦那様と執事が言っていた男に聞かれ、智里さんは今日はまだ金曜日だったことを思い出しました。

「今からだと遅刻ですね」

「今日から？ 智里はズいぶんまじめだね」

そんなことを言われたことがないので、智里さんはなんと言ったらいいものかわか

らず黙り込んでいます、

「では車を用意させよう」

送っていつてくれるようです。どこの誰かはわかりませんが、ずいぶん親切です。智里さんは自分が今、どこにいるかもわからないのでそうしてもらった方がありがたいのだと気づき、慌ててお礼を言いました。

それにしても、と智里さんは眉間に皺を寄せました。父に高級ホテルのようなところへ連れて行かれ、豪華な昼食を食べていたので遅刻した——なんて遅刻理由、真実であっても誰が信じるでしょう？ どう説明するのが一番いいのか……熱心に嘘だと言えない言い訳を考えていた智里さんは旦那様が執事に言った言葉を聞いています。

「……だな。宮下君を呼んでくれ」

「智里さん、そのお洋服で行かれる？」

奥様に話し掛けられ、智里さんは我に返りました。せっかく着替えた素敵なワンピースですが、学校に行くともなると当然着替えなければなりません。

「あの、さっきの部屋は……」

「緒方、智里さんを部屋へ。お洋服はいろいろ用意してあるからお好きなものをお選びなさい」

学校には制服で行くものなのに、奥様は妙なことを言うと思いつつも智里は素

直に感謝の言葉を述べました。

先ほどの部屋まで執事——緒方さんが先導してくれ、智里さんはすばやく朝着ていたセーラー服に着替えました。

「お嬢様、その格好で？」

不思議そうな緒方さんの声に、智里さんは怪訝な顔で、

「ええ、学校へ行くのですから。授業が終わる前に行きたいのですけれど」

「承知しました」

不承不承の様子ながら緒方さんは表玄関に連れてきてくれました。大きな家に憧れていたけれど、大き過ぎるのも考え物だわと智里さんは思いました。

玄関にはずいぶん大きくて立派な車が止まっていました。

「これ、ですか？」

「こちらでございます」

執事が確信をもつてうなづき、運転手もドアを開けて智里さんが乗り込むのを

待っています。それは黒塗りのベンツだかロールスロイスだかわれる車です。いくら智里さんでもそれが高級車であることは知っています。

これはオプションサービスなのかしら？

智里さんは父の財布の懐具合を心配しながら乗り込みました。

「到着いたしました」

運転手に扉を開けられ、智里さんが見たそこには見たこともない立派な校舎がそびえていました。

「ここ、どこですか？」

昨日まで智里さんが通っていたのは変哲のない灰色のコンクリート校舎でしたが、今日の前に映っているのは赤レンガがも素敵な洒落た校舎です。

「学校でございます」

「……そう、ですか」

朝から不思議なことばかりです。智里さんは首を傾げつつも、運転手に案内されるまま教務室へ進みます。運転手は教務室に到着すると、奥にいた初老の男性と話しました。

時間はちょうど昼休み真つ只中らしく、大勢の学生たちが私服で行き交っています。紺色の、智里さんが着ているいかにも制服めいたものを着ている人は誰もいません。

初老の男性が四十代の女性を呼び寄せ、話は続きます。

「……でよろしいですね。では、お嬢様をよろしくお願いいたします」

やっと話は終わったようです。女性の後について行くよう初老の男性に言われたので、智里さんは興味深そうに周囲を見ながら歩き出しました。途中、女性に何度か話し掛けられましたが、聞いていなかった智里さんは適当に返事を返しました。

連れてこられた部屋に智里さんは驚きました。同世代の人間が十数人座っているところを見ると教室のようです。ですが、とても明るくて綺麗で広々とし、机もカーテンも、何もかもが豪華なものでした。

「……というわけで、席はあちらですよ」

智里さんが教室内に気を取られているうちに何か女性からクラスに話があったようです。智里さんは見たことも無い人たちの間をすり抜け、指示された席につきました。

昨日までの学校の机と椅子はどこへ行ってしまったのだろうかと思っただろうと智里さんは考えました。目の前にあるのは学校ではなく会社の社長室にありそうなデスクですし、椅子もクッションが利いていてとても座りごこちが良いものです。

「授業、終わったよ?」

不意に話し掛けられ、智里さんは顔を上げました。なぜ中学生の少年がここにいるのだろうかと思いましたが、よくよく考えれば隣の席に座っていた同級生です。

「部活は何にするの?」

「私は天文部よ」

何をあたりまえのことを聞くのとばかり智里さんは答えました。

「じゃあ一緒だ。部室はこっちだよ」

彼の言葉に首を傾げつつも、少年の後に続きます。天文部に彼のような学生がい

たとは智里さんの記憶には無かったからです。

部室の扉を開け、中に入った智里さんは思わず目を見張りました。天井には無数の星星が輝いています。

「結構良くできてるでしょ？」

黒い布に星図と同じ間隔であけられた小さな穴から光が漏れ、まるでプラネタリウムのような様子です。

「素敵」

声も無く、天井を見上げます。

「話を聞いたときには……」

少年が切り出しにくそうに話し掛ける話に対し、星図と寸分たがわぬ見事なできに感心しきつっている智里さんは適当に返事を返し、

「……かもしれないって思った」

「ええ、そうね」

何を言われたのかわからないまま、頷きました。

「お嬢様、遅うございましたね」

運転手はずっと待っていたようです。智里さんが車に乗り込み、家に連れて行ってくれるよう頼むと運転手は笑って、

「承知してございます。今日はお疲れの様子ですね」

「驚くことばかりで——」

「そうでございましょう」

光を利かせてくれたのか、窓から入ってくる光はずいぶん柔らかになりました。さすがは高級車。窓からの光まで調節できるようです。

智里さんがうつすら目をあけると、降るような小さな花の刺繍を施された柔らかな布が周囲を取り囲んでいます。寝ぼけているのかしら、と寝返りをうった智里さんでしたが、肌に触れるシーツは柔らかく、光沢があり、いつもの綿百パーセントとは明らかに異なりました。

「えっ？」

飛び起きた智里さんは夢がまだ覚めていないことに愕然としました。

「お目覚めですか、お嬢様」

昨日のスタイリストです。いつからそこにいたのか、寝言は聞かれなかっただろうか
と智里さんが気をもんでいると、

「お夕食の用意が整いましたので……」

どうやら今、来たばかりのようです。智里さんはそつと胸を撫で下ろしました。
「……とのことで、旦那様も奥様も大変お喜びでしたわ」

嬉しそうに微笑むので、彼女の言ったことを聞いていなかった智里さんでしたが、
「それは良かったです」

「お嬢様が目覚められましたら食堂へお通しするよう仰せつかつております」

舌をかみそうな台詞も彼女はたやすく口にしました。食堂につくまで智里さんは何度もそれを胸中で反復してみたのですが、やはり自分では上手くしゃべれそうもありません。

「こちらが勝手にお願いしていたことではありましたが、今の時代、やはり本人達の意思も……」

嬉しそうな奥様の声に智里さんは我に返りました。テーブルの上には昼以上に豪華な食事が所狭しと並んでいます。昼食で食べた以上の料理など想像もできなかったので、お腹は声をあげるのさえ忘れてしまっています。この中で智里さんが食べ慣れているものといえは、彩りに添えられたパセリくらいかもしれません。

「おめでとう智里さん」

「おめでとう」

「おめでとうございます、お嬢様」

「あ、ありがとうございます」

智里さんはわけもわからず、照れ隠しのように微笑みながら言いました。食堂にはどこから沸いて出たのか、メイドや執事や運転手、いろんな人が溢れていました。口々におめでとうと言いますが、奥様の話を聞いていなかった智里さんには何がおめでたいのか検討もつきません。

「良かったわ……」

奥様はどうやら話をするのが好きなようです。母も良くしゃべるほうだけれど奥様にはかなわないかも知れないと思っていると、

「……ですものね」

ふいに視線が集中しているのに気づき、智里さんは赤くなりながら小さく頷きます。

「本当に私、これほど嬉しいことは無いわ。では式は卒業を待つてすぐにと先方にもお伝えしましょうか」

何の式なのかわからないまま、智里さんはもつとご馳走が食べられるのかも知れないと頷きました。

「本当に良かった……」

奥様の話はまだ長々と続きます。せつかくのご馳走ですがいつになつたら食べられるものか、お腹も不平の声をあげています。

智里さんは飽き飽きして時計を探しました。精緻な陶器の人形が頭上に金色の文字盤を抱き壁にかかっています。見難い文字盤から何とか時間を読み取るとどうやら八時を回っています。

「奥様、」

智里さんの呼びかけに、室内にどよめきが起こりましたが智里さんはかまわず続

けました。

「うちの両親が心配していると思うので、今日は失礼させて下さい」

「——智里さん？ 私、あなたが今、何をおっしゃったのか……？」

よろめいた奥様を旦那様が支え、自失した顔で智里さんを見やります。智里さんはそんな周囲の様子など気づきもせず、

「電話をお借りします。父に迎えに来てもらうので、車は結構ですから」

灰色の雨

一・藤田大輝 フジタタイキ

六月の始めといえ、例年にもれずこの街は梅雨の真つ只中だ。空色がどんな色だったか忘れてしまいそうなほど、空は灰色で厚く塗りつぶされ、雨は一定のリズムを刻みつつ、街を水の中に閉じ込めようと必死になっている。夕方になってもその雨脚は弱まることもなく、帰宅する人々にも容赦ない。

「美咲ちゃんまた外れ」

野々村の声に我に返った。職場で、仕事申中だというのに雨に見とれていたなんて自分らしくない。気恥ずかしさを隠すため、大輝は興味もないのに尋ね返す。

「美咲ちゃん？ 彼女か？」

「あれ、藤田さん知りませんか？」

若いやつは自分の知っていることは周囲が知っていて当然だと思っている。……と、二丁下の野々村を若者呼ばわりしている自分が虚しくなってくる。

大輝の様子などお構いなしに野々村は説明しはじめる。

「朝のテレビに出てる天気キャスターの子なんですがね、可愛いんですよ——」

放っておけばいつまでも一人でしゃべっているタイプだ。野々村のおしゃべりは続いたが、大輝は適当に相槌を打ちつつ、窓の外を見やる。

降りつづける雨を見飽きることなく見つづける。雨だけは何時間見ても飽きることがない。

灰色をした街は天のシャワーを受け、より濃い灰色へと姿を変え、赤や緑、白や青、いつもならば美しいと感じる色でさえ薄い灰色をかぶり醜く濡れそぼっている。雑音が消えてしまったのに気づいたのは、それからずいぶん時間が経った頃だった。オフィスには誰の姿もない。挨拶を交わした記憶が無いでもないが、不確かなものではない。それほど熱心に雨に見入ってしまった自分が苦笑しつつ、立ち上がる。机の奥に放り込んでいた折り畳み傘を引つ張り出し、会社を出る。

家の近所にある児童公園まで帰ってきたときだった。いつもであれば誰かしらの姿がある時間だが、さすがに雨の中、誰もいない。雨に濡れた滑り台、活気の無い公園を照らしたす外灯。非日常的な光景に、不意に背筋に怖気が走る。

——キーコ

ブランコのきしむ音。大輝はぎよつと、音のしたほうをゆっくり見やる。ブランコに人影。白い服——出たか？と思わず身構えた瞬間、彼女と目が合った。若い女性だ。傘もささず、白いワンピース姿で、地面に足をつけ、乗ったブランコをゆらりゆらりと揺らしている。大輝は魅入られたかのように公園に足を踏み入れる。

膝までのスカートからのぞく白い足。ベージュのパンプスが雨にぬれ変色している。いつからここにいたのか、完全に塗れた髪が雨で肌張り付き、寒さの為に白くなった肌は何よりも美しい色として彩っている。足があるところを見ると幽霊ではなさそうだが、もう少し暗くなれば見分けがつきそうに無い。

「雨、降ってますよ」

なんと声をかけてよいものやらわからず、妙な事を言つてしまった。言つたあと、大輝は自分の言葉に恥ずかしくなる。

何と言われたか考え込むように瞬きを繰り返した後、彼女は大輝を見やる。

「良いんです、」

彼女は何かを言いかけたが言葉を発することなく、暗い瞳で笑う。

「もう良いんです」

二・藤田阿佐美 フジタアサミ

住宅街の一角。亡き父が三十七年ローンで建てた家は支払い終わっているものの、その分痛みが激しい。補修する箇所は多く、思い切つて立て直したほうが早い。わかつていても、先立つものの無い現状では素人の日曜大工であちこち手を入れながら住み続けている。

柱時計が六時を打つてずいぶん過ぎた。父母の新婚祝いに恩師から貰ったと言うそれは、主亡き今も現役だ。

「遅いな」

食卓に料理を並び終え、阿佐美が時計を見上げながら呟いた時、

「ただいま」

大輝の声が響く。だが、どこか後ろめたそうな響き。

「おかえり〜」

阿佐美はニヤつきを抑えながら玄関に向かう。普段は感情の無いアンドロイドのような大輝だが、雨の日には人間らしさを取り戻すらしい。

「今度は何？ 犬？ それとも猫？」

普段ならば即刻保健所に通報するくせに、雨の日には情つてものが湧き出てくるらしい。雨にぬれた小動物を連れ帰ってくるのだ。

「いや、」

大輝は口籠もる。動物を飼いたい阿佐美と、飼わないと言う大輝。けれど、本人が拾ってきたのならば仕方が無いでしょと押し切り、阿佐美は犬のシロと猫のニヤア、ミイを家に置いてやっている。

今度は何だろうか、と阿佐美がにやついていると――

「どうぞ」

大輝が外に声を掛け、入るように促す。

「こちらはや？」

大輝に尋ねる。屋根の下、雨のかからない場所にたたずんでいたのはずぶぬれの女性――阿佐美より少々若い二十四・五歳の女性だった。

口籠もる大輝を睨み付け、風呂場に向かう。バスタオルを持って引き返し、
「お風呂できてるから入って。服——私のも大丈夫かな。サイズは？」

急いで彼女を風呂に放り込む。触れた肌は風邪を引いてもおかしくないほど、冷たく冷え切っている。何時間雨の中にいたのだろう。

「あんた何やってんのよ！」

押し殺した声で、自分の部屋に引き上げようとしている大輝に問う。

「何もしてないよ」

いつも通りの声。何もやってないからあんな状態になってるんでしようが。怒鳴りつけた気持ちを押し殺し、さっさと着替えて降りてくるよう言い渡す。雨の日はいつもと少し思考が変わっているのだが、それにしたって若い彼女を何時間雨の中に放り出していたのだろうか？

着替えてリビングにやって来た大輝はいつも通り食卓につく。料理に手をつけようとすると大輝に、凍てつきそうな瞳を向けてやる。大人しく箸をおくのを見届けてから、

「さて。話していただきましようか？」

「話して……話す事はないんだが」

煮え切らない。

「彼女は誰？ 兄さんとどんな関係なわけ？」

答えない。大輝はあらぬ方を向き、時間が過ぎないかと願うばかりの顔をしている。「三十歳前の癖に彼女の一人もいないと思つて心配してあげてたのに——いいわ、本人に聞くから」

「ちよつと待て」

「待たないわよ、誰が待つもんですか」

パタ。パタとスリッパの音を響かせて、風呂へ向かう。

「お湯加減どう？」

脱衣所の戸を開けると、まだそこで彼女はたたずんでいた。阿佐美がタオルを肩に掛けてやったそのまま。

「ちよつと、早く入らないと本当に風邪引いちゃうわよ」

タイミングよくくしゃみ。

「ほら、早くお風呂入つて。濡れた服はその辺置いといて——迷惑とか言わない。さっさとして」

彼女は言われるままにのろり動き始める。リビングに引き返した阿佐美は黙り込み、重い沈黙が満ちるリビングで彼女が現れるのを待った。

三・木村恵 キムラメグミ

ざぶり、思い切って肩まで使ったお湯が体温の無い体には熱い。急に流れはじめた血管はじんじん痛むような痒さを伝える。

私、何やってるんだろ。ばしやりと顔にお湯を掛け、手足を伸ばす。寒さで縮こまつていた手足は真つ赤だ。

今日は朝から最悪だった。いつも見てるテレビ番組の占いコーナー結果は最下位。憂鬱な気分だったけれどそれで仕事を休むわけにもいかず、気にしてなければ当たりはしないと自分に言い聞かせた。けれど。なぜか今日に限って占いは良く当たった。仕事ではミスを連発し、やんわりと早退を言い渡された。帰りがけに派手に転び、その時財布を落としたりしい。携帯も電池切れで動かない。仕方なく歩いて帰ろうとしたものの、引越して間も無いこともあり、道に迷い、交番は見つからず、靴ずれが出来てまともに歩けなくなり、ようよう見つけた公園で途方にくれてブランコに座り込んだのだ。

「占いはなんていつもは当たらないのにさ」

最悪の結果の日に限って的中しなくても良さそうなものだ。その上、見知らぬ男性の後をふらふらついて来てしまふ風呂に入っている。どう考えたつてあり得ない。

あの女性……奥さん、よね。そう思うと、恵は二十分前の自分を叱りつけたくなった。知らない人についていつちやダメだってことは幼稚園児でも知っていることだ。彼女に何をどう説明すればいいのだろうか。考えると気分は重い。

玄関を入つてすぐ、奥さんは冷たい瞳で男性を睨んでいた。恵のことを浮気相手だと勘違い——しないほうがおかしい。今日一日の説明をしたところで誰が信じると言ふのだから。

体が温まつてくると自分の馬鹿さ加減に嫌気が差した。恥ずかしくて、穴があればもぐり込んで埋もれてしまいたい。が、いつまでも風呂に入つてゐるわけにもいれない。迷惑を掛けた二人に頭を下げなければ人として問題だ。覚悟を決め、風呂から上がる。

用意されていたTシャツにジャージを着込む。少々小さいが、文句は言えない。脱衣場の扉を開ける音に気づいたのだろう。奥から先ほどの女性が顔を出す。

「ありがとうございます、すいません——」

勢いよく頭を下げた恵に、女性は優しい笑みを貼り付けた顔で、

「いいえ、さ、こちらへどうぞ」

「あの、これ以上ご迷惑は——」

「いいえ」

有無を言わさない口調。その先には修羅場が待ち受けているのだとわかっていながらも、後には引けない。恵はあとに続く。通されたリビングでは先ほどの男性が着替え、困惑顔で座り込んでいた。平穩な家庭に要らぬ混乱をもたらしたのだ。三十分ほど前の自分には叱るだけでは済まない。落ち込み、自暴自棄になつていたのではあ

るが、そんな言い訳で通用するかと怒鳴りつけて――

「ここへどうぞ」

女性に言われ、恵は我に返つて椅子に腰をおろす。椅子は四つあるが、普段は二つしか使っていない様子。準備されたダイニングテーブルの上に置かれた料理はまだ手がつけられていない。

「名前、名乗っていませんでしたね。私は藤田阿佐美です」

女性に言われ、恵は改まつて頭を下げた。

「――木村恵です」

「そう。それで、恵さんはなんでびしょ濡れだったの？」

犯人の見当がついているとばかり、阿佐美さんは男性を睨みつける。非があるのはすべてこちらで、まったくこの男性とは関係ないというのに。

「あの、助けてもらったんです」

話を合わせてもらおうと男性の顔をちらりと見やる。男性は不思議そうな顔をしてこちらを見ている。仕方なく、今朝からの出来事を話すことにした。聞いたところまで信じてもらえるとは思えないけれど。

「――ということ、この方とは一切関係ないんです」

語り終った恵を阿佐美さんはきよとんとした顔で見つめ、

「……それだけ？」

問われる。それ以上も以下もない。恵は素直にうなづく。阿佐美さんは肩を震わせ——怒っているのだろうと思ったら、声をあげて笑い始めた。男性はそんな阿佐美さんを不思議そうな顔で見ているだけだ。

ただ一人、目に涙まで浮かべ爆笑しおわると、阿佐美さんは恵に料理を勧めた。恵は勧められるがまま、ずるずると食事を取り、食後のコーヒーになぜかデザートまでご馳走になった。

四・藤田大輝 フジタタイキ

「あの、本当にこの度はご迷惑をおかけしました」

食事が終わったところで彼女は深々と頭を下げる。妹は他所向けの仮面をかぶったままで、

「いえいえ、たいしたことなどしておりませんよ」

コーヒーにデザートを出してくる。いつもはこんなもの無いのに、いつ用意したのだろう。亡き母にしろ、我が家の子ども以外の良さは不思議でならない。粗野で乱暴だとしか思えない妹だが、ご近所では優しく朗らか、親切で女性らしいと別人のような評価なのだから。

「お住まいはどこら？」

自然な流れの誘導尋問は続く。彼女、完全にはまりきり会話に不自然さを感じていない。

「まあまあ、じゃあそれほど遠くないわね」

妹は自然な動作で時計を見上げ、大げさに驚く。そして申し訳なさそうな顔。完璧な演技だ。だが、それは見慣れた人間にしか見抜けない。

「あらあら、遅くまで引き止めてごめんなさいね。荷物もあるから……兄さん、送って差し上げて」

「え？」

驚く彼女。自分も驚いたが、

「あ、ああ、そりやそうだ」

立ち上がる。不気味に光る妹の目が怖い。他人には親切そうな笑みを浮かべた表情にしか見えないうが、こういう顔をしているときは逆らわれないに限る。

妹は手早く彼女の荷物をまとめ、僕に渡す。本人に持たせれば——と思ったが、持ってみれば濡れた衣服はずしりと重い。

「でも」

彼女の困惑に妹は勝ち誇った顔。

「その服はかまいませんよ、不要でしたら捨てて下さい」

サイズが合わないのだとほめめかす。が、あとで僕に請求してくるだろう。もしくは

新品を買わされるか。

「じゃあ、お言葉に甘えて」

彼女は不承不承に頷く。顔にはなんて良い女性なのだろうと書いてある。妹は彼女に踵の無いサンダルを貸した。

靴擦れがあるため、ひよこひよこ歩く彼女と傘を並ならべてゆつくり歩く。話すことも無いので黙って歩いていたが、公園が見えてくると彼女がくすりと笑った。

「何か？」

「いえ、本当に今日はテレビの——朝の占い通りだったなあと思って」

「占い？」

「ご存知ありません？ 『美咲の今日の天気』の後でやってる占い。私の今日の運勢は最悪。家の中でおとなしくしているのが吉。ただし、運命の出会いがあるかもって」

「矛盾してますね」

「ですよね」

　　楽しそうな笑顔。

「藤田さんは何座ですか？」

「僕は魚座だったかな」

「あ、今日一番運勢良かったんですよ」

「そうなんですか？」

「そうそう。私、一番運勢悪かったから、一番良い運勢の人がね、ちよつと憎らしくて真剣に見てしまいましたから」

「へえ」

「あの方、妹さんだつたんですね」

「え？」

「最初、奥さんかなあとと思って、修羅場になるんじゃないかと不安だつたんです」

「ハハハ……」

「あれが妻だなんてどんなことがあるうとご免被る。」

「あ、雨上がりでしたね」

「彼女が空を見上げて嬉しそうにつぶやく。」

「月が出てる」

雲間にのぞいた月は、金色で。金属でできていそうなほど硬い光。けれど重い雨雲はまた空を覆い隠す。また降り始めるかもしれない。住宅街特有の入り組んだ通りを抜け、大きな通りに出た。

「あ、ここまで来たらわかります。うちもすぐそこなんです——この度は本当に、本当にご迷惑をおかけしました」

「勢いよく頭を下げる。」

「いえ、こちらこそ——妹のやつがお節介で」

「いいえ、本当に助かりました」

彼女は首を振り、何度も礼を述べながら歩み去った。

歩いた道を引き返す。公園の前を通るのは今日は四度目だ。外灯の下に照らされているのは寂しい公園。ブランコには誰の姿もない。

「ただいま」

何事も無く家に帰り着く。

「おかえり。恵さん、きちんと送ってきた？」

「ああ」

「で？」

「でつて？」

「チャンスでしようが」

「チャンスつて——」

「ま、いいわ」

なぜか笑顔。なんだか嫌な予感。

「荷物に兄さんの名刺、忍ばせといたから。向こうから連絡あるかもね」

「おいおい」

「連絡してきてくれますよーに」

星に祈るようなポーズ。

「あのな——」

「いい？ 連絡あつたらまずは食事に誘いなさいよ。今回のことを理由に会えば良いんだから」

あり得ないと否定する大輝の声を遮り、阿佐美は事細かに今後の行動予定をを語る。時間の無駄だと思いつつ、明日の朝飯の為に大輝は妹の台詞を復唱させられつつ、話を聞いた。

けれど翌日。大輝は知らない番号からの着信に不信に思いつつ通話ボタンを押し。携帯の向こうで、彼女が昨日と同じ詫びの文句を繰り返す。一晚眠ってすっかり元気を取り戻したのだろうか、昨日よりも声が力強い。詫びたいという彼女にそんなことはしなくて良いと大輝は断る。

「あの、じゃあご夕食でもいかがですか？」

「え？」

「もちろん妹さんも一緒に——」

「いえ、妹は忙しいので」

教え込まれた台詞をまさか言う羽目になろうとは予測していなかった。妹はどこまで先を読んでいるのだろうか。恐ろしい。

出会ってもうすぐ一年になる。

「たまには雨もいいですよね」

恵がそう言うと、街がなんだかいつもよりも優しく感じられる。雨に濡れて柔らかくなったというか。雨の街は見慣れているはずなのに、なぜか始めて見たような気がした。

トリックスター

「お嬢さま」

学校帰り。馬鹿げた課題をどう無難にこなそうかと、ため息混じりに思案しつつ、だから道歩いている高校生はそんな言葉じゃ振り向いたりしない。

「お嬢さま、お待ちください」

しかも。学校指定のお下げ髪に、これ以上ないくらいダサくて平凡的なセーラー服姿。まさか、たった今すれ違った、上等なグレーの三つ揃いスーツを着た紳士が、歓喜の表情で声を掛けてきているなんて、天地がひっくり返ったって思いもしないことだ。

「お待ちください、緋依さま」

そう問われて、私は驚いて振り向いた。私の名前は山口緋依、二年程前から永遠の十六歳乙女街道まい進中。幼馴染などからは『ヨリ』と呼ばれてる、ごく普通の女子高生だ。

「ここでお会いできて良かった。緋依さまのお家にお伺いしたところ、残念ながらもまだご帰宅されていないとお母様にうかがいましたので、今日のところは出直そうとしていたところだったのですよ」

「はあ」

間拔けな返事しか返せない。よどみの無い丁寧語などというものに慣れていない一般庶民としては、妥当な返事だと思う。舌をかむことなく、よくもまあ滑らかにそ

んな台詞を口に出来たもんだと感心する。

「申し遅れました」

男は懐からスイと名刺を取り出す。その仕草がなんともスマート。うちのパバじやこうもいくまい。一応営業マンだけど、名刺をスイなんて姿は想像できない。

それを受け取ろうと手を上げかけたところで、

「私めは星野——」

みなまで聞かず、私は背を向けて駆け出した。ダッシュだ。猛ダッシュ。目に付いた角を曲がり、細い路地を潜り抜け、追っ手が無いことを確認しつつも速度は落とさない。

私の馬鹿。大馬鹿者。何で今まで忘れてたのよ。あの紳士ってば、あの馬鹿の関係者じゃない！

一つ思い出すと次から次へと忌まわしい記憶が蘇る。振り払おうと私はまた目に付いた路地へと進路を変える。

「織江え〜」

泣きそうな声を出しつつ、寮の織江の部屋のドアを叩いた。ドアを開く直前、目薬差すのも忘れない。

「織江え、助けてえ」

グズグズとしゃくりあげつつ、扉を開ける。大泣きする一步手前、目薬でできた涙

が一滴頬を伝えれば完璧だ。

「そういうクダラナイところには良く気が回るわよねえ」

織江は読んでた雑誌から目も上げず、冷たく言い放つ。肩までの綺麗なストレートヘアは適当な団子にまとめ、野暮つたい眼鏡にダサイ小豆色のジャージ姿。

穏やかで優しく可愛らしい優等生なんて学校での評判は、見る影も無い。

「何、私の悪口でも考えてる？」

慌てて首を振る。あんたはサトリか、というツツコミをぐつと飲み込み、先ほどの演技を続ける。

「織江え、織江え、助けて、織江え」

何度も名前を呼んだところで、やっと雑誌から目を上げた。困っている人を放つとけない性質だつて言つてなかつたか、この間。生活指導の先生の前で。

怒りの言葉は脇に積み上げておいて、無邪気な笑顔を満面に浮かべ、首を三十九度ほど傾げ、

「助けて」

語尾に特大ピンクのハート付き。出血大サービスだ、この野郎。

だが、織江も負けず劣らずな天使の笑顔。ものすごく嫌な予感。

「あら、残念だったわ、ヨリ」

「は？」

「一足遅かったわね」

と、指差すほうにはパソコン一式。雑誌だと思ったそれ、分厚い取扱説明書だし。まさか買取された？

「待ってたよ」

柔らかなテノールが背後から聞こえる。記憶にある少年の声とは異なるが、私は確信した。ヤツだ。声変わりしようが、ヘリウム吸い込もうが、わからいでか。

背筋を怖気が走り抜け、腕とかブツブツ鳥肌。いるよ、いる。背後にいる。ヤツが。息が首筋に触れそうで気持ち悪い。気絶しろ、私。意識を飛ばせ。全部、無かったことに——ダメだ。気絶したら今後の展開がわかんないじゃない！ そんな恐ろしいことダメ。絶対ダメ。正気を保て私。逃走経路は……窓しかない。つて、ここ二階だし無理じゃん。

グルグルと混乱の渦に飲み込まれかけた私に、

「ただいま、ヒヨちゃん」

「ヒヨちゃんって言うな！」

振り向き、間一髪しやがみこむ。後ろから抱き付こうとしていた変態の手は空を切る。ふう、危なかった。

「怒ってるよ美容に良くないよ？」

『のほほん』と背後にでっかい綿菓子で作った文字を背負っていきそうなヤツの顔。ふわ

ふわの髪の毛はほんのり茶色で柔らかそう。目はくりくり大きくて、黒目が大きい。微笑む顔は年齢の割に可愛くて、でも丈もある。えらい変わりように一瞬息を呑む私の知つてるもやし体型な、はなたれ坊主の面影はどこにも無い。

「ヒヨちゃん。約束、果たしに来たよ」

その言葉で我に返る。見た目に騙されてはいけない。上っ面がいくらよくなろうとも、コレはヤツだ。あの馬鹿だ。

「あれからちようど十年だよ」

ニコリと微笑む。鼻水のついた汚い手で触るな、と言いなれたフレーズは言い返せない。外見、完璧な王子に変身したのだ——いや、それはヤツの名前だった。星野王子。馬鹿な名前。

「なあんのことかしら？」

私は背水の陣とばかり腕を組んで仁王立ち。織江は五月蠅いとばかりヘッドホンして、音楽聴いてるし。ほんと、友達思いで優しいんだから。

ヤツは扉に優雅にもたれかかり、片腕は反対側に付いて通せん坊な格好。長い足を軽く組み、モデル顔負け。良い被写体。それがまた似合う。頭のアレさえなければ。つて、アレを視界に入れてはダメだ。爆笑しそう。

「忘れちゃった？」

「ええ。そうね、そうよ。私、あなたの話が一考に理解できないんですけど？」

「野島」

鶴の一声。何時の間にかそこにさつきの紳士、星野の従者である野島が控えていた。手にはモニター付 DVD プレイヤー。再生ボタンがポチッとしなやかに押される。

映し出されたのは長い階段。少年と少女が仲良く遊んでいる。ジャンケンして、勝ったら決められた数だけ階段を上り、階段を下りる。そんな他愛も無い遊びを真剣に、何度も繰り返す。本当の子供。

それよりいつの間にかこんなもの撮っていたんだ、野島。しかも、DVD ってことは焼き直したのか？ 編集済みか？ 私の肖像権はどうしてくれる。

『殿下、そこは。パーです』

しかも、合間にいらぬナレーション。野島、あんたこれ、立派なストーリーカードよ。ストーリーカード。

『殿下、また……。ああ、今度はチョキでしたのに。緋依さまは一定間隔で同じ手を出していらつしやるだけなのに。この野島めが付いておりながら——』

子供の遊びに何、真剣になってるんだ、このおっさん。見た目の紳士はフェイクだわ。じろりと野島を見やれば、感慨深そうな顔して、画面に見入ってるし。ああ、嫌だ嫌だ。

『オージ、あんたジャンケン弱すぎ！』

堪忍袋の緒が切れたとばかり少女が怒り出す。泣きだしそうな顔で少女を見や

る少年。可愛らしい外見とは裏腹に少女の口から機関銃のごとく飛び出す罵詈雑言。育ちの悪さがほんと良くわかる。

「わかったから、ストップ」

停止ボタンを押そうと伸ばした腕は、野島に捕まれた。ちよつと止めてよ。停止してよ、恥ずかしい。

「わかったって言ってるでしょ。思い出したって。わかったってば」

ボロボロと大粒の涙を流しだす少年の顔が大写しになる。少女の言葉はやまない。『ヒヨちゃん、ゴメン。ゴメンね、ヒヨちゃあん。もつとジャンケン強くなるよお、だから一緒に遊んでえ。もう遊ばないなんて言わないでえ』

しゃくりあげつつ、世界が終わるとばかり悲壮な泣き声。つていうか、野島。あんた何、編集段階で音楽まで付け加えてんのよ。こんなめつちや寂しそうなクラシック曲、BGMで流さないでよ。まるで私が極悪人みたいじゃない！

停止ボタンを押そうとする私と、それを阻む野島との間に繰り広げられていた攻防戦は織江の参戦であつさり私の負けが決定した。後ろから羽交い絞めして、楽しそうにモニター見入るだなんて、なんて良い友達なのかしら。泣けてくる。

少女は泣き出した少年に追い討ちを掛ける。泣き喚けと、節を付けてはやし立てる。本気でやめてよ。恥ずかし過ぎるんだけど。

『じゃ、こうしましょ？ 負けた人は勝った人の言うことを聞く』

少女は高飛車な態度で交換条件を持ち出す。恐々といった顔で少年はうなづく。遊んでもらえることの方が重要だといった嬉しそうな顔。馬鹿な子。

もう一度、最初から始まったジャンケン遊戯。少女が勝ち、少年の持っていたお菓子をを取り上げる。一つ、二つ、取り上げるものが無くなり、少女はポシエトからおもちやを取り出す。当時流行っていたアニメの、売り文句はおしゃれアイテム。けれど、そんな言葉に騙される子供はいなかった。

『これ付けなさい。取っちゃダメよ』

少年は戸惑いつつもそれを身につける。ビヨヨンとちやちなバネで先端に取り付けられたピンクの星が二つ、頭上で揺れるカチューシャ。馬鹿だ、馬鹿。

子供らしい邪気の無い、だからこそ性質の悪い笑い声。少女はひとしきり笑うと、遊戯を再開する。同じことを繰り返し、また負ける少年。

『それ、私が良いって言うまで付けっぱなしね。取っちゃダメよ』

『ええー』

『フフン、あんたが私に勝とうだなんて十年早いのよ！』

ブツリ、そこで映像は途切れる。「やった！」と叫びそうになった私だったが、予想を裏切り、真っ黒なモニターに再び映像が映りだす。何、この微妙な間は！ 編集ミス？

『今日で星野君とはお別れです。皆さん、星野君へお別れのお手紙を渡しませう』

懐かしい女の先生の顔。名前なんていったっけ、小学校二年生の時の担任だ。それにしても野島、どうやってこの映像を撮影したんだ？

着席していた子供達は一人づつ、机の上に広げていた原稿用紙を持ち、黒板前にたたずむ少年に手渡す。席に戻った子供達は先生の合図で『さようなら』と唱和する。滞りなく帰りの会が進み、頭にまぬけな星飾りをつけた少年は教室を去る。

映像はまた切り替わり、

『ヒヨちゃん』

『どこに引越すの？』

怒ったような口調の少女。夕焼け空と見慣れた階段をバックに、BGMは哀愁漂うクラシック曲。

『ジャンケン、ぽんっ』

一方的な少年の言葉。慌てて少女がグーを出す。驚いた顔の少年と、寂しそうな微笑を浮かべる少女。

『パ・イ・ナ・ツ・プ・ルっ』

少年は階段を一步一步上っていく。

『ジャンケン、ぽんっ』

少年は上まで上り、降りてくる。少女はその場を動かない。

『ヒヨちゃん、ズルしてるでしょ』

後、数段で一番下に到着する。その時になつて、初めて少年は不満の声をあげた。

『ズルして勝つても僕、嬉しくないよ』

少女は首を振り、

『そんなこと無い。勝ちも勝ちだもん。嬉しいよ』

少年と少女の視線は互いに譲らないとばかり絡み、先に少女が視線をはずす。

『ジャンケン、ぼんっ』

少女はチョキを出す。遅れて少年はパーを出す。少女は困つたような顔をして階段を上り、少年と少女の視線の高さが入れ替わる。少女は重い口を開き、いたたまれないとばかり目をそらす。

『それ、はずしなよ』

少年は聞こえない振りをしてジャンケンを続ける。少女の言葉を守り、少年はずつとそのアクセサリーを身につけたままだ。何度目かにやっと少年はジャンケンに勝ち、一番下に到着する。

『僕、次は絶対勝つよ』

『はずしなさいよ』

『また遊んでくれる？』

『わかった。だから——』

『約束だからね！』

少女の言葉を遮り、少年は叫んで駆け出す。画面はゆっくり山の端にかかった夕日を映し、まよめのナレーション。物悲しい曲が名残を惜しむように後を引く――。

やつと。野島は軽やかな動作で停止ボタンを押した。

「ヒヨちゃん、思い出した？」

「出したって言ってるじゃない、さっきから何度も」

しんみりした空気を振り払うかのように私は叫んだ。嫌だ。見たくも無かった。あんな切なげな自分の表情。

「で、あんたはどこから帰ってきたの？ 火星？ 土星？ 冥王星？」

皮肉たっぷりに言ってる。遠くへ引越すとは聞いたものの、どこへ引越すかなんて聞いていなかったのだ。たぶん、外国なんだろうと思いつつ尋ねた言葉に、星野はニコリと微笑んだ。

「惜しいなあ、ヒヨちゃん。木星だよ」

「は？」

「これ、ヒヨちゃんに貰った飾りじゃなくて本物」

ビヨヨンと間抜けにピンクの星が頭上で跳ねる。王子様な外見したヤツの頭に生えたピンクの星。

「僕の正体に気づいたの、ヒヨちゃんくらいだよ」

「ちよつと待て。織江、コイツ頭――見た目だけじゃなくて中身も変なんだけど」

振り向き見た織江の頭には、ブルーの星がビヨヨンと動いてた。三つも。

「お、織江——さん？」

「コレ隠してたら、外見的には地球人と区別つかないでしょ？」

いつの間にやら生真面目そうな野島の頭にも黄色い星が一つ、ちようちんアンコウみたいに揺れていた。乱れの無いオールバックにビヨヨンと星。

止めて、やめて、ヤメテ。何よ、今日はエイプリルフルでもハロウィンでもないんだから。

「なによ、なによ。なんなのよ、あんた達」

戸惑う私に、星野はにっこり。そりやもう、これ以上ないくらい王子様スマイルで、「宇宙人。地球には意外と多いんだけど、馴染んでてわからないでしょ？」

「ちよつと待つてよ。宇宙人つて……UFOだか、UPLだか知らないけど、普通ありえないでしょ」

「ヨリ、何言ってるのかわからないわ」

「ビヨちゃん」

星野に意味ありげに微笑まれた私はポーツとしている間に、例の階段——歩道橋に連れて来られた。

「ジャンケン、ぽんっ」

なんてまぬけな遊びなんだらう。これ、子供がやる分には良いけれど、良い年した

人間がやる遊びじゃない。

「チ・ヨ・コ・レ・イ・トっ」

モデル並みの容姿をした星野が、あの頃と変わらぬ仕草で階段を駆け上がる。間が抜けてる。これ以上ないくらい。

最初は適当にやっていたジャンケンもまったく勝てないとなると腹立たしくなる。映像見て研究しただろ、お前。

「ジャンケン、ぽんっ」

「よっしやーっ!」

私は吼え、階段を駆け上がる。何でも勝たなきゃ面白くない。後出しだろうが何だろうが勝たなきゃ意味が無い。勝つてこそその勝負だ。

ちやくちやくと私は星野との差を詰め、追い抜き、

「勝ったー! ざまーみろっ 私に勝とうなんて千年早いわっ」

大逆転。諸手を上げて喜ぶ私は、暖かい顔で微笑む三人の視線に気づき我に返る。ヤバイ、ちよつと熱くなり過ぎた。

「ヒヨちゃんには勝てないな……」

星野は微笑む。綺麗な笑み。

「ヨリ、地球人の平均寿命から見るとその発言は——」

小難しいことを言いかけた織江の言葉を遮り、

「ヒヨちゃん。また、一緒に遊んでくれる？」

「嫌だね。おととい出直してきなつてんだ」

三人は顔を見合わせる。

「織江、タイムワープはまだ理論上で実証されているのみでは無かったか？」

「はい、殿下。ですが——」

真剣な顔でなんだか難しい話を始めた二人はそのままどこかへと歩き去る。何なの一体？

「緋依さま。NASAとの取り決めて我々のことは地球人には機密となっておりますので今回も申し訳ございませんが——」

皆まで聞かないうちに、私はピカリと輝く赤い光を目にした。

私は。パチクリと目をしばたき、辺りを見渡した。なあんでこんなとこにたたずんでんだ、私。

夕闇が刻一刻と色を深める時刻。小学校近くの歩道橋の下。高校の登下校とはまったく関係ない場所——懐かしい場所。いつまでもこんな場所にいたって埒があかないので、私は首を傾げつつ帰途についた。

翌日。

「お嬢様」

昨日はなんであんなところにいたんだろうと考えながら、だらだら歩いている高校生はそんな言葉に振り向いたりしない。

「お嬢さま、お待ちください」

しかも、学校指定のお下げ髪に、ダサイセーラー服姿。まさか、たった今すれ違った、黒いゴシック調メイド姿の女性が、感激の表情で声を掛けてきているなんて、天地がひっくり返ったって思いもしないことだ。

「お待ちください、緋依さま」

夫婦

「——これを愛し、これを敬い、これを慰め、これを助け、死が二人を別つまで、共に歩み続けることを誓いますか」

「誓います」

チャペル形式の式をあげたのは三年前。僕たちは互いに仕事があり、子供はいないが、幸せな結婚生活を送っている。

共働きなのに妻は家事一切を引き受け、見事にこなす。朝から一汁三菜、手作り弁当、夜もきちんとした夕食。外食は月に数える程度。休みの日は掃除して、家計も徹底節約管理。主婦として完璧。鏡のような存在。できた女。いや、できすぎているというべきか。彼女の夫として、ごく普通の僕はいつしか息苦しくなっていたのかも。しれない。

「ケンカでもしてるんですか？」

派遣社員の女の子に声をかけられたのは、仕事を片付けて帰ろうか、明日に回そうかと迷っていた時。

「ケンカ？」

「奥さんと。だって、この間からため息ばかり」

「そうかな？」

「そうですよ」

意味深に笑われる。濡れたような口紅、完璧な化粧。きついパーマと相まって、水商売の女のようにだ。

「いつまでも新婚さんじゃいられませんよね」

よくわかっているとはかり頷く。年齢はまだ二十歳を越えたばかりのはずなのに。

「君はまだ結婚してないだろ？」

僕の言葉にまた笑う。娘らしい明るいものではなく、女の、魔性の笑み。

「付き合ってくれませんか？」

「どうして？」

彼女は再び微笑み、

「お酒。実はね、私、昨日振られちゃったんです」

「え？」

「だから、みんなでワイワイ呑みたい気分じゃないんです。でも、独りで呑むのも淋しくって」

くっ

頼み込むような上目遣い。戸惑う僕から目をそらし、重いため息一つ。

僕は断っていたはずだったが、言葉巧みに呑みに連れ出され、彼女に言われるまま

呑み続け、気づいたら——なし崩し的に始まった関係だった。

地獄が幕を開けるのに、そう時間はかからなかった。結婚を迫る彼女と、彼女の

存在に気づいた妻と、振り回される僕と。話し合いという名の睨み合い。別れ話とい

う名の罵り合い。女同士の争いの日々。

けれど、突如それは終幕を迎えた。彼女が新しい恋をし、にこやかに歩み去っていったのだ。僕と妻のギスギスした関係だけ残して。

目覚まし代わりに声をかけてくれていた優しい妻の声は過去のこと。僕は携帯のアラームで目覚める。リビングのソファ。節々が痛い。

「おはよう」

「邪魔」

半年前までの彼女とは、まるで別人。テレビを見ながら、黙々とトーストをかじっている。

ダイニングテーブルを見やるが僕の朝食は用意されていない。半年前から彼女の朝は、パンと野菜ジュースとコーヒーだけ。和食の朝食は、僕に合わせてくれていたらしい。知らなかった。

トーストを焼いてマーガリンを塗る。コーヒーを用意して……角砂糖が見当たらない。

「シユガーは？」

「ブラック」

そうでした。ブラックで飲むんだよ、この女は。ため息一つついて、牛乳を入れる。会社帰りに買ってこよう。

「ただいま」

真つ暗な空間に僕の声だけが空しく消える。今日も妻は残業らしい。最近残業が多いが、愚痴つても仕方がない。

灯りのついていない家に帰るのは寂しい。妻は何時帰ってくるんだろうと考えながら、スーパリーの袋を台所に下ろし、着替える。部屋着の上に、シンプルな妻のエプロンを付け、家事労働に勤しむ。

今さらながら、半年前までの、妻の良妻ぶりに頭が下がる。あれの真似はとてもしゃないができない。一日働いて帰ってきて、疲れた体に鞭打って、帰ってくるはずの人間の事だけ考えて動き回る。そこにあるのは相手への愛しみ。包み込むような愛情。当たり前だと思っていた日々は妻の努力で成り立っていたのだ。

手早くシーフードグラタンにトマトサラダ。コンソメスープを作る。食事を作るのにもずいぶん慣れた。僕の作った食事に口をつけはするものの、一向に反応のない妻の一挙手一投足を窺っていて、洋食好きだと知った。妻の好みなど、あの出来事がなければ一生知ることはなかっただろう。そう思うと、あの出来事があって良かったような気もする。

以前は、妻が僕の好みに合わせて和食中心の献立だった。今は僕が妻の好みに合わせて洋食中心の献立を作る。

ダイニングテーブルに皿を並べる。ランチョンマットに白い食器。グラタンの白にトマ

トサラダの赤、コンソメスープの黄色が彩り鮮やか。

買ってきたミニバラをさりげなくコップに立てて、テーブルの真ん中に配置する。最近思い出したのだ。妻は季節の花を一厘、テーブルに飾っていたことを。

椅子に座り時計を見上げる。今日はいつもとより遅い。先に食べようか、もう少し待ってようかと考えて、あと十分だけ待つことにする。

「ただいま」

義務だから仕方無しとばかりの音量。けれど、その小さな声を聞き取った僕は嬉しくなる。待つていて良かった。一緒にご飯が食べられる、と単純に。

「遅かったな」

リビングに顔を出した妻に声をかける。疲れきった様子の妻は不機嫌もあらわに、「悪い？」

「そんなこと言っていないだろ？」

「あつそ」

そのまま部屋へ向かい、部屋着に着替えて現れる。ソファに座り、テレビをつけて、買ってきたらしき発泡酒をあおっている。

「夕食は？」

ダイニングテーブルに座った僕は、妻に声をかける。

「なあ、今日はグラタンだぞ？ お前、好きだろ？ しかもシーフードグラタンだ

ぞ?。」

「食べてきたからいらない」

振り向きもしない。

「それなら連絡ぐらいいしてくれよ」

「なんで?」

「何でって……」

口にした言葉の飲み込んだ。今の妻の態度は、昔の僕の態度だ。僕に何を言う権利がある?。

妻は目の前にいるのに、僕は不思議と孤独を感じる。寂しい。なぜ? 理由はわかってる。妻に夫婦をやる気がないからだ。僕一人、夫婦としてやっていこうと、から回りしている。やるせない。疎外感。

それならいつそ、別れてしまおうかと考える。この関係を清算して、赤の他人に戻る——それはエデンのリンゴのような、取り返しのつかない甘い誘惑。けれど、たかが浮気、たかがケンカの一つで、僕は妻と別れたくない。

独り寂しく飯を食べ、風呂に浸かる。唯一安らぐことのできる時間。ついつい風呂が長くなり、のぼせかけつつ湯から上がる。妻の入浴時間が長いと思っていたが、今になって気持ちが変わる。風呂だけだ、家の中で息がつけるのは。

リビングに戻ると、妻が携帯をいじっていた。珍しい。

「メールか？」

声をかければ、妻は慌てて携帯を隠す。そんなことしなくても画面を覗いたりしないのに。

「見た？」

「何を？」

グシグシと髪を拭きながら聞き返すと、曖昧な笑みを見せる。

「ならいいわ」

「風呂に入れよ。冷めるだろ？」

窺うように僕の顔を見つめ——久々に妻に見つめられたものだから僕はどぎまぎし——妻はにこりと微笑む。久々に見る笑み。

「そうね、追い炊きは電気代かかるしね」

風呂へと向かう背を見つめる。さっきの妻の笑みは何だったんだろう。何か引つかかったが俺はそのままソファに横になった。朝食を作るため、早めに起きなければいけないから。

翌朝。

「今日遅いから」

妻は言い置き、浮かれた顔をして家を出る。珍しい。残業があるとわかってる日でも、ここ半年、言って出て行ったことなんてないのに。

違和感が徐々に形をとりかけていた。まさか、と自分の考えを打ち消す。そんな事あるはずがない。妻がそんなこと、するわけ——できるはずがない。

けれど、彼女の化粧はいつもより気合が入っていた……服装も——思考がとまる。「嘘だ」

自分の声だとは思えなかった。重苦しい、死を目前にした人間のような声。

(浮気だ)

誰かが脳内でささやく。否定する自分をすさまじい力で制圧し、声高に叫ぶ。

(浮気をしている！)

自分の時とまるで同じ状況。あの日、妻は仕事を休み、一日僕の後をつけていた。そして、彼女の姿を認めた瞬間、突然目の前に飛び出してきた、彼女を殴りつけた。

「夫と何をしているの」

行動に比べ静かな、暗い声だった。殴られた彼女は驚きが去った後、悲鳴と怒声と混乱した感情のまま声を上げる。妻はそれを完全に無視し、僕を見つめていた。じつと、何かを待つように。

僕は何と答えてよいのかわからず、妻の視線から目をそらすこともできず、ただ立ち尽くす。妻の目から大粒の涙。高ぶった感情が堰を切ったように止め処なく流れる、綺麗な涙。それをぬぐいもせず、僕を見つめる。

そんな瞳に晒された僕は、妻にどう謝罪し、どうすれば妻を慰められるか考えて

いた。痛いと声を荒げ、妻を罵倒する言葉を喚き散らす彼女のことなんて気にならなかった。

僕と妻は夫婦なのだ。その時、初めてわかった。夫婦はただ一緒に暮らしていれば良いわけじゃない。互いに夫婦であろうと努力しなければならぬ。それを放棄していた僕。努力していた妻。僕たちは夫婦だけれど、本物の夫婦ではなかったのだ。あの日まで。

やつとわかったというのに。僕が気づいたというのに、今度は妻がそれを放棄した。妻が憎いでも、恨めしいでも、腹立たしいでもない。ただ、やるせない。だから、確かめたい。

どこか遠くで、休暇願いを届けている僕の声が聞こえた。手には携帯。妻の体を氣遣い、休みが欲しいと無理を言う。妻の体調がとても悪いと。もう一度用件を告げ、相手の制止の声を遠くに聞きつつ電源を切る。

玄関から飛び出し、妻の後をつける。会社に行くのであれば、乗る電車も、降りる駅も、会社の場所もわかっている。妻の姿が見えなくとも大丈夫だと自分に言い聞かせる。だが、足は自然速くなる。

駅に着く。妻の姿はいつもと違うホームにある。急いでそこへ向かう。近づきすぎないよう慎重に。見失わないよう注意して。

会社に行くと言っていたはずなのに、妻が降りたのは会社のある駅ではなかった。

駅ビルに入り、時間をつぶすかのようにふらつく。映画館へ入って行くので、そのまま後に続く。妻の斜め後ろの席を陣取った。

妻の頭越しに、見ることも無く見ていた映画にデジャビュを覚えた。ああ、これは妻と結婚する前、デートの時に見た映画の一つだ。

思えば、結婚前は一人でよく出かけていた。映画だ、ボーリングだ、カラオケだと結婚してからは仕事の忙しさを言い訳に、週末はごろごろしていただけだ。

妻が何度か出かけようと誘ってくれたが、僕は適当に相槌を返すばかりだった。仕事で疲れてる。陳腐なくだらない言い訳だ。妻は仕事に家事にと僕より疲れていないはずなのに。

一時間半ほどの映画が終わると、昼食時。妻が向かったのは古びた食堂。懐かしい。結婚前はよく訪ねたものだ。中は二十席程の狭い店内。後を追って店内に入れば、俺の尾行が妻にばれる。だが、中で逢引をしているかもしれない。ジレンマ。入ろうか、どうしようか迷っていると、引き戸が開き、妻が顔を出した。

「あなた」

呼びかけられて、とつさに姿を隠そうとしたが、

「あなた、いまさら隠れようとしても無駄よ。それにしても後をつけるの下手ねえ。あなた絶対探偵にはなれないわ」

「何だよ」

「あなた、昼食食べないの？」

「食べるさ」

「じゃあ、ほら、早く」

促されて店に入る。あの頃と変わらない。懐かしくなる。プロポーズしたのはこの店だった気がする。公園で——と思っていたのに雨が降り出し、結局、ここで彼女に指輪を送ったのだ。

「何か聞きたそうな顔してるわね？」

そりゃそうだ。聞きたいことはいくらでもある。こほん、と一つセキをして、慎重に言葉を選ぶ。

「お、男に会う気なのか？」

「ええ」

「お前。浮気、してるのか？」

「してないわよ」

「じゃあ」

「会いたい人は私の目の前に座っているわ」

何を言っているのかわからなかった。机には僕と妻しか座っておらず——妻はおかしそうな顔をして、

「鏡見て来たら？ 私の好きな人の顔が映ってるから」

「……な、なんで？ お前浮気は？」

言葉が空回りする。人生の中でこれほど動揺したことはない。嬉しい、いや腹立たしい、いや違う。何だよ、何でこんなこと。

「浮気なんてしてないわよ、あなたじゃあるまいし」

ぐさりと胸に突き刺さる台詞。悪かった、ごめんなさい、もう二度としません、何度頭を下げたか覚えてない。戸惑う俺を見つめる妻は、優しい笑顔。

「ねえ、あなた。誓いの言葉って覚えてる？」

妻の口からスルリと流れる、呪文のようなあの文句。病める時も、健やかなる時も……。

「だから、あのことは許してあげる。でもね、」

顔が変わる。目の奥に暗い光。

「あなた、私のこと何だと思ってた？」

小間使いか家政婦くらいにしか思ってたでしよ、と容赦ない言葉が続く。

「すまん、でもそれならそうと一言言ってくれば——」

「聞く耳持つてる感じじゃなかったじゃない。私を妻だと思ってるなんて、まったく感じられない姿勢だったし」

耳が痛い。確かに最近の妻の態度を見ていて、僕も同じ様に感じていた。夫婦なのに、一人相撲をしているような、僕一人、夫婦ごっこをしているような虚しさ。

「お義母さんにね、言われたの。『あなた、あの子を甘やかし過ぎてるわ。少し放つとき。そしたら、構って欲しくて良い子になるから』って」

お袋に声色を似せる。大げさな節のつけ方がよく似てる。

「でもね、そんなことできなくて。どうしようか戸惑ってたときにあなた、あんなことして。だから——」

ここ半年の態度はそういう意味があったのか。ただ、浮気に腹を立ててただけじゃなかったのか。ちよつと安心。

「そうそう。料理してるときのあなたの背中、とっても素敵だったわよ」

ついでのように妻は言い、

「じゃーん」

携帯の待ち受け。エプロン姿の男の背中——つまり僕。いつの間に撮ったんだらう。

言ってくればポーズを決めるのに、ただの背中だなんて趣味が悪い。

照れくさくなつて店内を見渡す。あの頃と同じ変わらない風景。

金目鯛の煮付け定食が僕と妻の前に並ぶ。先に注文していたらしい。

「あなた、これ好きでしょ？ 私が作るのより」

「そんなこと——」

言いつつ、僕も箸を手に取り、一口。旨い。

「ほら、おいしそうな顔をして——」

くすくすと幸せそうな顔。妻と結婚して良かったとつくづく思う。

「あら、」

「ん？」

「涙」

「……ゴミが入っただけだよ」

ずいぶん回り道はしたけれど、僕と妻はやっと夫婦になれた気がした。

あの星が流れたら

車を走らせること数時間。浜辺の町は夜の闇に覆われている。明かりは数えるほど。ここでは人間らしい生活が営まれているのだと、昨日までの自分を振り返り、壮太は苦笑いした。

ワーカーホリック気味に会社に身を捧げていた日々は、ある日突然、会社の倒産で幕を閉じた。しかも、社長の持逃げで支払いの滞っていた給料さえ貰い受けることが出来なかつた。世間で言えばよくある話。ただし、それが自分の身に降りかかってくる誰も予想していない。

残務整理に駆り出され、会社がなくなつたのだと実感したのはようよう一息つけた先日。真つ暗な家に帰ってみれば、妻も息子もいなかった。置手紙一つ無く、妻の欄の記入された無粋な離婚届がリビングテーブルで待つていた。

いつ出て行つたのかさえ定かではない。二人の顔を最後に見たのはいつだったろうと頭をめぐらし、すぐ諦めた。ずいぶん前だという以上、思い出せなかつたからだ。

自分の元には何も残っていないのだと思うと、無性に海が見たくなつた。街の近くの海ではなく、人の手で汚されていない自然のままの海が。

あの星が流れたら

ここへ帰ってくると言った

あなたの言葉を信じて

私はここで待ちつづけます

どこで聞いた歌だったか。口ずさみながら、曲がりくねった海辺の道を走る。対向車も無く、自分の車しかない寂しい道。時折民家が見えるものの、他には何も無い。あるのはただ、宝石をばら撒いたかのような星空。手を伸ばせば届きそうなほど、一つ一つの星が大きい。瞬く音さえ聞こえてきそうな、そんな錯覚。

ここでは、未だ夜は人の不可侵領域なのだど嬉しくも、恐ろしくもなる。道の脇に車を止め、砂浜へ降りる。

波の音が耳に気持ちよく、吹き付ける風の冷たさに身震いしつつ、波打ち際まで歩く。見上げる空は一面の星。

「こんなに星って綺麗だったんだな」

ドラマの、作り物めいた星空は真実なのだど知る。あんな星空、日本では拝めないと思っていたのに、何の事は無い。街を抜ければ良かったのだ。

オリオン座、北斗七星、大熊座——知っている星座は少ないけれど、それをはつきり確認できる。言い表せぬ幸福感に胸がいつぱいになる。ありふれた言葉が胸に溢れ、自分の存在の小ささを思い知る。つい昨日まで、なんて稚拙な表現力だと笑っていたTVレポーターに謝りたい。

人は本当に感動すると単純で陳腐な言葉しか沸いてこない。詩人でなければ、この感動を言葉に現せそうにない。

「……いつまでも眺めていたいな」

出来ないことだとわかつていて口にする。体温もずいぶん下がり、指先まで冷たい。車に戻ろうと振り返り、壮太は驚いた。

影のように女が立っていた。髪を一つに束ねた、着物姿の女。

「すいません」

反射的に謝り、横を通り抜けようとしたところで女が口を開いた。

「ここに、残られないのですか？」

表情の無い顔。表情の無い声。けれど、瞳は強く訴えている。壮太はそれを読み取れず、読み取る気も無く視線をそらす。

「聞いてましたんですか」

風の音が大きいためか、女が近づいてきた気配さえ気づかなかつた。

「寒くなってきたので車に戻ろうと——」

視線の先に車は無い。確かにそこに停めていたはずなのに。キーはズボンの右ポケットにある。動くわけが無い。

「あれ——？」

「冷えたのならば、こちらへどうぞ。火を焚いておきますから」

女は誘うように歩き出す。車まで無くなったかと、自分の不運さに笑みさえ浮かべ、壮太は後に続く。人気の無い辺鄙な場所に、零時も過ぎたこんな時間、一人きりでいる女。化け物かも知れない。思った直後、壮太は自分の馬鹿げた妄想に笑った。

女が壮太を案内したのは古びた小屋だった。漁師小屋なのだろう、網や浮きが無造作に置かれている。ずいぶん魚臭い。隙間風が入り込みこんでくるものの、小屋中央のドラム缶で燃え盛る火が空気を暖めている。

暖かな火のもとで見やれば、女は浜の女らしい日に焼けた肌をしていた。黒髪は潮にやられたのだろう、艶がない。鮮やかながらも古風な着物に、紅を差した唇が浮き立つ。歳は二十歳を越えたところだろうか。

「君はここを？」

暖を取りつつ尋ねた言葉に、娘は部屋の脇に積み上げられていた枝を運び、火にくべる。浜辺に打ちあがった流木なのだろう。枝には表皮がない。

壮太はパイプ椅子を引っ張り出し、腰掛ける。娘は火の加減を見つつ、ポツリとつぶやく。

「待っているのです」

「待つて……誰を？」

娘はそれに答ええない。

「そういえば名を申しておりませんでしたね。私は凜と申します。あなたは？」

「俺は——壮太」

凜が苗字を名乗らなかつたので壮太もそれに倣う。落ちる沈黙。木のはぜる音、風の音、波の音が溶け合い心地よさを生み出す。

「眠いのですか？」

「え？ いや……」

強く頭を振り、壮太は座りなおす。しかし、まぶたは重い。火の暖かさが気持ちいい。

「では一つ、寝物語でもいたしましょう」

穏やかな声で凜は語り始めた。

昔、この辺りに一人の娘がおりました。代々続く漁師の娘でした。

ある酷い嵐が通り過ぎた翌朝のこと。娘は浜辺に打ち上げられた男を見つけました。どこから流れ着いたものか、男は酷いありさまで、脈も弱く、死にかけていました。娘は慌てて男を連れ帰り、自分は眠りもせず看病しました。娘の必死の看病のかいあり、男は数日後には目を覚ましました。

男と娘が恋に落ちるのに時間はかかりませんでした。いつまでもここにいてくれと頼む娘に、武人である男はきっぱりと首を振り、回復すると都へ帰っていきました。別れを嘆き悲しむ娘に、

「あの星が流れたら、私は再び戻ってこよう」

北の天に輝く星を指差し、男は背を向けました。

「北の天に輝く星って——北極星？」

壮太の問いかけに、凜は寂しげに微笑し、

「読み書きが出来無い娘を男は無学だと思ったのでしよう。ですが、娘が漁師の娘であることをわかつていなかったのです。陸と異なり、海に出れば目標となるものは限られています。漁師の子供たちは誰も、星の見方を教わつて育つのです。」

男はそれを慰めの言葉として言ったのでしようが、娘は知っていました。その星が決して流れないことを」

小枝を折り、火に投げ入れる。壮太は眠さに勝てそうにない。

「娘は男の帰りを待っています。あの星が流れたら帰つてくると言った男の帰りを――」

不意に景色がぶれる。目の前にいる娘が老けた。いや、顔が変わった。それはよく知った顔。無性に懐かしい顔。

「……彩」

呼びかけたが彼女は顔を上げない。じつと燃える炎を見つめている。

「あなた、いつ帰ってくるの？」

電話口で何度も聞いた言葉。マニュアルを読み上げているような、感情の無い声。くたびれきつた顔。昔はそうじゃなかった。

「いつ帰っていらっしゃるの？ あなた、お仕事大変なのはわかりますけど、少し働き過ぎじゃありません？」

彩は顔を上げる。心配そうな表情をした顔は先ほどと変わって若く、声に怒りの色も見える。わずらわしいと思っていた声が懐かしい。

じつと、伺うように壮太の目を覗き込んでくる。

「あ、ああ……」

居たたまれなくなり、目をそらす。

「あなた、」

彩の声色が一段と若くなる。弾むような、楽しげな声。瞳を輝かせ、幸せそうな顔。結婚してすぐはこんな顔をしていた。

「お仕事がんばってくださいね。でも、がんばり過ぎて倒れられても困るけれど」

溢れる笑顔。苦労も不安も不満もまだない顔。結婚しても働きたいという彩に、専業主婦になって欲しいと頼んだのは自分だった。苦労させないから、という口約束はいつの間にか自分の枷になっていた。

「大丈夫？」

じつと壮太の目を覗き込み、にこりと微笑む彩のしぐさが好きだった。壮太はぐいと頭を下げる。

「すまん、彩」

「——あなたが謝ることじゃないわ。こんな景気だもの、仕方ないわよ」

壮太は顔を上げる。目の前には見慣れた風景。家のリビングテーブルに向かい合っ

て座っている。老けた彩の顔は、不思議と晴れ晴れしている。

「私もパートを見つけたし、あなたも新しい就職先を探して。今度はきちんとした労働時間の会社を選んでね。過労死した男の妻、なんて言われたくないわ」

「……あ、ああ」

何を寝ぼけていたのだろう。壮太はリビングの椅子に掛けなおす。息子は二階で寝ている。今は妻に仕事がなくなったこと、給料が出ないこと、家を売るしかない話したところだった。

白昼夢を見たのだろうか。そう思った壮太の脳裏に、凜の声が流れて消えた。起きる直前に見た夢のように、娘との出来事は薄れ、やがて思い出せなくなった。

スノーホワイト2

雪の色

「お疲れ〜」

「またね〜」

いつもの顔ぶれと別れたのは夕闇の色が濃くなつた頃。といつても、最近日は日が暮れるのが早い。時刻は五時前。昼が過ぎれば、夕方などなく夜がくる。昨今の小学生ならば、まだまだ家など帰りやしない時刻。

マフラーを直し、歩き出そうとしたところでコートの裾を引っ張られた。見やれば一番最初に別れたはずの、シヅの顔。美少女、であるシヅが瞳に期待と興奮の輝きを乗せ、満面の笑みを浮かべた顔といたら……言葉にできない価値がある。

「どうしたの、シヅ？」

まなじりを下げながら尋ね返した私は馬鹿じゃない。きっと誰もがそうするだろう。

「ねえ！ 今年はいつするの！」

嫌な過去が脳裏をよぎる。乱暴にシヅの手を振り払い、家へと向かつて一目散に駆けた。

乱暴に玄関を閉め、ついでに鍵をいつもより厳重に掛ける。その音に驚いたのかジンさんが不安そうな顔で奥から出て来る。

「出入り口全部閉めて！ シヅが来るに！」

ゼゼゼと肩で息をしつつ、ドタドタと勝手口に向かう。

「うん、うん」

「何イイイイ!?!」

背後から、二人の悲鳴が聞こえる。いつもながら、どこから沸いて出たのかメイさんも慌てた様子で家中の戸締り点検をはじめ。ジンさんはオロオロしているばかりで話しにならない。

寒いので、普段から開けている戸口は少ない。が、念には念を入れなければ気がすまない。何せ相手は傍若無人のシヅなのだ。

家中の点検が終わり、猫の子一匹家に入つてこれないことが確認できると、ようやく私も落ち着いてきた。お茶でも飲もうとリビングに足を向ける。

華やかなテレビのおしゃべりが廊下に漏れている。テレビは茶の間に一台だけなんて、今時少数派の中に入る我が家。

「またメイさんつけっぱなし」

愚痴りつつ、ドアを開けた私は凍りついた。そこに見たくもないシヅの姿を認めて。白のざっくりしたセーターに、髪は高い位置で二つ結び。スカートとおそろいの赤いチェックのリボンが可愛い。これで同い年とは到底信じられない。……じゃなくて。

「何でいるのよ!」

「何でって、友達じゃない」

みかんを頬張りつつ言い返される、ジャイアリズム全開なお言葉。シヅの本質はこれだ。美少女の皮をかぶったジャイアン。いや、ジャイアンよりよっぽど性質が悪い。

見た目に騙される私のような人間には悪魔、いや小悪魔のようなもの。天使の白い羽じゃなく、悪魔の黒い羽をつけたシヅ——それはそれで可愛い。

コタツに入ると、シヅがお茶を煎れてくれた。ここ、私のうちのはずだけれど。

「で、今年はどうするの?」

まだその質問を繰り返すか、その口は。その問いを繰り返す間はシヅといえども憎らしい。

「二人に聞いて」

私はシヅを無視し、チャンネルをお笑い番組からニュース番組に切り替える。政治家の汚職だとか、地域のニュースだとか……あまり興味のない内容のあとに流れる天気予報。

『今夜未明から明日の朝に掛け真冬並みの冷え込み——』

お天気お姉さんが、ロケ先から生中継で明日の天気を読み上げてゆく。声が鼻声なのは相当寒いからだろう。

(シンさん、メイさん間に合うかな?)

私は次第にニュースへ意識を移し、完全にシヅのことなど忘れていた。地下から突然響いた爆発音で、不意に我に返る。

「あかん、あかんわ〜」

悲鳴にも似た声。地下にいるはずのメイさんの声が家中に響く。

「メイさん、何があつたの？」

大きな声を張り上げ、問いかけたところである事実気づく。

「……シツ！」

部屋にシツの影も形もない。嫌な予感っていうか、確信。

茶の間の引き戸がゆくりと開けられ、一昔前のギャグ漫画によくあるチリチリパーマに全身真っ黒という姿でメイさんがそこにたたずんでいた。

「うわ、何、その格好」

無闇に壁やドアに触って欲しくない。ススで黒くなりそうだから。この寒空の中、大掃除を何度もやるのは嫌だ。

それを汲みとってくれたのか、メイさんはその場に立ったまま鋭い瞳を私に向けた。まるで、私が元凶だとしても言うように。

「何で悪魔っ子がおんねん」

地獄のそこから響いてくるような声色に、恨みがましい瞳をしたメイさん。全身黒い中、不気味に光る眼が恐ろしい。

普段は無駄に笑顔の人なのだけれど、シツがかかわったときは常に全身から怒気を発生させている。まさに犬猿の仲。

「戸締りが不十分だったみたいよ」

シヅがどこから入ってきたのかさういえば聞き出していなかった。

「それって不法侵入やん。警察や、警察に電話や」

またテレビで知らない知識を増やしてる。

「それはできない相談です」

「わかつとるわ！」

互いに全身でため息。愚痴愚痴言い合いたいのをぐつとこらえ、私は立ち上がる。

現場の様子を確かめてから次の手を打たねばなるまい。とにかく今は一分一秒でも時間が惜しい時なのだから。

地下から立ち上る妙な色の煙と、少々焦げ臭い匂い。やはりただの爆発ではなかったらしい。

「メイさん、何作ってたの？」

後ろを歩くメイさんに、振り返らず尋ねる。間違いなくこの煙やら匂いの元凶であるメイさんとはぼけた声で、明るく、

「雰囲気作りよ」

語尾に特大のハートマーク付で答えてくれた。予想通りの答えをありがとう。そして、バカヤロウ。

ジンさんのソバうちもどきで作出す品と同じものを作るため、なぜ中世魔女の

研究室の雰囲気が必要なのか私には理解できない。一生できそうにない。死んだじいちゃんにもその辺を深く追求すると言われているので、ツツコみたいがあえてツツコまない。

地下室の中はメイさん同様、黒一色。電球は難を逃れたようだが、すすで汚れたためだろう、光は弱い。室内を見分けるには少々時間がかかった。爆発音ほど被害はなかった様子だが、それでも物が散乱している。

「ジンさん、シヅ……生きてる？」

何と声をかけていいものかわからず、とりあえず。

部屋の中からは低いすすり泣き。ジンさんはどうやら無事な様子。というか、人間ではない彼が死ぬわけないと自分にツツコミ。

日ごろから黒尽くめの服を着ている彼は、部屋に溶け込みまるで居所がわからない。

「ジンさん(ぎんさん)……」

「……お嬢……」

メイさんがため息をつきつつ指差す方向に、何とか人の形を見分けほっと息をつく。姿を見ればやはり安心する。

ずいぶんかかり、ようやくシヅの姿を見分ける。どうやら気を失っているらしい。

小柄なシヅのこと。私一人で抱きかかえられるかと思っていたが、意外に重い。寝

た子は重いと聞くけれど、初めて実感。ジンさんに頭の方を持ってもらい、二人がかりで茶の間に運ぶ。

メイさんにタオルケットを広げてもらい、そこに真つ黒なシヅを寝かす。部屋がずいぶん汚れたが、もう後の祭りだ。

「……お嬢……」

泣き続けるジンさんが鬱陶しい。

「氣イ失つとるだけや。心配あらへん」

不機嫌そうにメイさんは言い置くと、ジンさんを引きずって地下室へと引き上げてゆく。普段はおちやらけてる癖に、こういうときには頼りになる。

濡れタオルでシヅの顔だけ拭いてやる。この後、どうしたらいいのだろうか？

氣を失っているシヅを見続けていても意味はないと悟ったのは、それから三十分ほどして。コーヒーでも淹れようかと立ち上がり……頭上で大きな音がした。

地下室にいる二人には聞こえなかったとみえ、地下からあがってくる様子はない。大慌てで部屋の片付けに追われているのだろう。何せ時間がないことだし。

私が見に行くしかないかと、ため息をつき、金属バット片手に階段を上る。師走は泥棒が多いって話だが、うちには盗られるようなものは特にない。が、見られたくないものはある。その上、警察のお世話にもなりたくないし。

「飛び道具だけは持っていませんように」

手を組み、十字を切り、手を合わせ、複数の神様にお祈りする。多神教で無宗教な国で育った人間としては、とりあえずどなたかお一人でも私の願いをお聞き入れてくださればオッケーな気持ちで。

ゴトリ、音は私の部屋から聞こえた。

午前中に掃除したばかりだったのに、土足だったら正当防衛の名の下に一発殴る。硬く胸に誓い、勢いよく戸を開けた。

「……あ」

驚いた表情でこちらを見ていたのは、近所に住まう三田さんちのおにーさん。

「……何やってんですか？」

予想もしない人物、そしてそれが顔見知りだったって事実だったことに、私も驚きを隠せない。何で人の部屋に赤っぽいレザージャケットにパンツ、サンダラスつておしゃれ着で突っ立ってるんですか。しかも土足で。

普段、顔をあわせれば挨拶する程度の間柄。じいちゃんが生きていた頃は、三田さんちのご隠居と将棋を指したりしていたが、今はまったく交流がない。それにいくら家が近所とはいえ、うちに間違えて入ってくるなんてありえない。そもそもこー、こー階だし。

「何やってんですか？」

もう一度問いました。

「……さあ、俺にも何がなんだか……」

「とりあえず、靴、脱いでください」

落ち着けば怒りが沸いてくる。三田のにーさんは慌てた様子で靴を脱ごうとあたふたし、やたら紐が多くて、脱ぎにくそうな靴を数分かかって両手に一足づつ持った。そういう靴を履きたがる心境が私には理解できない。

「じゃ、お帰りはこちらです」

階段を指差す。にーさんは部屋から出ようとして、戸口で派手にひっくり返った。

「何やってんですか？」

「ここにも見えない壁がある」

「は？」

私は部屋と廊下を何度か往復する。何も壁など存在しない。三田のにーさんはパントマイムのごときしぐさで、戸口に見えない壁があることを主張する。

「いい加減にしてください。さつさと、帰ってください」

「俺も帰りたいけど帰れないんだよ」

「ふざけてるんですか」

「ふざけてない」

「じゃあ、あると仮定しましょう」

譲歩する。

「何でもいいから帰って下さい」

「だから、出られないんだよ。窓から出ようとしたけどだめだったし……」

部屋を見やれば、あちこちに足跡がついている。

おい、この部屋、今朝寒い中掃除したばかりなんだよ。なのに何で土足で人の部屋を歩き回るんだよ。しかも、窓に近づくためって、人のベットの上まで足跡つけるってどうなんだ？ 人を馬鹿にしてんのか？ 普通、部屋の中では靴は脱ぐもんだろうが！……いろいろな思いを飲み込み、

「いや、全部声に出てる」

ツッコむ三田のにーさんを無視し、私は何事もなかった顔で、三田のにーさんを見る。やる。にーさんが引きつった笑みを浮かべたことを思うと、私の顔が凶悪な笑顔になっていたことは否めない。

「何でこの部屋に入ったんですか」

そこがまず問題だった。それがわからなければ出られないという意味もわからない。

「わ、わからない。気づいたらここにいた」
ふざけてる。

「沸いて出たとしても言うんですか？」

「知らない、本当にわからないんだ」

「じゃあ、あんたはこの部屋に血だらけの人が倒れてて、あんたの手には同じく血だ

らけの出刃包丁が握られても知らぬぞんぜぬを押し通す気か？ 自信満々なのか？」

「言ってることがわからない」

「わかれよ、チクシヨ」

だめだ。頭に血が上つて話にならない。私はすつくと立ち上がり、部屋を出る。

「おい、どこ行くんだよ」

話にならない相手に血圧上げててもどうしようもない。騒いでるにーさんはとりあえず棚上げた。こっちも忙しいんだから。

「ちよつと待って」

「私が次に顔を覗かせるまでには、何としてでも帰っていてくださいね」

満面の笑みで笑いかけてやる。後はもう知らない。ただでさえ忙しい時なのに、シツのこともあるんだから。

茶の間に引き返した私は、黒い、小さめの足跡がぐるぐると円を描くように歩き周り、やがて薄くなつて消えているのを発見した。シツの姿はない。あの格好でどこに行つたんだろう。そして、一体誰がこの部屋を掃除してくれるんだろう。

帰つたのだろうか？ だとしたらとても嬉しいのだけれど。玄関から上がってないので、靴が無くなつてるかどうかさえわからない。地下室だろうと狙いをつけたがそこにシツの姿はなかった。片付けはずいぶん進んでいる。

メイさんがぶつぶつ言いながら片付ける横で、ジンさんが作業を再開してる。今年も何とか間に合うだろう。

「どないしたんですか？ お嬢」

「悪魔っ子、氣いついたんか？」

「いや、それが……」

ここははつきり言うべきだろう。覚悟を決める。メイさんの目が怖い。

「いなくなった」

「何やて？」

「……帰ったんちやいますか……？」

ジンさんが平和的で夢のような発言をするが、当然無視し、

「こっちにいないとしたらどこ行ったんだろ？」

「隊長んところか、客車車輛んところやろな」

やっぱり？

「おお、娘っ子。元気にしとったか」

「どこ行つてたの？」

それは私の台詞だよ、シヅ。予想通り、シヅは隊長の元にいた。黒くなっていたはずの服はずいぶん色を取り戻している。普通のススとは違う物質のようだ。

「隊長、お久しぶり」

挨拶して、ふと気づく。私、今年は隊長が卵からかえるの見られなかった。毎年楽しみにしてたのに。

隊長は白い見事な翼を大きく広げ、ヒヒンと馬のようになく。人間で言うところの伸びを何度も繰り返しているところをみると、目覚めたばかりらしい。

隊長に馬に似てるだなんていうと怒られるので言葉にはしない。ペガサスは馬とはまた違う生物らしい。どう見たって翼が生えた馬にしか見えないのだけれど。

けれど、寒い時節以外は卵の中で冬眠ならぬ、夏眠してゐるのは確かに馬とは違う。

「じゃあシヅ、夜になるまで寝ましようか」

茶の間に戻って返し、冷えた体を温めるため、私とシヅは茶の間でコタツにあたりながらココアを飲む。BGMと化したテレビと、温まった体がほどよい眠気を呼び起こしてくれる。

私のほうの準備は整ってるから、後はメイさん、ジンさんが予定時刻までに作り上げてくれるのを祈るしかない。シヅがアシスタントを務め始めてからは、つくり置きなんてものをするとはなくなつた。当日、必要な分を必要なだけ作る。手作りにこだわった店ですから……とでも続けたいところだが、実情は去年のアレ以来、再発防止のためなのだ。

「シヅ、今日はそんなに量ないよ？」

「手伝う」

「……町を一周して、夜景見て終わりくらいに予定になると思うけど？」

「それでもいいよ」

「わかった」

私は一応、仕方がないって顔をしてみせ、自室へ引き上げる。

「あれ、明かりついてる？」

二階には誰もいないはずなのに、なぜだか私の部屋からは明かりが漏れていた。不信に思いつつも、消し忘れたのだろうと扉を開ける。

「そうだった。三田のにーさんいたんだ」

三百眼で睨み付けてやる。

ちよこんと、開き戸の前に膝を抱え込んで座り込んでいる。寒さのためか顔は青白い。気弱な笑みを浮かべこちらを見返す。ちつとも可愛くない。

「……出られない、寒い……出られない、寒い……出られない、寒い……」

呪文のように繰り返す。怖いんですけど。

「なんでこの部屋には暖房器具が無いんだよ」

「必要最低限よ。部屋なんて寝るだけだから、無駄なものは一切置かないの」

「シンブルを馬鹿にしてる」

「不毛な言い争いが聞こえたらしい。」

「何騒いでんの？」

一階の客室に通したはずのシヅまで顔を出す。

「あ、サンタもどき」

シヅは三田のにーさんを指差す。

「へ？」

素つ頓狂な声を思わず上げた私は正しいと思う。

「もどきじゃない、見習い」

三田のにーさんは怒ったように訂正し、慌てて、

「お前、それ秘密だつて言っただろ」

シヅに食つてかかる。といつても、見えない壁に阻まれて、ぎゃーぎゃー猿のようにわめいているだけだが。

バイトかなんかでサンタでもやつてる……と考えるのが普通だが、だとすればこゝまで怒るのは変だ。

「三田のにーさんがサンタ？」

シヅ同様、指差す私。三田のにーさんは真つ赤な顔で、開き直った。

「そうだよ、だからどうしたつてんだよ」

「嘘、マジで？ ちょービックリ」

「古っ」

シヅにツッコまれても、この驚きを表現する言葉を他に思いつかない。

三田のにーさんが本物のサンタ？ ご近所の、その辺どこにでもいそうなにーさんがサンタだなんて誰が信じる？ 誰も信じない、そんな話。でも待ってよ、サンタだつてことはその赤系レザー服がサンタ衣装つてこと？ 待って、子供の夢壊さないで。せめてバイト君が着てる、あの安っぽいサンタ服でも着て。最低限のマナーとして。

「……いろいろ言いたいことはあるけれど」

「全部聞かせてもらつた」

「シヅ、何でそんなこと知ってるの？」

「だって、」

と、シヅは続ける。

「去年、空飛んでるとき、サンタのソリ見た」

「え？」

思い出すと記憶を探るが、あいにく私にはそんなものを見かけた覚えが欠けらもない。

「そんなこと、あつたっけ？」

「いたよ。遠くだったし、結構スピード出してたから、一瞬しか見えなかったけど」

「だろ？ そうだよな。普通は見えないんだよ。今まで誰にも見つかったことなんてないんだよ」

にーさんが怒ったような声をあげる。

「なのに、何であるスピードで俺の姿を見分けられるんだよ」

シヅは可愛く首をかしげ、

「たぶん、うちが農家だから」

意味がわからない。

にーさんは悔しそうな顔でシヅを睨み付けている。そんな顔したところで、唯我独尊のシヅに何ら影響を与えることなんてできないのに。

「サンタのくせに変な格好してたから、妙に記憶に残ってたの」

とどめとばかり、にーさんを指差す。

変な格好つてのは今現在ののにーさんの服装のことらしい。街中には溶け込む格好だが、サンタのそのの上では浮くだろう。

「それからしばらくして、偶然街中で同じ格好した人を見かけたの。気になって声かけたら逃げたから」

「さすがシヅ」

壁に耳あり障子に目あり。シヅには何も隠し事なんてできない。その探究心を満たそうとする貪欲さが実に可愛らしくない。

「でも、何で出られないの？」

無邪気に尋ねられてもわからない。私にもーさんも首を振る。

「簡単な話や」

いつのまにかメイさんが二階に上がってきていた。

「びっくりした、何？」

跳ねる心臓を抑え、たずねる。シヅは気づいていたのか、眉一つ動かさない。

普段にぎやかなメイさんだが、ジンさんと同じく、やろうと思えばいつでも気配を消すことができる。こんな人と同じ屋根の下で暮らしていると心臓に良くない。

メイさんはにーさんの顔をまじまじと見やり、

「サント見習い。かかったのはアンタか」

深深とため息をつく。

「え？」

にーさんが私の部屋から出られないのはメイさんのせいってことだろうか？ でも、考えてもみればそれ以外の可能性が思い浮かばない。

「まさか十年も経って、今だに効果があるとは思わなかったわ」

「メイさん、何したんです？」

恐る恐るたずねる。今まで、メイさんは魔女っぽいことをしてはいるが、魔女ではないと思っていた。なのに、こんなことができるともなればちよつと身構えてしまう。気に入らないからつてヒキガエルに変えるとか……されても困るわけだし。

メイさんはもう一度盛大なため息をつき、

「うちやない。アンタや」

「……私？」

自分自身を指差す。まったく身に覚えがない。

「本当に私？」

メイさんは大きくうなづき、

「あんた、魔女の血引いてるやん」

何それ？ 何の冗談？ けれど、あたりに満ちている空気には嘘や冗談の気配がない。

「待つてよ、それ、どういうこと？」

私は助けを求めるように尋ねた。

「アンタの母親、魔女やつてん。正確にはハーフだったようやけど」

「ハーフ？」

魔女つて遺伝だったの？ そもそも魔女が存在するってこと自体、始めて聞いた。いや、こんな商売しててなんなのだが。

ハーフなら二分の一、じゃあそのの子、四分の一である私はクォーター？ 混乱したままの私を置き去り、メイさんはにーさんに声をかける。

「そういうわけやけえ悪かったなあ、サンタ見習い」

にっこり笑顔。にーさんはなんとも言えない顔をして、

「……いえ、あの、わかるように説明して下さい」

同意見。

「それで、早くここから出して」

蚊の鳴くような声で、私に向かつて懇願されても知らない。わからない。

「魔女だったの？」

シヅが興味深そうな顔で、私の顔を覗き込む。私は首を傾げ、肩をすくめる。

「両親とも、私が物心つく前に死んじやつてるからなんにも知らない」

その場で唯一、両親のことを知っていそうなメイさんに視線を向ける。メイさんは

いつものおちやらけた雰囲気を仕方なさそうに拭い去り、シリアスな顔を作る。

「ま、いずれは話さなあかん話やと思ってるんやけど、アンタぜんぜん聞いてきいへん

し、どうしようかなあとは思ってるん。都合がええし、今話そうか」

眠いので、また後日……と言い出せる雰囲気ではなかった。話が長くなりそうなの

で、階下から椅子と石油ストーブ持ち上がる。コソアの用意し、鍋をストーブにかけ

る。

「こういう雰囲気、肩凝るわ」

シリアスモードをあつさり終了させ、メイさんは大きく伸びをする。

「さつき話すつて言ったじゃない」

シヅは不満顔。そんな顔も実に可愛い。

「別に面白い話やないし、あんたらには関係ない事やん。当事者は聞く気もないみたいやし」

いきなり矛先を向けられ、私はあくびをかみ殺す。シヅ、にーさんの視線が痛い。メイさんの推察どおり、確かに私は話なんて聞かなくてもいいと思ってる。写真でしか顔を見たことのない両親の話をいまさら聞いたところで、どうなるって話でもない。母親が魔女のハーフであつても、私は自分が魔女であるだなんて微塵も感じたことはないし、にーさんを閉じ込めてるといわれても、私にはどうすることもできやしない。こんなことに時間を割くより、今は少しでも眠りたい。

「俺、出られないんですか？」

にーさんが情けない声を出す。だいぶ弱ってきてるらしい。

「アンタ、何聞いてん？ 問題は簡単やつて言うたやん。この子が魔法を解けばええ話や」

「待つて下さい。私は魔法なんて使えませんつてば」

私の言葉を三人は見事に無視し、私を凝視する。

「私は三田のにーさんを部屋に閉じ込めた覚えなんてないし、閉じ込めたいなんて思つたこと、欠けらもないです」

犯人が犯行動機もないまま、犯罪を犯す……なんてこと、愉快犯でもない限りありえない。そして私は愉快犯じゃない。

「せやのうて、サンタクロースなら話はわかるやろ？」

「サンタ？」

「せや。アンタ、小さいころ、サンタを捕まえるって言うてたやん」

沈黙が重い。平生を装おうとする努力も空しく、冷たい汗が頬をそして背を伝う。

「確かに、そんなことあったかも知れない……」

口から吐き出す言葉と同じ速度、もしくはそれを追い越すように記憶の底から湧き出す過去。学級会の議題で「サンタクロースはいるか、いないか」なんて、今思うと可愛らしい、そして馬鹿馬鹿しい討論を行った事がある。私は「いる」派に席を置き、クラス中の大多数を占める「いない」派相手に孤軍奮闘していた。

私が「いる」と確信している理由は単純明快。おじいちゃんの友人である三田のご隠居があまりにもサンタクロースっぽかったからだ。

真白な髪に同じ色のヒゲはふさふさと。眉の下がった優しい顔に大きな体格。子供に話し掛ける口調はいつも優しく、明るく、面白い。

「いい子にしてたら、クリスマスにいいことがあるよ」

口癖のように、会うたびに言われていた言葉。私をご隠居をサンタクロースだと確信した理由はたくさんあった。

圧倒的多数を誇る「いない」派に押され気味な私はどうにかして一発逆転する手はないか……幼い私が考えた手段は簡単だった。

証拠を提示すればいい。

「ご隠居を連れてくれば……いや、それよりもっと確実なのはサンタクロースの格好をしているご隠居を捕まえることだ。良い子の私の元には確実にサンタクロースがやってくる。私はメイさんの蔵書から『目的とする人物を捕縛する魔法』を見つけ……」

「じーちゃんだったのか、狙いは」

三田のにーさんがため息混じりにつぶやく。

「でも、でも——」

私は何とか逃れようと、言葉を搜す。

「もし仮に、私が魔法を使ってサンタクロースを捕らえようとしていたと——仮定してよ？ 何で、今ごろになって魔法が発動するのよ」

絶妙の思いつき、ならぬツツコミにその場は一瞬静まる。よし、私が犯人だってメイさんの推理は外れたと、内心ほくそえんだ瞬間、

「簡単や」

メイさんはピシッとシツを指差す。

「犯人はコイツや」

シツは覚えのない顔で、首をかしげる。

「どんな仕組みの魔法かはよわからへんけど、アンタが発動してへんかった魔法を発

動させたのは間違いない。で、それにマヌケにもこのサンタ見習いがかかったんや」

「いちいち見習いつて付けなくていいから」
にーさんは寂しげにつぶやく。

「私がどうやって魔法を発動させられるっていうの？ 私、魔法なんて知らないよ」

怒った顔のシヅも愛らしい。メイさんは、ふっとアンニユイな顔になり、

「偶然にも、今回ウチがしてた『零囲気作り』が、未発動やったサンタクローズを捕まえるための魔法を補完したんやないかと……」

言い方が回りくどいので、一瞬意味をつかみかねたが、それってつまりはメイさんも悪いってことじゃないだろうか。

「私のせいじゃないじゃない」

シヅが詰め寄ると、

「アンタがいらんちよつかいせえへんかったら、魔法が発動せえへんかったんよ」

メイさんは深深とため息を吐き、

「偶然つて、恐ろしいもんやねえ」

どこか遠くを見やる。現実逃避か。

「つまり、話を総合すると——」

にーさんの声にそろって顔を逸らす。

「お前ら三人とも犯人つてことか！」

沈黙。その場を支配しているのはなんとも言いがたい、重い沈黙。

「ここから出せ」

にーさんの目が怖い。

「……アハハ」

突然、笑い声を上げ始めるメイさん。

「何がおかしいんですか」

にーさんが三白眼で睨む。すべての非がこちらにあるとわかった以上、こちらはおとなしくしているしかない。

「魔法、解く方法なんやけど——」

「ええ」

「誰か知ってる？」

「……え？」

奇妙に重なる声。メイさんは注がれた視線を受け流すように、目をそらし、

「ウチ、知らんで」

「私も知らない」

「いや、私だって——」

にーさんがそれまでにないくらい青ざめる。

「お前、じーちゃん捕まえてどうする気だったんだよ」

最終的に凶悪な瞳で睨みつけられたのは私。

にーさんはメイさんにはあきれた視線を送り、シツはなるべく視線を合わせないように睨み付け、最終的に私をまざまざと睨みつける。

人間関係、短時間でよく把握したものだ。

「た、多分二十六日になつたら解けるわよ」

そらとぼける。かすかな記憶で、魔法書にそんなことが書いてあつた気がする。

「は？」

私の言葉を不信そうに聞き返すにーさんの視線が鋭い。

「いや、だって、魔法使つたとき、私まだ小さかつたんだよ？ だから、よくわからないところは読み飛ばしちやつてるからさ、どういう魔法だかいまいちわかんないんだよね」

「恐ろしい娘っ子や」

メイさんが呆れた顔で私を見やる。

「さすがは魔法の血引いてるだけのことはあるな。魔法なんて、順序と系統がきつちりせな、何の効力もないつての……不完全とはいえ、十数年もそのまま存在させてるし」

メイさんが感心した声をあげる。メイさん、あの雰囲気作りを見てもわかるように魔法になりたいようだが、まったく才能はない。

「でも、そんな中途半端な魔法だとますます解く方法ないんじゃない？」

魔法なんて知らないって言ってたシヅだが、さすが頭のいい子は違う。場慣れするのが早い。

「せや」

メイさんと息ぴったりに魔法について話はじめる。メイさんのマニアックな、専門的魔法談義はいろんな意味で恐ろしいが、その小難しい話に時々質問を交えつつ、おとなしく聞いているシヅの理解力も怖い。

普段は犬猿の仲の癖に、テンポよい会話。一瞬、同属嫌悪って言葉が私の頭をよぎる。

「あああああつー！」

突然の大声に会話を中止され、不機嫌な顔のメイさん、シヅがにーさんをみやる。「何でもいから、ここから出してくれ」

「せやから、そんな方法知らへんって言うてるやん」

「知らんですまされるか！」

メイさんに食って掛かる。だが、見えない壁を叩きつけ、怒鳴りあげている姿は、ただただ滑稽でしかない。

「知らないものは知らないのよ」

シヅもキレた顔で応戦している。久々に見るが、可愛いだけに相当怖い。

ぎやーぎやーと言い争う声にかき消されているが、玄関チャイムが何度も鳴らさ

れていることに気づく。

「誰だろ？」

私はそつとその場を離れ、階段を下りる。二階の喧騒が家中に響いているが、頭の隅に追いやり、よそ行きの顔で玄関に向かう。

「こんばんわ、夜分遅くに」

ソフト帽を取って頭を下げられ、私は玄関先に正座してそれより深く頭を下げる。

「いえいえ、こちらこそ」
顔が引きつっていないか、今すぐ鏡で確認したい。あまりの緊張に背中に汗が噴出す。

ラクダ色のしゃれたコートに深緑のマフラーがなんとも渋い。禿げ上がった頭は弱い光源にも見事なツヤの良さを見せ、残った髪は綺麗な白髪。顔にはいつもの穏やかで優しい、人懐っこそうな笑み。

「孫がお邪魔になつとるようですなあ」

三田のご隠居は二階へ続く階段を見上げる。そんな姿もまるで嫌味がない。

「まさか、そんな……いるわけじゃないですよ」と言いたいが、響いてくる怒鳴り声に反論の余地はない。泣き出したい心境で、二階を睨みつける。

「あがらせてもらつても良いですか？」

「はい、ええ、どうぞご随意に」

ぎくしゃくとスリッパを出す。

二階へあがりつくまで、私には拷問のような時間が流れた。

二階へつき、言い争っていた三人を目の前に、ご隠居は困った笑みを浮かべコホンと小さくセキをする。あまり大きくもない音だったが、三人は瞬時に振り向く。

「じーちゃん」

「ご隠居」

「サンタクロース？」

にーさん、メイさん、シヅ、それぞれが相手を確認するように声をあげる。

にーさんは強力な助っ人が登場したとばかり満面の笑みをこぼし、メイさん、シヅは後ろめたそうな顔で私を睨む。いや、睨まれてもどうしようもないから。実際。

「これは一体どうしたものかね？」

私の顔を見る。

「聞いてくれよ、じーちゃん」

孫のあげる声をさえぎり、

「説明してくれるね？」

私に顔を向ける。そこに浮かんでいるのは相変わらず、優しそうな微笑み。だからこそ怖い。

私は理解している範囲の出来事を詳しく話す。憶測や言い訳は省いて。

何度も深くうなづきながら聞いていたご隠居は、話し終わった私に微笑を向け、「君は良い子じやな」

「……え？」

驚きの声を上げたのは私だけではない。一番啞然とした顔をしていたのはにーさんだったので、ギロリと睨み付けてやる。

「最近は大入だけじゃなく、子供たちでさえ、妖精の存在を信じなくなってしまったからなあ」

まじまじとご隠居を見やり、メイさんは疲れたように微笑んだ。

「ほんになあ」

私の方をちらりと見やり、やさしい笑みを浮かべる。母性的な笑みってやつだ。初めて見た。

「え？　メイさんって人間じゃなかったの？」

シヅが驚いた顔でメイさんを見やる。

メイさんは重々しく頷き、

「うちもジンも妖精や」

「冬の間だけ活動する、ね」

私は嫌味っぽく言葉を付け足す。そこに寂しげな響きが含まれていたことに自分でも驚く。

「そっか。だから一人暮らしつて……」

シヅの声に、寂しい季節を思い出す。今はまだ、メイさんもジンさんもいる冬だつてのに。春も夏も秋も、暖かい季節にはこの家は私一人きり。冬の妖精である二人に文句を言つてもどうしようもないのだけれど。

「君らは変わらんな」

「せやろ？」

「隠居の声に、いつも通りの様子でメイさんはニヤリと笑う。

「この娘がおる限りはうちらは健在やで」

バシバシと頭を叩かれ、むっとメイさんを睨み付ける。そこにあるのはなんだか幸せそうな顔で。口から出かけていた嫌味を忘れてしまう。

「そうじゃな。妖精は存在を信じる力を生きた糧にしているからな。個性的な君らが壮健なのは彼女の信じる力が強いからだろうね」

「隠居は一人領き、

「君が魔女の血を引いていたとはね」

私に顔を戻す。

「私も知りませんでした、さつきまで」

「ユキが一人息子の結婚相手に困惑していたが、それが理由だったんじゃない」

「隠居はうなづく。ちなみにユキつてのはうちの死んだじーちゃんのこと。ユキノス

ケって名前だけれど、みんなユキって呼んでる。

「あの、私の母が魔女だつてこと、何か問題だったんですか？」

父母の写真なんて、結婚式の際に写したらしい、紋付袴と高島田姿の硬い顔したものしか見たことない。それ以外、私は二人の顔なんて知らない。

「ご隠居は難しい顔をした後、息をつき、

「何も話してないのかね？」

メイさんに尋ねる。メイさんは苦笑交じりに首を振り、

「この子、何も聞いてきいへんかったから」

「そうか」

「でもさつき、メイさんがそのことについて話してくれてただけど、この人が邪魔したのよ」

シヅは「ごぞとばかりにーさんを指差す。さすが、シヅ。にーさんが怒りに顔を赤黒くしてるが、それさえも完全無視してるところが常人にはまねできない。

「ご隠居はそんな孫を見やり、ため息一つつく。階下からコップを持って上がり、ご隠居にココアを配る。夜通し仕事する予定だったのに、どうやら今夜は眠れそうにな

い。私は眠ることを諦め、聞く体制に入った。

「魔女狩りという言葉聞いたことがあるだろう？」

見かけによらず、ご隠居は核心に近い辺りから切り込んだ。教科書には出てこな

いが、小説などでよく見かける言葉だから意味はわかっている。中世ヨーロッパ辺りで行われていた異端宗教者弾圧だ。私はうなづく。

「魔女狩りで狙われたのは魔女だけではない。我々も、妖精も皆狙われたのだよ」

不遇の時代を振り返るように遠い目。メイさんはぼんやりとどこか遠い過去を思い出しているかのような顔。

「魔女やサンタクロース、そして君のような精は人間に近い。妖精や幻獣と違ってね——隠れて生きていくことは難しくない」

難しくないといい切ったが、その言葉に込められた思いの深さ。決して楽ではなかったのだろう。ただ、ご隠居がその時代に生きていたとは考えられないけれど。

「魔女狩りが行われる原因となった出来事には、魔女の方にも原因があった。だがね、魔女狩りで迫害された多くのものたちは、魔女ではなかった」

ちらりと顔を上げ私を見る。私は話を続けてくれるよう、静かに見返す。言い知れない不安感にジワリ、包み込まれながら。

「魔女は人間世界に実によく溶け込み、繁栄しているよ。君達が知らないだけで、この世界にはずいぶん多くの魔女がいる。溶け込み切れない我々や、存在を否認されて消滅しかかっている妖精達、こちらの世界に現れることさえままならない幻獣達との溝は深まっていくばかりだ」

メイさんジンさん、そして隊長がいる生活を私は当たり前だと思っていた。雪の精

である私にとって、この生活は当たり前のこと。なんだか、大きな重りを飲み込んだ気分。

「妖精や幻獣は元来、細かなことを気にする方じゃない」

確かに、その日一日が楽しく暮らすことができれば良いって感じはメイさんジンさん、そして隊長からもうかがえる。

「そんな妖精や幻獣達が、魔女を嫌っているんだ。事の重みはわかるかね？」

「……はい」

言葉が、続けられない。魔女は、それまでの仲間達を裏切り、いや、裏切ったなんでものじゃない。自分達の手を汚さず迫害したんだ。そして、自分達は人間に紛れ、繁栄している。だから――

「私、わたし……」

どうしたら良いんだろう？ 今までどおり、雪の精なんて名乗っていて大丈夫なんだろうか？

ご隠居は気まずそうな、弱りきった顔になり、やがていつもの穏やかな笑みになる。「君が気にすることは無い。元来、妖精や幻獣は気性が激しい。選り好みをするんだ。気に入らなければ、君の前に姿を見せたりはしないものだよ」

メイさんと顔を見合わせ、ご隠居はにこりと微笑む。何か無言で言葉をやりとりしたような顔で。

「せや。うち、ジンがどこまでやっとなるか見てこんと」

急に思い立った顔で、メイさんはスリッパの音を響かせながら階下へ降りていく。

「アイツ一人やと、量より質に走りよるからなあ」

無駄に大きな声で愚痴りつつ。シヅも慌てた様子で後に従う。

泣きそうになっていた私は、そのタイムシングに目をしばたかせる。はたから見れば、あくびをかみ殺したような顔をしているだろう。

「えつと、あの……」

私はどうして良いかわからず、しどろもどろしてしまふ。

「孫を連れて帰りたいんだがね。君のと同じ様、うちも今時分は忙しいからね」

ご隠居に言われ、私は青ざめた。

にーさんは三角座りのまま、諦め顔で私を見ている。怖い。実に怖い。

「いや、それがですね……」

私はもう一度繰り返し、現状を説明した。魔女のクオーターだなんて言われたと

ころで、私、一時間前まで自覚がなかったのだから魔法のことなんて良くわからない。まして、掛けた覚えもない術の解き方なんて皆目検討も付かない。

ご隠居は「それは困ったね」と穏やかな顔でにーさんを見やり、

「ワシが前に捕まったときは、簡単に出られたんだがね」

数秒の沈黙。

「——え？」

私とにーさんの声がハモる。

「じーちゃんも捕まったのか？」

「私、ご隠居、捕まえてた？」

うるさそうな顔で、私とにーさんの顔を見やり、ご隠居は首をかしげた。

「あの時はすぐに出られたんだがね」

「どうやって！」

私とにーさんの声が……以下同文。

「あの時は——」

と、ご隠居はゆっくり記憶を思い出し始め、ぽんとひざを打った。

「手をつないで外に出たんだよ」

「ああ」

拍子抜けした声を上げてしまう。余りに、意外。あつけない。本当にそれで出られるのか？ 疑問さえ抱きつつ、私は三角座りしているにーさんの手を持って、引っ張る。にーさんは驚き顔のまま簡単に廊下へひっくり返った。ぐしゃとつぶれた蛙のようにはげに。ほんと、ビックリ。

「いきなり何するんだよ」

またまた顔を赤くしているところを見ると怒っているらしい。

「お、女が気安く男の手を握るんじゃない」

「はい？」

何を言われたのか理解できず、私は一オクターブくらい高い声で聞き返してしまつた。感謝の言葉、は無いとしても、それまでの態度からして何らかの罵詈雑言をはくかと思つていたら……なに可愛らしいこと言つてんだか。

「にーさん？」

「み、見るな」

顔真っ赤にして、階段を駆け下りていく。途中、足を滑らせて落ちたっぽい派手な音が聞こえたけれど、すぐに玄関開く音したから、たいした怪我はしてないのだろう。「まったく、孫にも困つたものです」

ご隠居は微笑みつつ、お暇しようと立ち上がる。ココアのカップを受け取り、見送ろうと階段を一緒に下りる。

「うちは商売柄、クリスマスなんてあつたものじゃない」

私は適当に相槌を打つ。サンタはクリスマス前と当日が勝負だが、雪の精はそうはいかない。うちは冬の行事は世間の目をごまかす程度しか行わない。忙しくてそれどころじゃないのだ。

「孫は、サンタクロースのことは理解していると思うんだがね、クリスマスに好きな人と過ごしたいなどと言ひ出しましてな」

「若いですからね」

自分のことを棚にあげて、私は相槌を打つ。にーさん、若いなあ。

「クリスマスに仕事をしないサンタクロースなど、サンタクロースではありませんからな、プレゼントを渡したいのならば、クリスマス前に渡せと言ってやったんですよ」

「そりやそうですね」

「まさかサンタの技術を使って、お嬢さんの部屋に忍び込むとは」

「やりすぎですよね」

と、相槌を打つて、私はギギギと首をご隠居に向けた。変わらぬ、穏やかな笑みを浮かべた顔がそこにある。

「忍び込んだ？」

「そうとしか考えられんよ。あの部屋に入らない限り、あの魔法で捕まることはないのだから」

チャーミングにウインク。にーさんは「知らない、わからない」と言い張っていた癖に、サンタクロースの技術を使って私の部屋に忍び込んだというのか？

「な、何のために？」

口が勝手に理由を尋ねた。

「でっきたでっ！」

タイミング良くか悪くか地下からメイさん、シヅが現れる。手には大きな袋。その

場に漂う雰囲気をもろともせず、二人は実に楽しそう。

「——お忙しいところお邪魔しましたな」

ご隠居は答えかけた口を閉ざし、微笑みながら辞去する。私は質問に答えてくれなくて良かったと何故か安堵する。どうして？　なんて考えちゃダメだ。

ジンさんが改心の出来とばかり、鼻歌まじりに姿をみせる。年に一度あるかないかの満面の笑顔。よほど出来が良いらしい。ただ、ジンさんの鼻歌ってクリスマスソングしかない。この時期、テレビやラジオで流れている曲しか耳にしないせいでもあるんだけれど——なんでよりにもよって『恋人はサンタクロース』なのだろう。なんとなく、どつき倒したくなってくる。

「お仕事、お仕事♪」

陽気なシヅの後に続き、私は地下から袋を運び出し、客車車両に詰めしていく。雪の精つて私のはずなのに、いつの間にか私のほうがシヅのお手伝いをしているような印象を受けるのは何故？

荷を詰め終わると、私はジーちゃんからもらったメートルみたいな服に着替え、シヅはサンタのお嬢さんみたいな服装になる。いつの間に用意したんだろう、その服。でも、かなり可愛いから、良しとするか。忙しく動いていると、だんだん、気分も晴れてきた。いつまでも沈んだままじゃ仕事はできない。

隊長にひかれた客車車両がふわりと宙へ舞い上がる。円を描くように、上へ上へと

昇っていく。

二軒お隣のご隠居のうち、いやお屋敷が見える。裏庭ではこの寒空の中、色黒・マツスルボディーのおにーさん方がトレーニングに励んでいらつしやる。実に目にしたくない光景。あれがトナカイだつてじーちゃんに言われた時の私の心情を察してほしい。今日の夕方までそれは嘘だと思つていたのに……。

メイドや執事たちが忙しそうに屋敷の中を駆け回っている。盛大にクリスマスパーティーでもするのだらうと思つていたが、ご隠居がサンタクロースだと判明した今となれば、あれはクリスマスの妖精達に違いない。クリスマスまで残り少ない。準備に追われているのだらう。

そんな中、お屋敷の一番高い窓から空を見上げているにーさんの姿が目に入る。夜空に紛れて、こちらの姿なんて見えていないだろうことをわかつていながら、去年までは手を振ったりしていたけれど——あんなことの後、誰ができればよいか。

やがて、上昇はやみ、周回しはじめる。街の上空、夜のネオンがキラキラ星空のよう。人の姿なんて砂粒以下だ。凍てついた大気が頬を刺す。それさえ気持ちいい。

袋から雪の素を取り出し、撒きはじめる。最初は少しづつ。だんだん豪快に。街の明かりに照らされ、キラキラきらめきながら、だんだん、雪は大きく成長し、降り積もっていく。白く、街を染めていく。

「白？」

私は手元の雪の素をよくよく見やる。白、とは少し色が違うような――

「シヅ、これ、色付いてない?」

「やっと気づいた? メイさんの実験でできた雪の素。新色だつて」

「新色つて、口紅じゃあるまいし――」

私の手から放たれる雪は淡いピンク色。シヅの手から放たれる雪は淡い黄色。

「これつて、大丈夫なのかな?」

「大丈夫じゃない? 降り積もれば白くなるつて言つてたし」

根拠の無い自信でもつてシヅは撒き続ける。水色、黄緑、オレンジ色――

パステルカラーの雪が舞い降りる。夜の街に降り積もる。

「たまには良いんじゃない? こんな雪があつても」

シヅは楽しそうに言い、

「雪の精がいるつて事自体、みんな知らないんだし」

豪快に撒き続ける。その体にみなぎる根拠の無い自信が羨ましい。実に可愛くな

いけれど。

隊長は豪雪にならないよう、シヅの撒く雪を分散させようと夜空を駆け回る。超

特急だからか車体が揺れる。危ないと言いつつ、私とシヅは笑う。

袋がずいぶん少なくなる。ふと、私はあることに気づく。

「私が撒いてる雪、全部同じ色なんだけど?」

「それってジンさんが作った分でしょ？」

シヅはこちらを振り向くことなく言葉を続ける。とうとうジンさんまでメイさんに汚染されたか。私はがっくり肩を落とす。ジンさんだけが、昔ながらのすばらしい雪を作れる人だったのに。

「触れた人の感情によって雪の色が決まるって言ってたよ。『お嬢は白い心をしているから、真つ白な雪が降る』って」

シヅつてばジンさんの真似、上手い。気弱そうなそのしゃべり方、いつもしてくれれば、とてもとても可愛いのに。それにしてもジンさんつてば相変わらず夢みてるなあ、私に。赤ん坊でもなければ真つ白——無垢な感情の人なんているわけ無いのに。でも、ジンさんメイさんが妖精だとは思わなかったわ」

シヅは呆れた口調で言葉を続ける。
「妖精つてもつと小さくて可愛くて、背中にトンボか蝶みたいな羽が生えてるものだとばかり思ってた」

「アハハ——」

空笑い。シヅには絶対、トナカイのことは言っちゃダメだ。

「何色なの？」

「え？」

「メイさんと賭けしてるんだ」

嫌な言葉。何、賭けつて。

「青なら悲しい、オレンジは楽しい、紫は怒ってる——」

シツの口からつむぎだされる呪文。それつてもしかしてもしかしくとも、色によつて私の感情がわかる、なんていう、そういう仕組み？

「私に色のことを尋ねたつてことは、白じゃないつて事でしょ？ 何色なの？」
そういう妙に鋭いところは可愛くない。

「何色なの？」

念押しされて、私はうそぶく。

「綺麗な空色」

「空色——水色つてこと？ 『青は悲しい』だけれど、水色はなんだつたつて？」

困惑しているシツを横目に、私は雪の元を撒く。考えてみれば、道ですれ違った時、挨拶するくらいだったのに、今日はずいぶん話したものだ。

枕元にプレゼントをそつと置くのがサンタクロースの流儀。魔法が掛かったあの部屋の、私の枕元に毎年プレゼントを置いてくれたのはサンタクロースだったのか、うちのじーちゃんだったのか。

ともかく。久々に、サンタクロースからのプレゼントが枕元にあるのだ。そう思うと、なんだか顔がにやけてしまう。怒りたいのに怒れないのは、見習いとはいえ、にーさんがサンタクロースだったからだろうか。

「なんだか楽しそう」

シヅの声に、私は袋の中身をぶちまける。雪よ降れ。降り積もれ。

「ずるい、私の撒く雪がなくなっちゃう」

慌てて袋を確保し、シヅは撒く作業に戻る。

毎日がドタバタで、目の回るような忙しさ。でも、それが楽しい。

ああ、冬なんだ——今は楽しい冬なんだ。私はクスリと微笑んで、淡いピンクの雪を撒く。

冬

冬は冷たい。

反論があるだろうから、先に言う。私の言う冬とは、男の名前。桜井冬

さくらいふゆ

。その時、なぜか店内にいたのは私と彼だけだった。ラジオから流れた変わった名前に笑いながら、彼は私に名前を明かした。

『桜井冬』

紙ナプキンに書かれた文字。冬生まれだから、冬という安直な名をつけられたのだと、笑って言った。冬なんて名前とはまるで違う、夏のように明るい笑顔で。だから、私も素直に明かした。

「私の名前も同じです」

彼は何を言われたのか、わからない顔。

「私の名前」

「あきちちゃん？」

最初は不思議そうな、そして、だんだん嬉しそうな顔になる。みんな、平仮名で書かれた私の名前しか知らない。せめて、「子」を付けてくれれば良かったのに、と親を恨み、名前の漢字を明かさないうようにしていた。

「あきって、秋って書くんです。秋生まれだから秋。すっきり一文字で秋」

テーブルの上。秋という字を指でなぞる。

「私、兄弟多くつて。だから」

「俺は一人っ子だけど」

彼はそこで初めて寂しそうな顔をして。一瞬後には、笑顔になる。

「でも、あきちゃんと同じか」

「同じですね」

秘密を共有したような、そんな気分が恋心に変わり、結婚まで到達するのはあつという間だった。自他共に認めるスピード婚というやつだ。

そんな彼と出会ったのはずいぶん前。季節は春。窓の外には、桜舞い散る大学のキャンパス。彼が桜を見上げながら歩いていたのをはつきり覚えている。

私は大学生などではなく、離婚して実家に戻り、大学近くの喫茶店でパートを始めて数日目。お客さんの波が引いた合間だった。

窓の外。道行く人々が見納めだろう桜を見上げている。そんな中、彼は特に熱心だった。早足ながら、顔は桜に向けたまま。桜の木は道のすぐ横ではなく、小川を挟んで植えられている。あの頃、転落防止用の策は無く――

「あつ」

私は思わず声を漏らした。まさか、落ちるとは思っていなかった。店から飛び出す。水の音が派手にしたのだろう、人々が男を見ている。頭から水をしたたらせながら、

春の小川にたたずむ男。男は困ったような顔をしながらも、桜を見上げていた。

「桜井さん、何やってるの」

声をかけたのはマスター。雨に濡れたお客さん用に用意されているタオルを肩に、男を小川から引つ張りあげる。良かったと胸を撫で下ろしつつ、私は急いで店に戻る。店内には私とマスターだけだったが、店員がいない店なんて、無用心過ぎる。

水に濡れた彼がその後どうしたのか、私は覚えていない。ただ、しばらくマスターが、からかっていたのを覚えている。

「桜井なんて名前だから桜が好きなんだろう」

彼は決まり悪そうに笑い、ブレンドをすすする。春になれば、決まって「川に落ちるなよ」なんてからかわれて。そんな店員と客という関係が数年続いたが、彼が猫舌なことは結婚するまで知らなかった。

『桜井秋』

広告の隅、白いところに名前を書いて、彼に差し出す。

『井』が無ければコスモスなのにね」

「コスモス？ そんな字だっけ？」

「そうよ。秋の桜でコスモス」

私はコーヒーを口に含む。甘くてまろやか。私のコーヒーカーップにはたつぷりの砂糖とミルク。彼のカップには氷が二つ。季節は冬だというのに、それでも氷が必要らしい。

テーブルの上のコーヒーはキャラメル色と、ブラック。色も味も温度も違うのに、どちらもコーヒーだから面白。

「桜の冬は無いけど、冬の桜はあるよ」

ぼつりと言われた言葉がわからず、私は首をかしげる。彼は私の名前に並ぶように『桜井冬』と書いて、『井』をぐしやぐしやと消す。そして、その下に『冬桜』と書き足す。

「冬桜。群馬にね、あるんだって」

「へえ」

「いつか、見に行こうね」

私はうなづいた。いつか、は私たちにきつとやってくる未来だと思っていたのに。冬は冷たい。

冷たい冬は、白い着物を着て箱の中で眠っている。

NとかMとか

世界には多種多様な生物が存在し、互いに互いの存在を助け合いながら生きていく。弱肉強食。自然界の法則にして完全なる摂理。何も無駄はない。

とはいうものの、存在意義を疑うべき生物もいる。一般的なのは、頭文字G。黒光りする、いやらしい虫。三億年程前には、体長五十センチ以上のものもいたというから恐ろしい。

けれど、私はそれ以上に大嫌いな生物がいる。頭文字N、英語ならM。千葉にはアレをキャラクターとした巨大な遊園地があるし、以前は子供向け番組の三人組キャラクターの一匹だったし、とあるゲームでは黄色くて電気まで放つ。Nから派生した様々なキャラクターが全世界的に大人気だが、忘れてはならない。十四世紀のヨーロッパでペストを流行させ、国民的人気な青いネコ型ロボットの耳を噛み切るなどしたのはあれなのだ。なぜ、あの気味の悪い生物Nがこれほどまで世界的に愛されているのか、私には理解できない。

そして、だ。東西問わず童話や物語にあれば登場する。何より忌まわしいのは十二支であることだ。牛の頭に載っていたというが、なぜそれがリスではいけないのだらう。フレットでもプレーリードッグでもスカンクでも良かったはずだ。Nでなくとも、小さくてすばしこい小動物などいくらでもいるというのに。

年明け早々、私は頭を悩ませている。そう、年賀状だ。いつもであれば、我が家には夕方前に配達されるが、元旦の郵便屋さんの気合は違う。昼前にはアルバイトの

自転車少年がはがきを抱えてやってくる。たぶん、あと一時間もしない間に。私は何度目になるかわからないため息をつきつつ、手元に広げた喪中のはがきのデザインパンフレットに目を落とす。

「美弥

みや

、諦めが悪いぞ」

コタツにミカン。正しい寝正月のスタイルである寝巻きにどてら姿の姉が、DVDから目を離し、ニヤニヤ笑う。年をまたぎテレビ画面に映されているのはホラー。十時間近く見ているだろうか。赤い血しぶきと黒っぽい霧囲気が正月らしさを台無しにしてくれているが、Nという単語と画像を三が日中、映し出してくれそうなテレビ番組を見ない替わりとして、姉が持ち出してきた条件だから文句はいえない。文句は言えないけれど、すでに食傷気味だ。

「誰殺すつもりだったのよ」

「そんなの、お姉ちゃんに決まってるじゃない」

喪中のはがきの申込書を出す直前、突然実家に帰省きた姉に見つかり今日に至る。義兄は正月休み返上で仕事の為、姉はのんびりできる実家に入り浸ることにしたとの話だが、師走入ってすぐから連絡もなく突如帰省してくる必要はないと思う。父母と私の執拗な問いかけにも姉は口をわることなく、独身時代以上に自由気まま

な生活を始めた。何か理由があるのだろうか、話さないものは仕方ないとばかり
父母は毎年の予定通り、滋賀の田舎へ旅立っていった。帰ってくるのは三が日明けだ。
家に残ったのは餅嫌いの姉と、N嫌いの私。考えてみれば姉妹二人だけで正月を迎
えるなんて初めてのことだ。正月といっても二人だと、自然な成り行きで寝正月に
なっている。大晦日はインスタントそばだったし、今朝だってインスタントラーメンだっ
た。歩いていける場所に年中無休なお店があると、怠惰な生活に拍車がかかる。

ゴボゴボと、ポットがうめきをあげる。それでも数回「注ぐ」ボタンを押した後、
「お湯入れてきて」

カップを手にした姉が言う。ココアの薫りが鼻につく。カップ半分もお湯は満たされ
ていない。それより、それ。姉が自分だけ飲もうとしているココア。昨日、私が買った
ものではなかっただろうか。私がかごに入れてるそばで「ココアは太るのよ」と恐ろ
しげに言っていた口は誰もものだっただろう。

「自分で行けばいいでしょ」

「あんたって、ほんと姉思いの優しい妹だわ」

「そうでしょうとも。妹思いの優しい姉なら喜んで死んでくれれば良かったのに」

忌々しげにミカンが一房、姉の口の中に消える。昨日の晩、コタツ中央に山と積ま
れていたはずの黄色の山はずでにない。テレビ画面の中では、主人公の友人が肌につい
たゲル状の粘液に悲鳴を上げている。こんなDVDを見ていて、よく食欲が失せない

ものだと関心する。特に会話も無く、時計の音と、テレビからの悲鳴だけが家に響く。なんて素晴らしい正月だろう。

予告なく、表から自転車のブレーキ音。とうとう来た。思ったより断然早く。

「さ、年賀状とつて来ようっと」

姉はにこやかに立ち上がる。ゾンビに襲われた女性の凍りついた表情が画面いっぱいになり広がったちょうどその瞬間、タイミングよく一旦停止させて。姉に早く戻ってきてほしいような、そうでないような微妙さが部屋に満ちる。

「今年はやっぱ多いわね」

姉の感嘆の声もうなずける。姉が抱えた年賀葉書の束は例年よりはるかに多い。

「あんた宛、特にあるわね」

宛名別に葉書を仕分けしていく姉の手元。私宛の山が見る見る高くなっていく。切手部分の干支のイラストが目に入り、不愉快だ。それ以上にわざわざスタンプやシールを表面に貼つてあるものまである。中学生ってなんでこんなに手のかかる嫌がらせが好きなんだろう。中学の臨時講師なんて引き受けるんじゃないかと後悔する。

「きちんとお返し書かなきゃダメよ」

よく出来た人間のような台詞。姉の口から出ると白々しい。年賀状なんて、ソフトで楽々簡単作成すればいいのだけれど、来た葉書全てに目を通さなきゃならない。

裏面にしか名前を書いてないものもあるから。

「地獄だわ」

「地獄って、可愛いものじゃない」

テレビでは生々しいゾンビたちが墓場でうごめいている。私にはそっちのゾンビのほうがまだ可愛い。可愛くないけど、Nに比べればマシだ。

覚悟を決めて葉書を裏返す。

「くっ……」

Nのドアップ写真。黒い瞳がテカテカと薄気味悪く光っている。「あけましておめでとう(ハート)」の吹き出しが忌々しい。二枚目——

「うぐっ」

リアルで緻密で繊細なタッチの絵本イラスト。青い上着のウサギのそばに、ワンピース姿のN。三枚目——

年賀はがき一枚で一日寿命が縮むと単純換算して、私の余命、今日一日で二ヶ月くらいは短くなった。生徒たちからの葉書だけじゃなく、先生方に知人、ダイレクトメールによつて。さすがに親友たちはNの文字さええない年賀状を寄越してくれていたが、唯一。「ごめん。でも、かわいいでしょ」の文字とともにNの着ぐるみを着た子供の写真があった。親友より我が子の可愛さを優先させたのだ、亜莉沙

ありさ

は。

年賀状を全て確認し終わり、お返しの葉書を作成する。ポツポツと住所を入力しつつ、十二年後の正月を思うと憂鬱になる。その前に。Eメールと、遅れてやってくる年賀状があることを私は、完全に忘れていた。

特にメールだ。Nの文字さえ毛嫌いする私の元に、Nの動画が送りつけられる日が来るとは夢にも思ってもいなかった。グリーティングメールのいくつは動画を見終わらなければ文章が読めない。メールを寄越した中の数人はまったく悪意が無いだけに、性質が悪い。口からエクトプラズムでも吐きたくなる。

「ごめんください」

玄関から声。ちらりと姉を見やるが、さすがにどてら姿で人前に出てほしく無い。ジーンパンにセーターの私が仕方なく腰を上げる。正月早々誰だろうと思ったら、義兄。

「いるかな」

「いますけど」

声を落とす。

「何かあったんですか？ 一ヶ月近くいるんですけど」

兄は言葉を探すためだろう。玄関先をあちこち見回す。何かを探しているかのよう。でも、答えなんて書いてあるわけない。数分考え込んだ果て、兄の答えは、

「まあ、いろいろ」

「だそうだ。姉の答えは「ご想像にお任せします」だったから似たもの夫婦と言えるだろう。」

「やつときた」

姉は呆れ声ながらも、楽しげな様子で現れる。パンツにセーターにコート。そして、薄化粧。独身の頃から、身支度が異常に早い。魔法少女よろしく呪文を唱えたら服が変わる特殊才能があるのではなからうか。

「じゃ、私帰るから」

「パンプスを履きながら、姉は義兄と談笑している。「義父さん達は滋賀？」「そうよ」後日、挨拶来ないとな」「二が日明けたら帰ってくるわよ」

「姉は突発的な思いつきで行動をする人だけれど、今回は何がなにやらさっぱりわからない。帰るのならば、理由くらい説明してからにしてほしい。」

「なんだったの、結局？」

「年越しホラー鑑賞を反対されたの」

「海外旅行の方がいいよね？」

「姉と義兄、二人が私に向かって言う。私に言われても。」

「ま、それはもういいわ。荷物は着払いで送ってね」

「そそくさと玄関を出て行く姉。実家であつぷり堪能できたわけだしね。慌てた様

子で追いかけていく義兄。二人の力関係が良くわかる。

玄関を閉め、コタツの前に引き返す。私以外誰もいない家。静かで——ホラーDVDを一人で見るのはさすがに怖くなり、テレビを消してしまう。世界中から音が消えていく錯覚。時計の音が大きく響く。姉が帰ってまだ十五分も経っていない。ヒマな時ほど時間はゆったり流れる仕組みになっているらしい。

うつらうつらし始めた私の耳に突如、天井裏を走り抜ける音。

「り、リスかな」

私の声に答えるように「キィ」と鳴き声。リスつて、なんて鳴くんだったけ？ 幼き頃体験した悪夢が蘇る。姉と共に昼寝していた私は、違和感に目を覚ました。目を開ければ間近に凶悪な瞳。悪臭。ごわごわの毛皮。えたいの知れないものへの驚き。あまりにビククリしすぎて声を上げることもしない。永遠とも思える間、私は凍り付いていた。Nが姉の寝返りに驚き、私に一撃くれて去っていくまで。去り際、発していた鳴き声は「覚えておけ、また来るぞ」と脅しているようだった。三つ子の魂百まで。物心着く前の出来事だが、私はそれを一生忘れることは出来ない。

トタトタとまた、天井裏で音がする。ええつと……父母が帰ってくるのは早くて三日の夕方。私はそそくさと身の回りのものをまとめ、家の鍵を閉め、姉の家を指す。こつちだつて一カ月近く迷惑かけられたのだから、やっと仲直りした二人の、夫婦水入らずをぶつ壊しても文句言われる筋合いは無いはずだ。

だって、十時間ぶっ通しでみたホラーより、Nの存在はよっぽど怖いから。

紙飛行機

水色の紙飛行機が宙に舞い、暗い海へ落ちていく。灰色の混ざった空。分厚い雲をかき混ぜるように強い風。転落防止の鉄柵に寄りかかった愛は、バッグから取り出した紙飛行機を一つづつ空へ投げる。

弧を描くもの、直角に落ちるもの様々に、崖の下へ向かい落ちていく。水面へと向かい飛んでいく。それはまるで散る花のよう。それとも、旅立つ魂——

「ごめんね、いっちゃん」

考えるのを止め、愛はつぶやく。決別の言葉は自分の為。これで終わり。終わらせなければ。

恋人の勇は筆まめだったから、手紙はたくさんあった。読み返しながら、泣きながら、丁寧に折った。愛を幸せな気持ちにしてくれた便箋は、全て海へと飲み込まれた。いっちゃんの事忘れないといけないの、私。幸せな日々が走馬灯のようによみがえりかけ、愛はそれを否定する。彼なんて、最初から存在しなかった。そう思わなければいけない。だって、そうしないと私、生きていけないから。勇が死んで、一年過ぎたのに、ちっとも悲しみがいえないから。

「バイバイ」

身をひるがえし、愛は歩き出す。あふれる涙はそのままに、唇をかみ締め、前を見つめて。

愛が三歳年上の友人、江梨子に突然呼び出されたのは喫茶店。話がある、とだけ言われてきたのに、一向に話は切り出されたくない。運ばれてきたケーキに舌鼓を打ちつつ、世間話に花を咲かせる。会話の途切れた瞬間、狙っていたかのようなタイミングで江梨子は結婚を告げた。

「お、おめでとーう」

掛ける言葉を見つけれず、愛は戸惑い気味に声を出す。呑みかけていた紅茶をテーブルに置き直し、向かいに座る江梨子に改めて祝福の言葉を告げる。

「ありがとう」

江梨子は幸せそうに微笑み、ケーキにフォークを突き刺す。

「でも、どうして？」

愛が驚くのも無理はない。江梨子はこの前まで喪に服していたはずなのに。勇——江梨子の双子の片割れ、愛の恋人だった彼の突然の不幸の為に。

「できちゃった結婚」

江梨子はあつけらかなと言いつち、ケーキの上に乗っているチェリーを口に放り込む。

「な、なんで？」

信じられない。勇の死に嘆いていたのはついこの間。同じ悲しみを共有していたはずだったのに。愛は釈然としない。まるで、自分ひとりだけ置いていかれた気分。

「私もわかんないんだけど、なんとなく、そんな感じになったってどうか
要領を得ない。」

「何ヶ月なの？」

「七ヶ月」

「え？ もうそんななの？」

ワンピース姿の江梨子。ゆつたりしたデザインなのだが、お腹は驚くほど目だつていない。

「うち、目立たない家系なんだって」

まじまじとお腹を見やり、視線をはずす。幸せそうな江梨子の顔に、なぜか、心臓に杭を打たれた気がしつつ、愛は微笑を浮かべる。

「——そう。もうすぐじゃない」

「そう、もうすぐなの」

そんな会話を交し合ったのが約三ヶ月前。江梨子は予定日より十日早く出産した。病院へ、江梨子の両親と共に駆けつけた愛は、江梨子の枕元に眠る赤ちゃんを見る。「かわいいわね」

愛は病院に来ようだなんて思っていなかったのに、江梨子の両親に強引につれて来られたのだ。江梨子に頼まれたから、と。

両家の両親たちが、爺婆一年生の顔で赤ん坊を見つめている。その部屋の中で浮い

ていると感じているのは愛本人だけじゃないはず。

「あのさ、江梨子」

申し訳なく、声を上げる。これ以上、この場に居続けるのは辛い。早めに引き上げさせてもらいたい。

「私、悪いんだけど用事があるから——」

「そうなの？ ごめんね。この子が目を開けた時、愛が居たほうがいいと思ったんだけど」

「どうして？」

江梨子はみんなが赤ん坊に気を取られていることを確認し、愛に耳打ちする。

「勇の生まれ変わりだから」

恐る恐る愛は赤ん坊を見やる。面影はあまりない。姉弟だから、勇に似ている部分はちよつとくらいあるのかもしれない。まだ、わかりにくいだけで。でも。

「そんなこと——」

「この子を身籠つてから、何度も勇が夢の中に出てきたの。愛に会いたいって」

ぎゅつと心臓を鷲づかみにされる。苦しくて、嬉しくて、悲しくて。会えるものならば会いたい。それは愛も同じ。でも、勇は死んだのだ。

「生まれ変わりなんて、私、信じない」

傷ついた顔をしたのは江梨子だった。その顔を映すように、愛も表情を曇らせ、足

早に立ち去る。泣き暮らしていた日々には別れを告げた。勇のことなんて忘れてしまったはずだった。なのに、涙がこみ上げてきた。

連絡を取らないようにして数年が過ぎた。けれど、年賀状は毎年届く。和輝と命名された赤ん坊は、幸せそうに写真におさまっている。一年、二年、数年で大きくなった。楽しそうに、子供らしい姿でたたずんでいる幼児に勇の面影を見つける。すると、江梨子の言葉を思い出し、彼の中に無理やり、勇を探し出しているようであり、し訳なくなる。

「生まれ変わりなんて、あるわけない」

あるわけないのだ。だから、会わないようにしている必要なんてない。必要なんてないのだけれど、会ってはいけないような気がする。

けれど、時間が流れ、昨日がこの前、過去が昔になり、愛の家の近くへ江梨子一家が引越してきたこともあり、以前と同じ付き合いをするようになった。

「愛ちゃんだ！」

玄関の戸を開けた途端、輝く笑顔で飛びついてきたのは和輝。今年で五歳になるはずだ。人見知りするという江梨子の話だったが、和輝はすぐ愛に懐いた。

スリッパを鳴らしながら奥から現れた江梨子夫婦が、急いで靴を履く。和輝の頭を乱暴に撫で回し、頬をつねりつつ、

「良かったわね、カズ。愛と一緒にならお留守番、できるわよね」

大きくうなづく和輝。

「じゃ、愛。悪いんだけど後、お願いね。晩御飯ただけで、お好み焼き。後、焼くだけだから」

待たせているタクシーへ向かう。入院している義父の様子が思わしくないらしい。このところ急に病院へ呼び出されることが多くなった。いつ家に帰れるかわからない病院に子供を連れて行くわけにもいかないのだろう。愛はその都度、和輝の子守を頼まれていた。

キッチンテーブルにはホットプレートとお好み焼きの種。手を洗い、食器を用意する。

「僕、愛ちゃんのお好み焼き、好き」

「そう？」

「ふっくらしてるもん」

「お世辞がうまいなあ、カズ君は。私、焼いてるだけだよ？」

「僕、大きくなったら愛ちゃんのお嫁さんになるよ」

子供らしい言葉。愛は微笑みながら、お好み焼きを焼き上げる。

「愛ちゃんは食べないの？」

「もう食べてきたからね」

「なに食べたの？」

「ご馳走」

「ごちそう？ オムライス？」

「そうそう、そんな感じ」

愛は笑いながら答える。フルコース料理を食べていたなんて、説明したって理解できないだろうから。

「一人で？」

言葉に詰まる。

「カズ君の知らない人と」

「誰？ 友達？」

「……みたいな人」

母親に似て追求の手が厳しい。子供だからと適当に相手ができない。覚悟を決めて、

「結婚——するかもしれない人と」

ガシヤンと食器がひっくり返る。

「何するの！？」

「愛ちゃんは僕と結婚するんでしょ！？」

感情のまま叫び、泣き始める。愛は和輝を抱きしめて、

「カズ君がもっと大きくなったら、カズ君、私よりもっと大好きで、大切な人ができるよ」

「愛ちゃんの嘘つき!」

突き飛ばされる。食器棚の角で頭を打つが、愛はその痛みよりも和輝を捕まえなければならぬ気持ちで後を追いかける。手を伸ばすが、するりと腕を抜け、和輝は寝室へと駆け込んでいく。

部屋のドアは硬く閉じられている。鍵はかからないはずだから、きつと精一杯もたれかかっているのだろう。無理すれば部屋の中に入れるだろうが、それでは意味がない。ドア越し、静かに語りかける。

「カズ君、ねえ、お話しよ?」

「愛ちゃんの嘘つき」

同じ言葉を繰り返す。何度も何度も繰り返し、やがて疲れてしまったのだろう。

声は静かになる。そっと扉を開けて、部屋の中に入る。微笑みながら、和輝を抱きかかえ、ベットへ運ぶ。布団を掛け、眉間にしわの寄った和輝の額をそつとなでる。

「生まれ変わらなないわ」

そつとつぶやき、安らかな顔になるまで、和輝の頭をなでる。後片付けをしなればと思いつつ、眠気に誘われる。幸せそうな顔で眠る和輝のそばで、愛は眠りについた。

まぶしい光がまぶたを照らす。

「愛ちゃん」

男性の声。懐かしい、勇の声。

「いつちゃん？」

まぶたは重い。もう少し寝かせて欲しくて寝返りを打つ。

「起きて、愛ちゃん」

布団の中で伸びをしつつ、愛は声の方向へ顔を向ける。ゆっくり目を開ける。

「誰？」

「愛ちゃん、俺のこと忘れちゃった？」

声は、勇とよく似ている。顔は——ちよつと違う。似てるけれど。まるで病院のような白い部屋。どこかから消毒液の匂いも漂ってくる。

「あなた、誰？」

「僕だよ、和輝」

和輝なんて名前の知り合い、カズ君しか知らない。戸惑う愛に和輝の後ろに控えていた女性が愛の元へと歩み寄る。

「愛、良かった」

中年の女性。江梨子に似た——いや、江梨子だ。愛はじつと江梨子の顔を見つめる。昨日までと別人のように年を取ってしまったているが、江梨子だ。間違いじゃない。江

梨子を見間違えるはずがない。でも、どうして？

「良かった。目が覚めて」

「私——カズ君を寝かしつけて……？」

「そう。あなたはカズを寝かしつけて、一緒に眠っちゃったの——ちよつと長い時間」
江梨子は年老いても変わらないしやべり方。

「朝になつても目覚めないから心配したら、和輝は自分が突き飛ばしたからだつて大泣きし始めるし、それにしちや、ちよつと妙な眠り方だから——病院で精密検査したら、脳に腫瘍があるつてわかつて。」

摘出手術はとても難しいけれど、そのまま放つとくと余命三ヶ月。手術は五分五分、ただし成功しても後遺症が残るだろうつて。さあどうしましょうつて話になつたときに、愛のご両親がね、あなたを冷凍睡眠装置に入れたのよ。将来的に完全な手術ができるようになるだろうからつて」

「冷凍睡眠？」

愛の父がそんな研究に関係しているのは、育ての親である父方の祖父母に聞いていた。研究熱心な父と、父が全ての母と。物心つく前には別々に暮らしていて、顔を会わせたことも、会話したこともない。だから、両親が娘の存在を覚えていたとは思わなかつた。

「私、一三二歳のまま？」

「そう。もう手術は終わっているわ。完璧に、完全に。私たちはあなたが目を覚ますのを待っていたの」

言葉の出ない愛に、江梨子は口調を変え、

「それにしたって酷いわよ。私は四七歳。和輝なんて二六歳よ」

泣きまねを交え、おどける。愛ははじかれたように、まじまじと江梨子と和輝の顔を見る。ほっとしたような、嬉しそうな顔。

「おじさんもおばさんも残念ながら亡くなったわ。あなたのこと、とても心配してた。ご両親とは連絡とれなくて……ごめんなさいね」

「いいえ、ありがと」

「愛ちゃん、起きられる？」

和輝の表情の中に、五歳児のころの面影を見つけ、愛は微笑む。起き上がろうとするが、力が入らない。和輝に手を借りつつ、上半身を起こす。

成長した和輝の中に勇の面影が浮かんで消える。二十歳で死んでしまった勇が生きていたら、こんな感じだったのかもしれない。胸に刺さる小さな棘。忘れてしまわなければならぬと決意し、忘れていたはずなのに、気持ち揺らぐ。不自然に愛は和輝から視線を外す。

「勇が生きてたら、和輝に似てたかもしれないわね」

愛の心を読んだかのように江梨子と言う。

「勇が死んで、もう二十年近いわ。つい昨日のことのようなのに」

愛の中ではたった六年前の出来事。六年前でも、勇はみんなの中で遠い存在になつてしまつていた。たった六年でも。

「愛ちゃん、覚えてる？」

不意に和輝に話しかけられ、愛は我に返る。

「何？」

「愛ちゃんが倒れた夜の事」

「覚えてるわよ、だって、私にとっては昨日のことだもの」

可笑しくて笑いだす。

「カズ君、私のお嫁さんになるって」

「そ、そんなこと言つた？ 俺、格好良くプロポーズした——」

「いいえ、お好み焼きを目の前に、すごくお腹すかせた表情で言つたのよ。可愛かつたなあ」

「待つた。それ以上思い出さないで」

「何よ」

ふくれつづらをしてみせて、吹き出す。あの子供が、こんなにも大きくなるほど時が流れてしまつた。愛、たった一人を残して。笑い過ぎたからか、涙が出てきた。

「愛ちゃん、俺、大きくなつたよ」

急に真剣な顔をした和輝から視線をそらす。江梨子は看護婦さんへ挨拶して、こちらを気にしている様子はない。

「好きな人、できた？」

愛を大好きだと言っていた子供はもういない。二十数年も前の話。本当に、馬鹿げるくらい遠い昔の話。

「ずっと好きだったよ」

愛は耳を疑う表情で和輝の顔を見る。

「ずっと好きだよ」

不意に涙が頬を伝う。どうして、いつも手紙の最後に書かれていた言葉を彼は知っているのだろうか。

「愛ちゃんは、僕が勇さんの生まれ変わりだと思おう？」

愛はうつむいて、静かに首を振る。

「生まれ変わりなんて信じない」

「そう。僕はどっちでもいい。愛ちゃんが僕の中に勇さんを見ても」

申し訳ない、そう思い続けていた想いをあつさり肯定され、愛は言葉を失う。和輝は笑顔。もの悲しそうな、勇が嘘をついている時と同じ顔。

「愛ちゃんがそれで僕のこと好きになってくれるんなら、それでもいい」

和輝は自分の言葉に傷ついている。愛はどうしようもなく、涙を流すしかない。

「愛、どうしたの？」

看護婦と話し込んでいた江梨子が泣いている愛を目に留め、飛んでくる。

「和輝、あんた愛に何言ったの？」

「別に、たいしたことは……」

言葉を濁す息子に、江梨子は詰め寄る。

「あんた、愛をいじめたんじゃないでしょうね。大丈夫？ 愛」

「うん、大丈夫。ちよつと嬉しくて——」

「????」

「生まれ変わり、あるかもしれないって思ったの」

小さな声だったから、江梨子には聞こえなかったらしい。尋ね返す江梨子に首をふる。

一カ月後——

愛はまだリハビリ中だが、車椅子で出かけることができるようになった。和輝の運転で海へと向かう。やたら嬉しそうな和輝の様子に、微笑みつつ、目的地を指示する。誰も行かない、あの崖——水色の紙飛行機が舞ったあの場所へ。

淡い色合いの空は眠たげ。輝く海原は光を受けて、瞬いている。

「ここ、何かあるの？」

「ここまで車を運転してきた和輝は不審そうな顔で周囲をみやる。何も無い崖の上。転落防止用の無骨な柵があるだけ。」

愛は車椅子を崖の先へと向ける。和輝が手伝いながら、坂を上る。

「私、ここでいつちゃんにお別れしたの」

緩やかな風は愛の言葉をさえぎらなかつた。バックから紙飛行機を取り出し、海へと向けて飛ばす。白い便箋を使って作ったたくさんの紙飛行機。

「自分に嘘つかなきや、生きていけなかつた。いつちゃんのこと、忘れてしまわなきや。だから、ここでお別れしたの」

「忘れたから、別の人と結婚する気になつたの？」

愛からすれば、つい一ヶ月前のこと。和輝からすれば二十年も前のこと。

「ついこの間のことなのに、私、自分が何を考えていたのかわからないわ」

「わからないってことは、あまり好きじゃなかつた？」

和輝の問いに答えず、愛は飛行機を飛ばす。

いつちゃん。私は、あなたを忘れて生きることなんてできなかつた。

手持ちの紙飛行機は全て飛ばしてしまった。何も書いていない白紙の便箋。書こうとして、何枚も紙を無駄にして、結局、何も書けなかつた。

「僕は、勇さんの代わりになれない？」

背後から問いかけられる。

誰も誰かの代わりになんてなれない。勇は勇。和輝は和輝なのに。あまりに真剣な声に、愛は笑いをこらえながら、

「あなた、おばちゃんが好いわけ？」

「愛ちゃんは僕より若いんだよ？」

そうだった。けれど、愛の中では和輝はまだ五歳児のまま。これから先のことなんてわからない。結婚するはずだった彼は別の人と結婚し、今では良いパパらしい。あの日、荒れていた空と海は、今日はとても穏やかだ。

「帰ろうか」

振り向いて声をかけると、和輝は嬉しそうにうなづく。愛はクスリと笑う。ついこの間まで五歳の子供だったのに、今では年上だなんて。

勇のことを忘れることはできないだろうけれど、再び誰か好きになることはできそうない気がする。未来のことなんて誰にもわからないのだから。

グレーは白か、それとも黒か。

↓岩代秋良

五月の教室。四月の教室に満ちていた緊張や不安などはとうに無くなり、ただ生ぬるい怠惰が居座っている。衣替えまでまだ少し日がある。開けられた窓から吹き込む初夏の風がカーテンを舞い上がらせ、パラパラと教科書やノートが音を立てて捲られるが、窓は閉められない。授業中だというのに、のどか過ぎ、眠たくてたまらない。

だるい。秋良は落ちそうになる意識をなんとか保つ。この程度のことでは姿勢を崩してはいけない。秋良は黒板に向けていた視線を保つのを諦め、目の前に座る男子生徒の後頭部へ移す。少し視線を落としただけでも、楽になった。つむってしまいそうな目をしばたかせ、長老と呼ばれている教師を見やる。優等生を演じたいわけじゃ無いけれど、怠惰だとは言われたくない。

頑張つて目を開け、姿勢を正す。苦痛はあと何分続くか、黒板の上にかげられた時計を見やり、そつと息をつく。周囲は皆、頭を下げるか堂々と机に覆いかぶさっている。イビキが聞こえないだけ、まだマシなのだろうか、教師は彼らを起こすことなく朗々と自己の世界に浸りきり、言葉をついでいる。黒板に書かれた文字は、授業最初に書かれた数行だけで、書き加えられることもない。眠たい。

目の前の後ろ頭は動かない。眠っているのかとも思っていたが、どうも熱心に教師の演説を聴いているらしいとわかって、腹立たしくなった。こちらははずいぶん眠気に苦

戦しているというのに。

国語教師のはずだが、授業開始五分後から話題は変わり続ける。秋良を最大限苦しめていたガスだの質量だの話から、気づけばギリシャ神話に話が変わっている。具体的な数字が登場しない分、眠気が和らぐ。雑多な知識量はすごいが、老いた教師の柔らかな声質と独特の抑揚を持つ口調は授業向きではない。

秋良は開放されたとばかりの顔で話に聞き入る。なかなか面白いじゃないかと思いが始めた頃、目の前の頭が舟をこいでいるのを知る。勝った。勝負していたわけじゃないが嬉しくなる。

放課後、まっすぐ図書館へ向かう。学校の中で一番人気の無い場所。いつ行っても、お婆さん司書さんの姿しか見かけない。

雑誌を手に取り、個別ブースに腰を下ろして時間をつぶす。一時間もそうしていれば、帰宅学生の波も無くなり、帰宅しやすい。

数分した頃、人の気配に顔を上げた。図書館に司書さんと自分以外の誰かが訪れるなんて珍しいと思いつつ、見やる。おや、クラスメイトだ。しかも前の席の男子生徒だ。彼は司書さんにメモを見せて尋ね、指示された書棚に移る。抱えるほどの本を持ち、席に付こうとした彼は秋良に気づく。

「……アキラ、さん？」

数度、目を左右に泳がせた後、彼は秋良の名前を呼んだ。しかたないと自分でも

思う。苗字より、名前にインパクトがあるのだから。

「岩代です」

短く名乗り、彼の名前を思い出そうとするが、同じく名前しか思い出せない。彼も同じく、名前にインパクトがあるからだ。彼は微笑んで、

「矢谷。矢谷知海。ここで何しているの、岩城さん」

時間つぶし、とは言いがたい。目の前には大量の本を持った矢谷。自分は雑誌。授業中、一方的に対抗意識を燃やしているからか、ここで時間つぶしなんて答えたら負けてしまう気がする。

「矢谷くんこそ何してるの？」

興味は無いが尋ねる。攻撃は最大の防御なり。

「今日の星雲の話、面白かったから先生にオススメの本を聞いてきたんだ。それ、読んでみようと思つて」

星雲の話。あの一睡眠たった時間の話題だ。あれを面白い、なんていう人間がいるとは思わなかった。

「ずいぶん本があるのね」

分厚いの、薄いの、写真が多そうなもの、文字ばかりのものいろいろある。

「何を読んだらいいのかわからないから、一番簡単そうなのから借りようかと思つて」

実に楽しそう。やっぱり負けてる気がする。一番上の一冊を手に取り、パラパラめくる。数字とカタカナがたくさん書かれてる。

「岩城さん、天文に興味あるの？」

「ないわ」

好みが白黒はつきりしているのが秋良の性格だ。でも、二冊目に手を伸ばす。写真入りで、雑誌風。文章は少なめ。三冊目。イラストと文章。星座に関する物語。読みやすそう。

「これ、借りるわ」

矢谷は戸惑い気味にうなづく。雑誌を戻し、司書さんの手を借りず、貸し出し手続きをやってしまう。通いなれているからか、信用されているからか、ただ単に面倒くさいだけなのか。司書さんは手元の本から目もあげない。

扉を閉める前、振り返ると矢谷が熱心に本を読んでいた。面白いらしい。あんなに眠たくて退屈な話のどこが面白かったのだろうか？ 再来週は中間テストもあるというのに、これ、読んでいて大丈夫なのだろうか。手元の本に目をやり、矢谷を見、カバンにしまいこむ。とにかく、負けてはいられない。

↓矢谷知海

中間テストが終わり、人心地つく。中間の結果によっては安堵してもらえないが、期末テストが直前に迫らなければたいして不安になることも無い。学校生活に穏かな時間が再び流れ出す。

テスト答案が返され、一喜一憂するクラスメイト達など眼中に無い様子で、ホームルーム終了後、秋良は席を立つ。追いかけるように矢谷も席を立ち、図書館へ向かう。

前を歩く秋良の背中。追いつき、追い抜かそうと足を速めるが、途中、友人に話しかけられ足を止める。いつもそれで秋良に遅れをとる。そわそわしながらも、テスト結果を確認しあう。借りたい天文関係の本がまた、秋良に先に借りられてしまう。嫌がらせなのか何なのか。天文は好きじゃないといいながら、図書館出しカードには秋良の名前が並んでいく。それを追うように自分の名前。最初は偶然だと思っていたが、司書さんの言葉で気が付いた。

「岩代さんもあなたも、天文好きなのね」

「僕はそうですけど、岩代さんは特に天文が好きってわけじゃないと……」

矢谷は岩代が読書家なのだろうと思っていた。人気の無い図書館を利用している知り合いの読んでいる本が気になっていただけだと。

「でも、岩代さんが出してる購入希望の本って天文関係の本ばかりよ」

図書カード置き場の近くに置かれた購入希望用紙とその回収箱。手作りの回収

箱から用紙を取り出しつつ、紙を広げる。同じ書体で書かれた天文関係のタイトルばかり数冊分。自分が読みたいと思っていた本も数冊含まれている。

「図書購入希望用紙なんて購入するのも遅いし、希望に答えられないことも多いんだから、岩城さん、天文好きなんだと思っていたわ。彼女、本なんてあまり借りないから」

司書さんは読んでいた本に目を戻す。

「岩城さん、読書好きじゃないんですか？」

「そんな風には見えなけれど」

本の虫がそう言うのなら、そうなのかもしれない。

テスト終了に浮かれている友人と別れ、ようよう図書館にたどりつく。秋良はすでに定位置で読書中で、矢谷の借りたい本は返却コーナーに並べられている。彼女が読んでいる本は、やっぱり天文の本だった。

「天文部、入らない？」

思い切つて声をかける。秋良はそこで初めて気づいたような顔で矢谷を見、不思議そうに首をかしげ、

「天文部なんてあった？」

四月の部活動紹介で名前はあがっていなかった。

「部活というか、サークルというか。僕が作ったんだ。部員は今のところ僕だけなんだ

けど」

「そう。でも残念。私、部活動するつもりないの」

本に目を落とす。話はそこで終わり、というポーズ。

「今度の金曜の屋上でやつてるから」

言うだけ言つて、本を借り、矢谷は帰途に着く。きっと秋良は来ないだろう。世の中、天文好きなんてそうそういないものだとここ数日の部員勧誘活動で思い知らされたところだ。

↓岩代秋良

制服が可愛い。それをこの高校の志望動機にする女子生徒は多い。冬は黒地のセーラー服に白のリボン。夏は白地に黒のリボン。デザイナーではなく、十数年前の校長のデザインということだが、洒落ている。

けれど、秋良がこの高校に決めたのは制服ではなく、近さからだった。徒歩三秒。校門を出てすぐ目と鼻の先にある古い木造家屋がそうだった。同じ小学校出身者には知れ渡っている事実だけれど、わざわざ、それを知る人間を増やす必要は無い。部活動も行わないのも、あまり友人を作らないのも、人目を避けて登下校するのもそのためだ、と秋良はそれを言い訳にしていた。本当は、ただ、人付き合いが面倒臭

いだけだったのだけれど。

四月の終わり。図書館は家の反対方向に面していて、日当たりが良い。眠ってしまったような陽気だからといって、いい年して学校で眠るわけにもいかない。眠気を覚まそうと雑誌をめくり、景色を見て、たまに来る貸し出しの仕事を司書さんの代わりにやる。貸し出しの仕方は利用案内と書かれたプリントに書いてあるのだけれど、誰も読まないらしく、司書さんが切りの良いところまで読み終わるまで待たされる。本の虫の司書さんは、いつでも本を読んでいる姿しか見かけない。いつ、司書としての仕事をいつしているのか疑問だけれど、きつと見ていないときに仕事をしているのだろうと考える。あんなに読んでいるのだから、いつか読む本がなくなってしまう。なのに、そんなことにはならないらしい。図書館にある本だけでも結構あるのに、世界中に本つて、どれだけあるんだろう。

独りでいる時間が秋良は好きで、結構楽しかったりするのだけれど、誰にも理解してもらえない。だから、この図書館はかっこうの隠れ蓑だ。

宿題を取り出し、片付けてしまう。高校生にもなったのだから、予習もやったほうがいいのだろうけれど、入学して一ヶ月。まだまだ不安がるほど授業も進んでいない。先日から勝手にやりはじめた本棚の整理を再開する。番号順になれれば良い、と最初は思っていたのに、やってみると、一つの棚に上手いこと並びきらない。歯が抜けたように、本の背に書かれた番号が飛ぶところもある。貸し出されたままなのか、

なくなってしまったのかは不明。変なタイトルの本があればパラパラめくってみたりするので、なかなか作業ははかどらない。いまのところ、一つも気持ちよく本が並んだ棚はない。

「生物に理科、天文に化学か」

大きさも高さも厚さもばらばらで、高校の図書館なのに、小学生向けと書かれた本もある。最初からこれじゃ、番号順に並べたって綺麗に並んだりしないだろう。パラパラめくれば、どれも写真がいっぱい載っている。こんなもの、誰が借りるんだろう。気づけば、国語教師の長老がやってきていた。司書さんの茶飲み友達らしく、時々やってきて会話を交わす。二人並んで本を読んでいることもよくある。二人とも、本を大量に読んでいるからか、広く深く、会話はいつも突拍子ないのに尽きることも無い。

良い加減の時間になったので、下校する。

↓矢谷知海

翌週の金曜日。天文部としては夜空を見上げたいところだが、部活として確立しておらず、顧問もいないので夜まで活動することが出来ない。屋上で月を見上げながら本を読む以外、活動のしようが無い。ゆくゆくは天体望遠鏡で空を見上げたい

が、まだまだその段階にも無い。

屋上で本屋で買ってきた天文雑誌を広げる。太陽光がまぶしく、紙面がちらついて読みにくい。雑誌は屋内で読んだほうがいいかもしれない。

「それが天文部の活動？」

声に顔を上げると秋良の姿。

「屋上じゃなくても出来るんじゃない？」

風にあおられながら歩いてくる。セミロングの髪が風に煽られ、乱れている。風が強
いからか、いつもより屋上の人影は少ない。

「来てくれたんだ、ありがとう。いつかは天体望遠鏡で星を見る予定だよ」

「それって部活じゃなくて、個人的に購入したほうが早くない？」

それを言っちゃおしまいだ。部活に昇格させるのも難しい現在、部費も無いから何を
買うにも個人負担。矢谷の趣味ではない。

澄み渡った青い空。白い雲。白い月。丘の上に立つ高校だから、見通しも良い。

「これじゃプラネタリウムにでも通ったほうが早そうね」

「まあ、活動しはじめたばかりだから」

「部員は最低五人だったわよね。集まったの？」

首を振る。

「僕と岩代さんで二人」

「私は入部するとは言っていない」

その言葉に矢谷は驚く。

「天文部に興味があるから、ここに来てくれたんじゃないの？」

まじまじと秋良の顔をみやる。目を合わせ、目をそらし、秋良はつぶやく。

「天文のどこが面白いわけ？」

「どこがって」

矢谷は言葉に詰まり、

「岩代さんこそ、天文のどこに興味があるわけ？」

好きじゃないと言う割りに、名前の書かれた貸し出しカードは多い。

「矢谷君って授業中、寝てばかりの癖に成績いいのね」

不意に話が変わる。

「私、すぐ後ろの席でしょ？ 返却された答案の点数、偶然見ちゃったの」

悪びれもせず、秋良は言葉が続ける。

「唯一の趣味は天文みただけど、いつ、借りた本を読んだの？ テスト中も借りてたでしょ？」

それを言うなら秋良も同じはずだ。毎日、名前の書かれた貸し出しカードは増えていた。それを見て、頑張つて読んでいたというのに。

「借りた本、全部読めるわけ無いでしょ。あんな短時間で」

確かに、後を追いかけて本を読んでいくのは大変だった。

「じゃあ、何で」

興味も無い本を、読みもしないのに借りまくっていたのだろう。

秋良は答えようと口を開きかけ、難しそうな顔をして首をかしげる。

「来週もここ？」

「ああ」

秋良は次の週も屋上にやってきた。

天使が私を撃ってくる

彼と出会った瞬間を私は忘れることが出来ない。

私が事務仕事に精を出していると、少々ガタのきた——いえ、とても年季の入った癖のある扉を開け、彼は部屋に入ってきた。この時点で、新人か、来客かのどちらかしかない。どちらだろうと手元から顔を上げる。

彼は軽く頭を下げ、きよろきよろと部屋を見渡す。まだスーツは着慣れていない感じ。真白な、糊の匂いが漂ってきそうなワイシャツに、真新しいネクタイがやたらと鮮やか。

来客ではなく、あれが噂の新人君か、と思い、手元の書類を再び見やる。年下に興味はないし、途中で数字から目を離すと間違えてしまいそうで。

しばらく数字を追って、再び顔を上げたのは、違和感を覚えたからだ。場違いな、妙なものを見てしまった、そんな感覚。

顔を上げた私は、彼の頭上に浮かぶ、よく肥えた赤ん坊と目が合った。金色の環っかに、白い羽根、くるくる巻き毛とくれば、天使なのだろうか。重力も感じさせず、宙にぶかりと浮かんでいる。

まじまじと見やる。目の錯覚ではない。細かい部分までハッキリ認識できる。風船だろうか。職場に風船を持ち込むなど言語道断。それに、そうであれば誰かが注意するはず。けれど、誰も騒いでいない。もしかして私にしか見えていないのだろうか？ そんなはずは——私の視線に気付いたのか、当の天使が風船ではないと証明するかの

ように、ふわりと微笑んだ。幼児の笑顔は釣られてしまうものがある。職場だというのに、私は微笑み返し——

「痛っ」

私は胸を押さえる。あの天使、微笑み返した私にどこから取り出したか、大ぶりの銃を向け、私の心臓を正確に射抜いた。西部劇の伝説のガンマンもかくや、というスピードで。

「つつつ……」

椅子から滑り落ちながら、でも、なんだか違和感。撃たれたにしては、なんか違う。体が熱くなり、顔からは火が出そうだけれど……。

机についた手を胸の手に重ね、手を替える。離れた手には血がついていない。おかしい、と、天使を見やる。目が合ったのは新人の彼。

「大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫」

私は答えて座りなおす。天使は悪魔のような笑みで、硝煙ののぼる拳銃を再び構えなおす。私は避けようと床へ崩れこむ。

「高村さん」

同僚が悲鳴に似た声をあげる。

「ちよつと、具合悪いの？」

首と手を振り、大丈夫だとジエスチャーするが通じない。

「築瀬、悪いけど後で」

彼を呼び出したであろう、同僚の落合が駆け寄ってくる。大事にしないで欲しい。撃たれた心臓から、血液が全身に行き渡るとともに、違和感が体中に広がっていく。確実に、容赦なく。逃げ場の無い私は、戸惑いながら、その感覚に侵食されていく。ただただ、体中から、今まで私という存在を形作ってきた精神が、悲鳴と戸惑いの声をあげる。どうして、なぜ、と。今までの人生全てが書き換えられる、そんな感覚。何と表現すればいいのか。

「……………」

ああ私だったら、頭おかしい。何を訳のわからないことを言っているんだろう。風船たるまみたくないな天使なんている訳無いし、まして、天使に銃で撃たれたなんて変だ。血も流れていないし、痛みなんてちっぽけなもの。私、そうとう疲れてるのだろうか。起き上がった私はそこに天使の影が無いことを確認する。見慣れた同僚の顔しかない。新人君もいない。やはり、おかしいのは私のようにだ。

私が必死に何でもないと、という説明にもなっていない説明が通ったのかどうなのか、少々早引けすることその出来事は上手く収まった。数日、心配げな同僚の声に答える必要はあったものの、あれは夢だったのだと自分の中で結論づけた。

天使が健康優良児みたいな体格してるってのもちよっと変だし、何より、拳銃なん

て不釣合いだ。天使つてのは、ラッパとか花びらを持つているものだろうから。

あれは夢だったという、私の完璧論理的結論はすぐに打ち砕かれた。

新人の築瀬が部屋に顔を覗かせるたび、天使は嬉々とした、悪魔のような笑みで容赦なく私を撃つし、落合は私に何の恨みがあるのか隣の事務所に配属されてるハズの築瀬を度々こちらの事務所に呼び出してくれるし。

私は現実を受け入れることを余儀なくされた。天使は築瀬とワンセット。これさえ理解すれば、回避行動は取りやすい。天使や宗教関連の本を読み漁り、あの天使の理解に努める。無論、銃を持った天使などの記述は無い。では、あの風船だるまは何なのか。

考えた末に出た結論は一つだったが、私はそれを否定する。受け入れられない。ありえない。天使も時代の流れにのって、弓から銃に持ちかえたにしても、あんまりだ。毎回撃つことはないじゃないか。

私が築瀬に気付かなければ、天使はこちらを攻撃してこない。言い換えれば、いくら遠くても、私が築瀬に気付けば、築瀬がこちらに気付いてなくても天使は攻撃してくる。

おかげで私は築瀬恐怖症になりつつある。築瀬の姿が視界に入らなければ、もしくは視界に入ったところで、それを築瀬だと認識しなければ私は天使に撃たれることも無く平穩に日常を過ごせるのだから。

数週間して。今年は親睦会と銘打たれた飲み会があった。率先するものが居ないからか、こんな席、あつても年に二度くらい。慰労会、新人歓迎会、お花見……いろいろな会を兼ねてやるのは、良いことなのか、悪いことなのか。

会場はいつもと同じ、会社近くのスナック。このママさんが部長の同級生だとかで、いつも貸切っている。私は毎回同じ、カウンターの薄暗い端っこに座って、一人飲んでいたら。ウイスキーのダブルロック、二杯目。可愛くない私は、お酒に飲まれたりしない。ザルという看板は目立つところにあげてるし。

後ろのボックス席は賑やかだ。部長が十八番を歌い終わると、みんな好き勝手に歌を入力していく。カラオケなんて、何が楽しいのかわからない。

人の良い落合が時々私に誘いを掛けに来るけれど、私はその中に入っていく気は無い。後ろを振り向かなくとも、天使の銃口が正確に私に向けられているのを感じる。最近では慣れてきたとはいえ、やはり撃たれるのは痛い。痛いのは嫌だ。

それに、そもそも築瀬が参加できないと言っていたから、私は参加する気になったのに、どうしてここにいるのだろう。カラオケは築瀬が来て無くても、当初から参加する気はないけれど。

「高村、やっぱり築瀬のこと苦手なの？」

天使に受けた傷跡が疼いた。築瀬、って単語聞くだけでも心臓に悪い。

当の落合はビール片手に、ほろ酔い加減。普段は遠まわし過ぎるほど遠まわしな

言葉で相手を混乱させる癖に、酔うと的を得たツツコミを言い始める。時にはキツイ一言だったりするけれど、私にはこの落合の方が話しやすく好きだ。

普段から周囲の人間を見極めているのか、落合は人間関係には鋭い。お酒の席じゃないとわからないことだけれど、そのくらい数字に気を使ってくれば、仕事できる人なのに。

「別に」

私は天使の攻撃を思い出し、げんなりする。築瀬から話題を変えたい。天使が今にも目の前に現れ、あの不敵な笑みで撃ってきそそうで怖い。

「アイツ、結構いい子だよ。物覚えいいし、よく働くし」

だから最近、部屋に出入りが少なくなってきたのか。よい兆候だと私は胸を撫で下ろす。一抹の寂しさなんて気のせいだ。

「最初にあんなことがあったから、築瀬も高村のこと気にしてさ」

だろうね、と相槌を打つように、私の手の中で、グラスの氷が音を立てる。

築瀬の天使と攻防するってことは、それだけ私が築瀬を目にしているということ。

築瀬がどんな人間か、少なくとも悪いやつじゃないくらいよくわかってる。

「けど、落合。築瀬君は部署違うでしょ。なんで、ちよくちよくアンタの元を訪れてる訳？」

「大学の後輩、親友の弟、近所の幼馴染。言うなれば、実の弟もしくは息子みたいな

ものでね」

「可愛くて仕方ない、と?」

「心配なのよ」

片手のビールをグビリと咽に流し込む。落合はお酒に弱い。ビール一口でほろ酔い加減になれる人間だ。大丈夫だろうか。

「大丈夫よ」

私の杞憂を察したか、落合が座った目で言う。

「築瀬が『高村さんに避けられてる気がする』って言うからさ、高村、築瀬のどこが嫌いなわけ?」

話が飛んだよ、この酔っ払い。

「築瀬、付き合ってみれば可愛いヤツよ。見た目は今時の若者っぽいけど、意外と普通よ。まじめ。どちらかといえばお堅い。築瀬の何が気に入らないの、新人嫌い?」

「嫌ってないでしょうが」

私はグラスに口をつける。今日の落合の絡み相手は私なのだ。天使と攻防するのとどちらがマシだろう。どちらも嫌なことに変わりない。

お酒を飲んだら誰かに絡むのは落合の悪い癖だ。いつも取り合ってくれていた吉田さんは寿退社しちゃったし。周囲を見渡せば、皆楽しそうにしている。目があった人間は苦笑しつつ、目をそらす。誰も助けてくれないらしい。

「嫌つてないよ」

「好きじゃないんでしょ？」

同じ問いを繰り返すとは面倒なヤツだ。酔っ払いは、好きにさせるのが一番だ。

「普通」

「嫌いじゃない」

「そうそう、落合の言う通り」

何度目かの押し問答でようやく私の答えに納得いったのか、にんまりと、チエシヤ猫のごとき嫌らしい笑みを浮かべ、落合は席を離れた。やっと開放されたと、グラスに氷とウイスキーを注ぐ。セルフサービスの店じゃないけど、勝手知ったるなんとやら。飲み会ではいつも勝手にやらせてもらっている。

二次会の流れには合流せず、帰途につく。ウイスキーのダブルロック、五杯。最近じゃかなり飲んだ方だが、足元も記憶もしっかりしている。バス乗り場のベンチに腰掛け、同じ方向の落合とタクシーを待つ。落合は半分寝てる。ビール、コップ一杯でここまで酔えるつてある意味尊敬する。

「強いですね」

ふいに声を掛けられ、飛び上がりそうになった。築瀬、後ろから不意打ちは卑怯だ。天使も嬉々としているところを見れば、数発続けざまに背後から打ち込まれたようだ。恐ろしい。

「二次会は？」

「だいぶ、飲まされたんで。一緒のタクシーでもいいですか？」

一人あたりの料金が少なくなるのは歓迎だけど……天使が笑ってるのが怖い。いい加減、弾を撃ち尽くしたりしないだろうか。

「落合先輩の近所なんです。昔から良く知ってます」

私が考え込んでいたからだろう。築瀬が言い分けするように言葉を連ねる。

「聞いている。構わないよ」

自分の心臓をもっといたわったほうが良いのだろうけれど、ここで断るのは不自然だ。携帯を取り出し、メールチェック。ダイレクトメールばかりだけれど、築瀬と会話するほど私の気力も無いし、何をしゃべったらいいかもわからない。

築瀬も同じように携帯を触っている。光に映し出された横顔がなんともいえない。若い若いとは言っても、築瀬は子供ではないから、高校生などとは明らかに違う顔つき。童顔でもない。普通の、年相応の顔。天使は柔らかな笑みを浮かべ、ダダダッと早撃ちしてくれているが、今更もう、不意打ちでもなきや、顔色変えたりしない。

ゲームでもしているのだろう、移り変わる画面の色が顔に反射している。色とりどりに変わる様子を飽きもせず魅入ってしまう。私、おかしい。

タクシーが来るまで、私達は一言も言葉を交わすことなく、私はただ、いつもどおり築瀬を観察し、天使に撃たれていた。まさか、このとき、落合が起きているとは思

わなかつた。

月曜日は良い天気だった。週末に続いた雨で、大気の汚れが一掃されたのだろう。空が青い。

「高村、築瀬に教えてやって」

出社一番、掛けられた台詞に私は慌てた。

「待つてよ、落合。何で私が？」

「築瀬、研修中なんだから、アンタでも教えられることは教えてやって。私も仕事溜まってるし」

何それ。何で私が。そもそも築瀬の教育係は誰よ、と隣の部屋に赴いて新井だったのかとため息ついた。何で、何でも他人に丸投げの新井が今年の新人担当についているのか。うちの会社、不思議なことに事務所が壁で二つに区切られてる。仕事内容は一緒だから、こちらがそちらの事務所の新人教育しても問題は無いわけだけど……。ああでも、困ったとき身近に見知った顔がいたら、まずはそこを頼るのが自然か。それにしても落合の仕事、私がずいぶんカバーしてたから、溜まってないと思う。なのに落合は聞く耳持たずで仕事を始めたものだから、私は数字を間違ってくれないように祈るしかない。

「すいません、落合さんいますか？」

築瀬が現れる。

ポーカーフェイス、ポーカーフェイス。私は呪文を心の中で繰り返す。

「築瀬、今日から高村に教えてもらいなさいね」

にっこり。誰も逆らえない笑顔。たまに落合はこういう顔をする。

「お願いします、高村さん」

小さい頃から慣れているのか、築瀬は疑問も抱かず私に挨拶。笑顔が眩しいなあ、築瀬くん。背広が板につけてきたのは良いことだ。でも、ネクタイはこの間と同じ柄。ローテーション少ない。ワイシャツは綺麗にアイロンされてて、感じがいい。でも、クリーニング屋さんのタグ、取り忘れてる。

「高村さん、高村さん」

何度か繰り返し返して私の名前を呼ぶ様も可愛らしいって、指導中に何、ぼやつとしてんだ私。らしくない。

「ここはこれで良かったですか？」

「そうそう。この数字をここにに入れて、こっちはこれね」

「はい」

実に熱心。築瀬はこちらが投げたボールをきちんと打ち返してくれるので、教えるのが楽しい。受け答えも元気があって実によろしい。

「良いヤツでしょ？」

落合に言われれば、

「そうね」

と、返せるようになったけれど。

「貸し一つ」

「何でよ」

答える私に落合は意味深に笑う。本当にわけがわからない。落合の後輩である築瀬に、落合に言われて教えてるのに、何で私に貸しができるんだか。

まあ、でも、落合のそんな発言も気にならないくらい、築瀬は良い子だ。こんなに良い部分だけで出来た人間が存在するものだろうかと思って思うほど。

天使は度々現れて、やはり私の心臓をめがけ銃を放つ。正確無比なその腕前はたいしたもの。けれど、同じ痛みには慣れるもの。あらかじめ撃たれることがわかっていれば、笑顔でだつて耐えられる。だつてポーカーフェイスはお手の物。私は単純に出来てやしない。

天使の攻撃を受けつつも、私は冷静沈着に築瀬と接し、間近でよくよく観察しているが、残念ながら今のところ、築瀬の欠点は見つからない。

銀河物語

セレスティンの宝石

むかし昔。この物語はガニメデの女王様がマフェルの宝玉を分割されるよりもずっと昔のこと——。

ちょうど銀河系とは真向かいに位置するリーラズル系のモリア系第五惑星セレスティンは暖かいピンク色の惑星でした。空はピンクローズ、海はエメラルドグリーン、島々はミルキーホワイト。花々は金や銀で出来、宝石の実をならす植物が生えたとっても美しい惑星で、一人の女王様が治めていらつしやいました。

そうそう、この女王様はこの物語でとても重要なお方です。お名前は、ミシエル・エスラ・デ・セレスティン。ちよつと長いお名前なので、ミシエルとお呼びしますね。ハチミツ色のふわりとした髪に、真紅のバラと同じ色の大きな瞳。ひよろつと背の高いけれど、美しい十三歳の少女でした。その日、新たに女王の椅子につこうとされていました。

その惑星の夜が明け、空がうつすらピンク色に染まりかけた頃、ミシエルのそばに夜中控えていたばあやがそつと名を呼びました。

「セレスティン様」

薄いベールが幾重にも重ねられた天蓋ベットに横になっていたミシエルは薄つすらまぶたを開け、小さくため息をつきました。誰にも聞き取れないような小さな小さなものでしたが、ばあやはそれを聞き取り、ミシエルの暗雲を払いのけるような楽しいげな声色で、

「おはようございます、セレスティン様。今日も美しい朝でございますよ」

天蓋から下がっているカーテンを開けました。

「まだ私はセレスティンと呼ばれる立場では無い」

ミシエルは起き上がるのを手伝ってもらいながら、ばあやに言い聞かせます。この惑星では女王はセレスティンと呼ばれます。ミシエルは今日の昼には女王の椅子につくことになっていましたが、儀式はまだ行われていません。

「良いではありませんか」

ばあやはとても誇らしげな顔で答えます。

「現セレスティン様は十歳にもならないうちに女王におなりあそばされたのですよっ」

「陛下は才気ある立派なお方」

「けれど、」

ばあやは声押し殺し、眉をひそめます。

「今回はあまりに早すぎます」

ばあやが危惧するのも無理はありません。現セレスティン女王は十歳で女王になり、十七歳で女王の座を退かれます。女王の寿命は非常に短く、二十歳で露と消えるお方も珍しくありません。けれど、それでも現セレスティン陛下は女王の座を退くのが早すぎます。

「ばあや」

とがめるようにミシエルは声をあげます。

「また新たななる一日が始まったのじゃ」

「申し訳ありません、お嬢様」

ばあやはようやくいつも通りの呼び名でミシエルを呼び、衣装係を部屋に招きいれる為、ベットから離れました。

招き入れられた衣装係の従者達は手慣れた様子でミシエルを飾り立てていきます。ミシエルは瞳と同じ色のドレスを身にまとい、髪はルビーの実をつけた小枝を飾り、複雑に結い上げられました。

「お嬢様、ばあやは嬉しゅうございます。本当にお美しゅうござ成長あそばされました」

感慨深げにつぶやくばあやにミシエルは困ったような笑みを浮かべ、

「世辞は結構」

「ばあやの本心でございます」

「そうか。陛下にお目にかかるのは久々じゃ」

「たいそしてお忙しい方であられますから」

「……そうじゃな」

ミシエルは興味なさそうに呟きました。その惑星の誰もが即位した女王に謁見す

ることがほとんど無く、誰も女王が何をしているのか知らなかったからです。

セレスティン星は起伏がほとんど無い惑星でしたので、世界で一番高い場所といっても丘ほどの高さでしたが、そこには色とりどりの水晶で出来た花が咲き乱れ、紫水晶でできた美しい東屋がありました。

ミシエルは東屋の前で立ち止まり、朗々と声を響かせます。

「ミシエル・エスラ・デ・セレスティン、ただいま参じました」

東屋、と言つてもこの惑星の女王の城。東屋と表現するのもはばかわれるほど大きく、壁もあり、中で一人座している女王の顔を拝見することは誰にも出来ません。

ミシエルはくるりと反転し、周囲を取り巻いている人々の顔を見回しました。期待と歓喜に満ちた顔ばかりです。

「世話になった」

そばに控えていたばあやにミシエルは目をやることなく、小さな声で別れの言葉をかけました。

「次代のセレスティンを頼む」

「心得ております」

ばあやも顔をあげもせず、小さな声でうなづきます。

東屋に足を踏み入れたミシエルは軽いめまいに足を止めかけたものの、キツと前を

睨みつけ、女王の座まで確実な足取りで歩きます。

周囲の人々からは紫色をした霧の中に彼女が足を踏み入れたようにしか見えません。やがて、彼女の気配さえうかがえなくなつた時、ふいに一陣の風が吹き、宝石をつけた植物達が揺れてシヤラシヤラと涼やかな音をあたりに響かせました。

ばあやは不安そうに東屋を見やりましたが、穏やかに首を振ると次代のセレスティンが眠る城へと引き上げてゆきました。

「止まれ！」

男の声に、ミシエルは顔をしかめました。

「何者！？」

「うるせえっ！」

座した女王の背後から、女王の頭にレーザー銃を突きつけた男が姿をあらわしました。天井の紫水晶を通し、漏れる光は弱く、男の顔ははつきりとしません。

「誰？」

「俺はザイル。売り出し中の宇宙海賊つてやつだ」

二十歳過ぎと思われる若い男は白いドクロマークの縫い取られた服に黒いマントと、いかにもな格好です。

「宇宙海賊？」

ミシエルは眉をひそめます。

この惑星に立ち入るには中央政府からの発行されることなど無いに近い許可証が必要でなし、惑星上空には幾重にも中央政府の護衛艦が取り巻いているはずだ。

「どうやってこの惑星に？」

「説明してやる義理はねえ」

男は吐き捨てます。ミシエルは息をつき、歩を進めます。

「生まれ、撃つぞ」

「どうぞ」勝手に」

「脅しじゃねえ」

ミシエルはすたすた歩き、玉座の前までやってきました。そこで、ようやく男は事態の異常さに気づきました。

「お前……女王？」

「ええ」

「——こいつは」

玉座に座しているのは目の前の少女と同じ顔をした娘です。服装は違いますが、髪の色も、瞳も、何もかもが同じです。女王は彼が入ってきたときと同じまま、彼の存在を気にした様子も無く、あくびをかみ殺し、目を開けていようと必死そうな顔をしています。

「それも私」

ミシエルは言い放ち女王の眼前に立ちます。

「クローンか？」

「違うわ。もうすぐ消える——」

ミシエルは数を数えます。

「三、二、一……さて」

玉座の少女は姿を消し、ミシエルは男には何の注意も払わず、当たり前のように玉座に座りました。

「あなた、私以外に姿を見られてる？」

ミシエルは女王らしからぬ口調で話し掛けました。ザイルは拍子抜けした様子で、
「俺はそんなヘマはしねえ」

「そう、それなら見つからないうちにこの惑星から出た方が賢明よ。抜けられないくならないうちに」

「何、訳わかんねえことを」

レーザー銃を構えなおし、ミシエルの頭を狙います。ミシエルは構わず言葉を続けます。

「それにしても、どうやってこの惑星にもぐりこんだの？ 上空にはリーラズル系中央政府から派遣された軍が黒々取り巻いてたでしょうに」

「俺の問いが先だ。お前はクローンか？」

「違う。私は一人しかいないわ」

「じゃ、さっきのは？」

「あれも私」

「嘘をつくな」

ザイルはレーザー銃をミシエルのこめかみにあてがいました。

「嘘じゃないわ。セレスティンの女王って言われているのは私だけ」

少女らしからぬ重いため息をつきつつ、ミシエルはそっとレーザー銃のねらいをはずします。レーザー銃を向けられたままのおしゃべりなんて、気味のいいものじゃありませんからね。

「私を撃つても良いけど、割にあわないわよ」

「俺は海賊だ。お前の指図は受けない」

「永遠とも思える繰り返しの中で、ずっと同じ役をやりつづけるのは疲れるわよ？」

「おしゃべりはもういい。この星で一番でかい宝石だって言うセレスティンを出せ」

「……なんか、勘違いしてない？」

ミシエルはゆつくり首を振りました。

「セレスティンって私のことよ？」

「お前が宝石？」

「ちよつと頭使ったら？ こゝは宝石ばかりの惑星よ？ 宝石じゃないものこそがこの

惑星では宝石なのよ」

ザイルはその言葉の意味を理解できず、尋ね返しました。ミシエルは疲れきった顔で言い直します。

「つまり、この惑星で唯一の生身の生命体である私こそがこの惑星では宝石なの」

セレスティンは宝石の星。いたるところ、小石や砂粒のように宝石が溢れていれば、その星の住人はそれを宝石だと珍重することなどありません。

「他に人間がいただろうか？」

「あれは人形。アンドロイドのようなものよ。それより私の問いに答えて。あんた、どうやってこの星へ降り立ったの？」

ミシエルがなんら抵抗する様子も無いので男はレーザー銃をホルスターにしまい、しぶしぶと言った様子だけれど、顔は自慢げに、

「超能力——」

「ああ、テレポーテーション？」

「そうだ。良く知ってるな」

ザイルは驚きました。セレスティンはどここの星とも交易の無い惑星でしたから。ミシエルはさびしそうに微笑んで、

「私はもともとこの星の人間じゃないのよ。今ってリーラズル統一暦で何年なの？」

「知らない」

「知らない？」

「さつきから言ってるリーラズル中央政府つても何のことなのかわからねえ」

「……そうくるか」

女王は疲れきった顔でため息をつきました。

「また惑星の時間が狂ってるのね。あんたが無事、この惑星から抜け出られるようならば一応覚えておいて。私が生まれたのはリーラズル暦二八二年」

「ちよつと待て。時間が狂うつてどういうことだ？」

「この惑星、宇宙とは時間の流れが違うのよ。言ってみれば神々の箱庭。誰かの紡ぐ夢物語。ま、何とでも表現できるけど……時間の流れがあつてないようなものなの」
女王は歌うような調子で言葉をつむぎます。

「小さい頃からの夢だったわ、幼い頃、おばあちやまに聞いたセレスティンに降り立つのが。私はね、ブルーニ系の第三惑星ステラの第五コロニー生まれなの」

「ちよつと待った。俺はブルーニ系の第四惑星ソニアのコロニー生まれだが、ステラにはコロニーなんて無い」

「そう！ じゃ、あんたにとって私は未来の人間ね。それより、あまり長居はしないほうがいいわよ」

「手ぶらで帰れるか！」

「じゃ、これあげる」

ミシエルは髪にさしていた枝やドレスに飾られていた宝石をザイルに渡しました。

「早く出てったほうがいいわ」

駆け出しのザイルにとつて手に余るほどの宝石でしたし、元来、ザイルは欲張りではありませんでしたから、ミシエルに言われるままセレスティンを去りました。

その宝石の一つが、あの有名なマフェルの宝玉なのです。それは人の手を渡り、やがてガニメデの女王陛下の所有物となり、そこから先はあなたでも知っているお話でしょうから、私の話はこれでお終い。

私がなぜあなたにこんな話をしたか、わかりました？ そう、その髪がミシエルにとっても似ているからです。二百年前にはこの宝石惑星の噂でリーラズル系中持ちきりだったのですが、今は忘れ去られたおとぎ話の一つに過ぎません。

でもね、今度、ブルーニ系の第三惑星ステラにコロニーを建設する話があるそうですよ。それに、リーラズル中央政府が偏狭のモリア系に軍事基地を作ったそうですし……このお話は本当におとぎばなしだったんでしょうか？ リーラズル暦一九七七年の現在ではまだ、うかがい知ることは出来ませんがね。

銀河物語2

ガニメデの女王

リーラズル銀河が統一されたのはリーラズル暦元年と言われていますが、その後百年くらいはまだ銀河中がごたごたしていたので本当のことは誰にもわかりません。なぜなら、相変わらずサーリオン星域戦争、三百年戦争と言われている第五次戦争は続いていましたし、現中央政府の重鎮であるガニメデの女王様はご誕生されていない時分でしたからね。

今『ガニメデの女王様』と私達がお呼びしている彼女の本当の名前を知っている人間はずいぶん少なくなりました。彼女ほどリーラズル中央政府が信頼し、けれど手を焼いている厄介な人物は後にも先にもこの宇宙に存在しないでしょう。

彼女の本来の名はアーリイ・マ・デュボン・ラエ・ガニメデとおっしゃいます。即位された時に名を捨てられました。私の話が終わるまで、今しばらくはアーリイと呼ばせて下さい。

ガニメデ系第四惑星ヴェクエルは今では知らぬものなどいない大惑星ですが、ほんの五百年前まではのどかな未開惑星の一つでしかありませんでした。ヴェクエル星人と呼ばれているのは元ゼクス星人達で、彼らの本星はすでに失われています。ナシオ彗星の為だったとも、サーリオン星域戦争の為だったとも言われていますが本星が失われた理由ははっきりしません。

ガニメデに移り住んだゼクス星人達が惑星改造と社会構築を短期間でやり遂げることができたのは女王様の存在があったためでしょう。ヴェクエル星人達の女王様へ

の信望ぶりは他に類を見ないほど激しいものですからね。神に等しい存在として女王をあがめながらも、誰よりも近い存在として女王を見ているのです。

ヴェクエル星人たちの特徴はその緑色の髪と黄色い瞳ですが、アーリイは闇よりも深く濃いストレートの黒髪に瞳は夜空の星空よりも明るく、輝くような金色をしていました。今の銀色に褪せてしまった髪に、皺だらけの優しい顔。飛空椅子に腰掛けたい小柄な彼女からは想像もつかないでしょうが、若い頃の彼女は、女王とも女王ともいふ印象はまるでない、大柄で現実的な女の子でした。

アーリイが女王になったのは十五歳の頃。ガニメデの女王の選出方法が少々変わっていることは知られていますが、それがアーリイがリーラズル銀河でも名を知られたマフェルの宝玉を割った理由でもあるのですよ。

ある時、ガニメデの女王様は玉座の前に娘達を一同に集めました。色とりどりのドレスをまとった十七人の女王様達の様子といったらまるで春の花園のようです。

いつもであればかしましい小鳥のようにおしやべりに暇が無いのですが、さすがに玉座の前。どの女王様も一言もしゃべらず、硬い表情で並んでいらつしやいました。

深紅のドレスを身にまとった女王は黒く華奢な印象の椅子に深々と腰を掛け、静かに、ゆつくり一人一人の娘達の顔をご覧になりました。それぞれ性格の違いが顔に表れていますが、どの娘も立派に成長し、不安はありません。女王はにこりと微笑むと、厳かに尋ねました。

「さあ、この中で次の女王になるものは？」

ガニメデの女王は当時六十歳で、二百歳程の寿命を持つヴェクエル星人達の中では若い方でした。娘達はお互いに顔を見合わせ、アーリーの姉、長女イシユタルが驚いて母に尋ねました。

「突然どうなされたのですか？ お母様はまだお若いのに」

母であるガニメデの女王は静かに笑って、

「リーラズル中央政府ができた事は存じているでしょう？ 政府の方針なのです。すべてを一新すると」

「けれど、女王陛下はまだお若いのです」「いいえ、」

女王は静かに首を振り、従者にさまざまな色や形をした大粒の宝石ばかりをいくつも持つて来させました。

黒い布の上で見事にカットされた赤や緑、黄色、紫、青、色とりどりの宝石が、夜空に浮かぶ星よりも尚見事な輝きを放っています。

「ギレンの涙にシルファの雫」

「ウタイの花、カリートの海、セルの瞳」

「それに、マフェルの宝玉！」

口々に王女様方は囁き、うっとり見つめます。

「これを差し上げましょう」

女王様はにこりと微笑みながらおつしやいました。宝石は先代女王から受け継いだものもあり、女王が即位された折に献上されたものもありました。

「まあ」

王女方は感嘆します。ですが、ここではたと気がつきませんでした。

「けれど、私にはどの宝石をくださるのですか？」

女王様はニコニコと微笑んでいるばかり。それ以上の言葉を紡がれようとはされません。困ってしまった王女達は一番年長であるイシユタルを見ました。

心優しいイシユタルは困った顔をして、宝石の数を数えました。ですが、いくら数えても宝石は十六個しかありません。

「もう一つあれば、一つづつ分けることができるのに」

次女のリュシカは、好戦的な性格です。

「女王となる者がすべての宝石を手に入ればよいでしょう」

その発言に年下の王女が反対します。女王陛下の手前でもあり、静かに品良く話し合われていた王女達でしたが、やがて言い合いになり、罵り合いになりました。それも仕方の無いことです。どの宝石もすばらしく、この中からたった一つだけ選ぶなんてことは誰にもできないことなのですから。

女王はその様子を興味深げに眺めているだけで、何もおつしやいません。

お姉さま方がケンカを始めた頃、一人離れて立っていた末娘のアーリイは女王様の前に一歩進みでて頭を下げました。

「では、私が女王になりましょう」

「アーリイ、良く申し出ました」

女王は深くうなづきました。他の王女が啞然となさっている中で、アーリイは玉座につきました。お姉様方は悔しがり、悲しがり、不思議がりながら元女王である母に理由を尋ねました。

「簡単なことですよ。玉座と宝石。どちらが良いのか私は問うただけ」

「では、私たちは女王の位よりも目の前の宝石に目がくらんでしまったということなのですね」

イシュタルは寂しげに呟き、マフェルの宝玉を手にとると一番末の妹——玉座に座ったガニメデの女王へ掲げました。

「女王への忠誠と親愛とを捧げます」

アーリイはにっこり笑って受け取りました。リュシカは乱暴にカリートの海を取り上げ、靴音も大きく部屋を出て行きました。イシュタルのあとに続いた王女もありましたし、リュシカ同様、宝石を手にとって城を後にした王女もありました。

アーリイが即位して五十年。あの頃の彼女にはまだたいした功績がありませんでした。ですが、十二人の王子と十五人の王女に恵まれ、育児のためにガニメデ系第三

惑星ツヴァイのコロニーで日々を送っていました。

その間、ヴェクエルの政治を任されていたのは宰相のマージン。この方はアーリーの姉であるイシユタルの夫でした。

女王の長男であるハーディアは外交方面の地位についており、リーラズル中央政府とは親しくされておりました。そのため、急進的なハーディアと保守的なマージンとは対立していました。

ヴェクエルはその頃、不在がちな女王への不満をもった人々による新女王選出派と、その動きに眉をひそめる女王擁護派に別れ水面下で対立していました。けれど牧歌的なツヴァイのコロニーで暮らすアーリーはそのことを知らず、ある日、定例議会のためにヴェクエルの城に戻った時、初めてそれを知ることになりました。

定例議会は年に何度も行われますが、アーリーは数十年、ツヴァイのコロニーから立体画像通話で出席するだけでした。子供達にも手がかからなくなってきた頃、アーリーは久々に議会へと赴きました。

深緑色のドレスをまとったアーリーは黒い華奢な椅子に腰を下ろし、臣下を見渡しました。映像で見えていたよりも皆が老いているのがうかがえました。新しい、若い臣下もずいぶん増えています。

頭を下げていた臣下達は、改めて見る瘦せた女王に退位が近いのではないだろうかと不安になりました。長旅の疲れもあり、その時のアーリーにはあまりに覇気がな

かったのです。

静かにざわめく場内に辟易し、議会をはじめるように声をあげようとしたアリーでしたが、一步前に進み出たハーディアがおもむろに声を上げました。

「女王陛下に一言、お願いがございます」

女王が声を上げないうちに議会が始まったのもそのときが初めてでしたし、このような場で臣下の進言があつたのはじめてのことでした。

「僭越ながら、陛下は大変お疲れのご様子。ここは新たな女王を選出していただき、陛下にはゆつくりご静養なさいますようお願いします」

突然のハーディアの言葉に、アリーは言葉を失いました。女王の手前、控えている臣下たちですが、明らかに二分して座していることにも、アリーは初めて気づきました。

色を失っていた金色の瞳は徐々に怒りと興奮でギラギラとまばゆく輝きだしましたが、口調は優しいまま、

「では、マフェルの宝玉をここに」

従者——女王の声にのみ反応するアンドロイドに声をかけました。

従者達は宝石箱より赤い石を取り出し、そっと黒い布地の上に置きました。女王然として鎮座した紅い宝玉。その宝玉の美しさ、きらめきは言葉にできないほど——

その時、議会にいたすべての人々は、いまだにあれよりも美しい宝石は知らないと言をそろえて言います。

「ハーディア、マージン。これを差し上げましょう」

「陛下、おたわむれを——」

マージンは困った声をあげました。新女王は王女の中から選ぶべきものです。それに、女王は独自の方法で次の女王を選ぶのが好きたりで、前女王の女王選出法を真似るなどどうかしています。

「陛下、私は女王選出をお願いしているのです」

ハーディアも困り果てた声でアーリイに懇願しました。自分が言い出したことではありませんが、女王は女性でなくてはなりません。自分や、まして、女王の子でないマージンが王座につくことなどあつてはならないのです。

「では、」

アーリイは従者に宝玉を割るように命じました。

「陛下！」

驚いたのはその場にいたすべての臣下たち。普段は女王の言葉に反論しないものたちまでもが、悲鳴に似た声を上げます。ですが、従者は躊躇なくそれを割りました。場内には悲鳴とも、落胆とも取れない嘆きの声が溢れます。

女王は鋭い瞳で臣下達を見回し、静かな声で問いました。

「皆はたかが宝石の割れたことがそれほど惜しいのですか？ 私は、ヴェクエルが粉々になるよりはましだと思いますよ」

女王の言葉に人々ははっと気づきました。女王の下、団結することで発展してきたヴェクエルがいつの間にか分裂しかけていたことに。それを流れと、当然と受け入れたい心に。

「申し訳ありません」

マージンは深々と頭を下げ、自分の力不足を痛感しました。女王がいなくとも、この惑星は自分の力で統治できていると思いがついていたことに気づいたからです。権力を持ち、権力を一任されたことで彼は自身も気づかぬほど舞い上がっていたのです。

「……………陛下……………」

ハーディアも深々と頭を下げましたが、謝罪の言葉は口にすることはありませんでした。新しい女王を選出し、マージンを追放しなければヴェクエルの為にならないと危機感を募らせていましたが、思っていたほど女王が衰えていないことを知り、喜びを隠せなかつた為でしょう。

「ですが、私も政治から離れ過ぎていました。これからはしっかりと責務を果たしましょう。今回のことについてですが——ヴェクエルのことを思つてのこととはいえ、処分をせねば示しがつきません」

おののく人々を見渡し、アーリイはにっこり微笑むと、

「私に忠誠を誓いなさい。誓えぬものはガニメデを去りなさい」

女王の言葉に人々は一も二もなくひざまずき、深深と頭をたれました。もちろん、いがみ合っていた二人もです。純粹なヴェクエル星人が女王への忠誠を誓わないはずがありませんからね。

アーリイはその出来事以来、精力的に女王として活動するようになりました。

リーラズル中央政府の力が強まってきたのもその頃からです。ヴェクエル星人たちはかつて同じ星の人間同士で対立していたことなど無かつたかのように団結し、心から女王に仕えた為、それ以降のガニメデは一段と発展しました。

サーリオン星域の三百年戦争を終結させ、ベガの女王の駆け落ちに手を貸し……おっと、口が滑りました。ここ百年のうちに起こった大きな出来事の表に影にガニメデの女王様の名を聞かなかつたことはほとんどありません。

彼女は、偉大な女王なのです。

銀河物語3

ベガの王女とグノーシス

お嬢さん、こちらの席は空いていますか？——ああ、確かに空席は多いのですが、道中は短いようで長いですからね。ちよつとした話し相手が欲しいのです。

ありがたい。あなたはどちらに？——私？私は流浪の身ですから。冗談ですよ、冗談。そんな寂しそうな顔をしないで下さい。美人が台無しですよ。私はね、ただあてもなく旅をしているのが好きなのです。それで、あなたはどちらに？

イズルデ星系？確か、第三惑星のゼーレは一時期保養地として名を馳せたところですが……けれど、どうしてまたあんな辺鄙な場所に？

ほお。では、お仕事ですか。それはご苦労様です。そういえば、あなたの目的地に関係するお話を一つ知っていますよ。それは——おやおや、見かけよりずっと遠慮深いお人なのです。けれど、私の話はそう長い物ではありませんから大丈夫。次の目的地につくまでには私の物語も終わります。

どこの王家にも一つくらい奇妙な因習があるものですが、中でもベガの王家はずいぶん変わった習慣があります。王の子供達、次代の王族方は生まれてすぐ捨てられるのです。

ここに一つお断りしておかなければならないのは、ベガの王家の子供達は養子に出されるのではなく、言葉通り捨てられてしまうのです。惑星内、コロニー内、宇宙空間、ありとあらゆる場所に。

ベガは常に戦乱の渦中にあり、王族の日常は陰謀と策略の中になりましたから、

王族に生まれた者は、生まれた時から運の強さを試されるのです。どこに捨てられ、誰に拾われ、どんな場所で、どのような幼少期を過ごし、十三歳までにどれほどの素養、教養を身につけることができるか——より良い環境を掴み取ることができるのは強運の持ち主でなければなりませんからね。

十三歳になれば彼らは自分がベガ王家の者だと知り、ベガ王家の者として生きることになります。まったく、宇宙広しといえどこれほど波乱にとんだ人生を送る王族は他に聞いたことがありません。

これからお話するのはベガの王女ゼルダと若者グノースの恋の物語——。

あの頃はちょうど三百年戦争——サリオン星域でのガニメデの女王を中心としたリラズル政府軍とチエスト——ベガ王家との争いが混沌としていた頃です。

そのサリオン星域で名の知れた富豪といえ、そのほとんどが兵器の売買で成り上がった家ばかりです。ゴビエル家もそんな富豪の一つ。巨大な宇宙戦艦を拠点とし、星域狭しと飛び回っていました。

ある時、サリオン星域の外れを航行していたゴビエル家の宇宙船は、全周波数に對し大音量で放送されている緊急カプセルのSOSと、赤ちゃんの泣き声に気づきました。

最初は宙賊——山に出るのが山賊、海だと海賊、宇宙だと宙賊というのです——の罨であろうと高をくくっていました。赤子の鳴き声をいつまでも無視し続けるこ

となどでできません。

決心して相手の電波に返信する通信を入れてみましたが、帰ってくるのは赤ん坊の泣き声だけ。無理をすれば五人くらい乗れるタイプのカプセルだというのに。

「赤ん坊しか乗っていないのでしょうか？」

「そんな馬鹿な」

ゴビエル家の誰もが戸惑いました。戦争真つ只中のこの星域では、捨て子は珍しくありません。けれど、宇宙空間に捨てられることは聞いたことがありません。

どこかで遭難した船に乗っていた赤ん坊だったとしても、緊急避難用カプセルに赤ん坊だけ乗せたのでは意味がありません。赤ん坊にはボタン一つ押す、なんて単純な操作さえ出来ないのですから。

綿密に調査が行われました。カプセルに見せかけた宙賊の宇宙船ではないか。カプセル内に隠れた宙賊が隠れているのではないか。徹底的に調べられましたが、カプセルは偽装している様子も、武装している様子も無く、生体反応も一つしかありませんでした。

カプセル発見から数時間経過し、泣き声は弱くなってきました。もし、本物の赤ん坊であれば衰弱しはじめているのでしょうか。

「本当に赤ん坊しか乗っていないのであれば、私達が今、拾ってやらねば死んでしまいますわ」

見かねた奥方の強力な申し出もあり、カプセルはようやくゴビエル家の宇宙船内に回収されました。

用心して武装した者達を取り囲む中、開けられたカプセルの中には赤ん坊が一人きり。淡いピンク色の髪に赤い瞳の、小さな顔をした可愛らしい赤ちゃんです。

カプセル内には身元が分かりそうなものは何もなく、きつと戦火を免れるために慌てて赤ん坊を乗せ、手違いで大人が乗り込む前に打ち出してしまったのだろうと結論付けられました。

その子はゼルダと名づけられ、子供のいない奥方に引き取られ、奥方の娘として育てられることになりました。

因果な商売のゴビエル家でしたが、ゼルダは大切に、幸福に育てられました。ゴビエル家の宇宙戦艦はとも大きなものですが、彼女は出入りできる領域が決められていましたし、外は宇宙であり戦場なので、自由には限りのあるものでしたけれど。

図書室は幼いゼルダが自由に出入りできる場所の一つでした。そこには紙で出来た本が壁一面に置いてありました。富豪は蔵書を持っているのもステータスの一つですから、ゴビエル家代々の当主達は高価で希少な紙の本を収集していたのです。

辞書や辞典、偉人伝や伝記、そんなものが多く、七歳のゼルダには面白い場所ではありませんでしたが、出入りできる場所が限られている為、自然そこも足を向けてしまいます。

その日もゼルダは本の背表紙を眺め、重たくなさそうな本を広げ、挿絵を見て本棚に戻す作業を繰り返した後、退屈のあまり眠ってしまいました。

「風邪をひいてしまいますよ、お嬢様」

誰かに肩を揺すられ、ゼルダは目を覚ましました。目の前には肩まで無造作に伸ばした濃い緑色の髪、灰色の瞳をした少年が立っていました。ゼルダは同い年くらいの子供を見たことがほとんど無かったのでとても驚きました。

「あなたは誰？」

「私はグノーススと申します。父がこの船で働いております」

「ここで何をしているの？」

「それは……」

グノーススは言葉を選ぶようにゆっくり、

「本物の本があるなんて信じられないくらい贅沢なことですし、そろえられている本もどれも良いものばかり。さすがはゴビエル家だと思えます。ですから、ぜひそれを拝見したいと——」

「忍び込んだのね！」

笑みを顔に貼り付けたゼルダにグノーススは頼み込むようにウィンクし、

「お嬢様、人聞きの悪いことを言わないでください」

「そうね、あなたはここに迷い込んだってことにしてあげる。でも、ここって私にはつま

らないものばかりにしか思えないけれど、あなたには面白いの？」

「それはもう」

「そうだよ」

ゼルダはグノーシスにつこり笑いかけ、片手を差し出しました。

「あなた、私とお友達になつてくださる？ もし、お友達になつてくださったら、この本をあなたがいつでも読めるよう、お母様にお願ひしてみるわ」

「それは願つてもないことです」

グノーシスは彼女の手をとり、硬く握手をしました。

奥方はゼルダに頼み込まれたものの、そんな子供が艦内にいることなど知りませんでした。

ゴビエル家の船は表向きはただの商用船でしたが、扱っているものは兵器でしたし、艦内で兵器の研究開発なども行っていました。そのため狙われることも多く、船員以外は乗船しないよう決められていたのです。

長期航行用の宇宙船であれば船員は家族連れ乗り込むのが普通ですが、ゴビエル家の戦艦はその特殊性から短期航行用の船同様、必要最低限の人員しか乗船していませんでした。

ゼルダに連れられたグノーシスを見て、奥方は納得顔で、

「あなたはターミル博士の息子ですね？」

「そうです」

グノーシスは豪華な一室に落ち着かない様子ながらもはつきりと答えました。ターミル博士は二ヶ月ほど前、ゴビエル家の兵器開発チームの一人として新たに迎えた人物でした。

奥方は口調を一段と優しくして、

「博士は助手を乗船させるとおっしゃられていましたが、助手というのがあなたのことだったのでですね？」

「そうだと思います。父に助手がいたとは初耳ですが」

奥方は思案顔で彼の顔をまじまじと見やり、ゼルダと見比べ、

「あなた、歳はおいくつ？」

「今年で八歳になるはずです」

自分のことなのに、グノーシスはあやふやに答えました。問いなおそうとした奥方でしたが、ため息をつき、

「ターミル博士ですものね」

博士は研究に関してはずば抜けた頭脳を持つものの、それ以外に関してまったく何も出来ない人物でした。研究チームの古株である温厚なメント博士と激しい言い争いしたのは乗船して数日後でしたし、その後もあちらこちらでいざこざを起し、一ヶ月もしないうちにターミル博士の名は艦内に知れ渡っていました。

「グノーシス、あなたは博士の研究を手伝っているの？」

幼い子供が手伝えることなど無いだろうと思いつつ、奥方は尋ねました。

「いいえ」

「そう、だとしたら困ったわね。この船に私達以外の家族は乗れないのです」

「お母様！」

とがめるようなゼルダの声に、奥方は笑顔を向けて、

「だから、ゼルダのお友達として仲良くしてやって下さい」

グノーシスに視線を戻し、にっこり微笑みました。

「それがあなたのお仕事——いかががかしら？」

「ありがとうございます、奥様」

「ゼルダ、あなたこれからマシエル先生とお勉強の時間でしょう？ グノーシスも一緒にみていただけるよう先生にお願いします」

「ありがとうございます、お母様」

抱きつこうとしたゼルダを制し、奥方はグノーシスの両手を取って、

「お礼を言わなければならないのは私のほうなのよ、グノーシス。ゼルダはね、とっても勉強が嫌いな。だから、しっかり見張っていてね」

グノーシスがゼルダと出会ったのも、勉強時間でありました。彼女はたびたび雲隠れしていたのです。

「お母様！」

顔を真っ赤にして咎める娘の声に、

「あなたもお友達がいたほうが勉強に身が入るわよね？」

奥方は楽しそうにウインクしました。

彼がゼルダに仕えるようになって六年の歳月が過ぎました。姉弟のように仲の良い二人のことは、艦内の皆知るところでした。

ゼルダが十三歳になった頃、黒尽くめの男が彼女を訪ねてきました。当主と奥方は困惑しましたが、彼をゼルダとグノーシスがいる場所に通しました。二人はチェスをしている最中でした。

彼は椅子に座ったゼルダに近寄ると優雅に礼をし、ひざまづき、

「お健やかにご成長あそばされました。ご様子で何よりでございます、ゼルダ王女」

「王女？」

ゼルダは戸惑いの声をあげ、グノーシスを見ました。グノーシスは博士の息子であるためか、マシエル先生が持て余すほど頭が良く、博識です。ですが、今回はグノーシスも驚いた顔でゼルダを見返しました。

「ゼルダ様。あなた様は我がベガの王女殿下であらせられます」

家族の誰とも自分が似ていないことに気づいていたゼルダでしたが、あまりのことに声を失ってしまいました。ベガ、と言えばリーラズル政府相手に戦争をしている軍事

国家です。

「王のお申し付けでお迎えに参りました」

「どうして？ なぜ今ごろ？」

「代々、我がベガでは王子・王女様方を手元で育てることはしておりません。十三歳になるまでは」

皆、ゼルダを送り出すことに乗り気ではありませんでしたが、送り出さなければベガ王家に反旗を翻すようなもの。それはあまりに無謀です。

ゼルダは泣く泣く男に連れられてベガの本星ダーウィルへ向かいました。徹底的な王女教育の毎日に根をあげそうになりながらも彼女が耐えることができたのは、ゴビエル家の人々の教育の賜物に加え、グノーシスを通し、どんな環境であろうと学ぶことの大切さに気づいていたからでしょう。

ゼルダがダーウィルへやってきて八年が過ぎました。ゼルダは二十一歳になり、美しい娘へと成長していました。

たまに顔を合わせるだけの戦好きの王と戦略家の母、兄弟・姉妹達。ゼルダは逃げ帰りたい気持ちでいっぱいでしたが、それがかなわないこともわかっていました。

懐かしく思い出すのは、ゴビエル家の戦艦。そしてグノーシスのことばかり。彼のことを思い出すひと時だけ、彼女の心は安らぐのです。彼女はその意味を深く知ろうとはせず、ただ懐かしい光景を思い浮かべては、王女としての毎日に耐えていました。

ある日のことです。王妃に呼び出されたゼルダは御前へ参上しました。王妃は挨拶もそこそこ、

「ゼルダ、二週間後フェニルルへお行きなさい。この縁談はこの度の戦の切り札になりえる重要なものです」

「縁談？ 切り札？」

突然の話に戸惑うゼルダに王妃は畳み掛けるように言葉を続けます。

「あなたも聞いたことがあるでしょう？ フェニルルは数年前から軍事関係を手広く取り扱うようになった商社です。成り上がりとも言えますが、それは些細なこと」

言葉を切り、王妃は顔色のさえない娘を不思議そうに見やりました。

「どうしたのです？ ゼルダ」

「母上、私は何のために連れ戻されたのです？」

「決まっているでしょう。全ては戦の為、どんなことがあるかと、どんな手を使おうと

勝たねばなりません」

忙しそうに王妃は戸口へ向かいます。

「どうして？」

「あなたはベガの王家に生まれたのです。それが宿命だと心得なさい。当初の目的を見失おうとも、立ち向かってくるものを叩きつぶす。何としても勝つ、それが我が王家のあるべき道なのです」

捨てゼリフのような王妃の言葉に、一人残されたゼルダは呆然と母の消えた戸口を見つめていました。

さて、一方のグノーシスはというと――。

ゼルダが船を去って数ヶ月後、ゴビエル家の宇宙戦艦はリーラズル中央政府軍に捕らえられました。戦力的には弱いリーラズル中央政府の寄せ集め軍隊は、まず兵器などを売りさばっている商人達を抑え込み、戦力の低下を図ろうとしたのです。

捕らえられた商人達はリーラズル政府寄りの裁判とも呼べないようなものにかけて、様々な罪状によつて財産を没収されます。ゴビエル夫婦は全財産を失つた後、リーラズル政府の保護の名の元どこか辺境の星へと送られ、ターミル博士ら兵器開発チームはガニメデ系第三惑星ツヴァイのコロニーへと移されました。リーラズル中央政府のために研究するよう迫られたのです。

ターミル博士は研究さえ出来ればよい人間でしたので、何の不服もなく研究へ没頭しました。そのため協力的であるとみなされ、息子のグノーシスは同じゴビエル家の研究者たちに比べて良い待遇で過ごすことが出来ました。妬みややかみからの嫌がらせはありませんが、グノーシスは将来有望な学者になる道が拓けていました。

*

ガニメデの女王は精力的に領地を視察されることで有名です。ですが、領地の広さからヴェクエルにあるガニメデ第十五研究所に訪れるのは十数年ぶりのことでした。黒い豪華な飛行椅子に腰掛けたお姿は、白髪に温和な笑顔、小柄な体躯に茜色のドレス姿ながらも、従者であるアンドロイド一体を従え、とても威厳があります。

王家直属の研究者と言えば、それだけでも優秀な研究者ですが、女王はただお一人。全ての研究者ににねぎらいの言葉を掛けることなどできません。そこで近年、大きな功績のあった研究者数名が代表として女王に拝謁しました。

「我がガニメデの為、強いてはリーズラル銀河の為、我はそなた達が研究に精進するよう望むぞ」

女王は朗らかに言いました。サーリオン星域戦争もあと一押しというところでしたし、その日、女王はとても機嫌が良かったのです。

「そうじゃ。そなたらに褒美を取らせよう、何なりと申せ」
その言葉を待っていたかのように、

「お願いがございます」

若い研究員が声をあげました。周囲の咎めるような視線をものともせず、若者は必死の形相をしています。

「申せ」

泰然と微笑みながら若い彼の言葉に耳を傾けました。豪華な椅子に備え付けら

れたコンピュータは彼のデータを空中に、女王にだけ見える角度で映し出します。

彼に目を向けたまま女王はそのデータをすばやく読み取り、

「グノーシス、か。そなた、ずいぶん面白い身の上よな」

「ゼルダに会わせてください」

「ゼルダ？ 我が娘の中にそのような名前の者はおらぬはずだが」

考え込むように女王は言いました。データにある彼の略歴にその名は刻み込まれていました。

「ゼルダは——ベガの王女です」

女王のご前でしたが、その言葉に周囲がざわめきました。ベガといえば敵国です。

「ゼルダが嫁ぐという噂は真でございませうか？」

若者の声に、女王は興味深そうに尋ねました。

「そなた、どこでそのような事を耳にした？」

「古い友人には宇宙を股にかける商人もあります。陛下ならば事の真偽をご存知であられませう」

「なるほど」

女王は愉快そうに目を細めました。

「そなた、よほど我を買いかぶつておるのだろう。我とて、この宇宙に知らぬことは山とある」

「では、根拠のない噂だと?」

グノーシスは必死な顔をしていました。

「……もし我がそれについて知っていたとしても、それをお前に教える必要があるか? 重要機密にあたりそのような事実を」

「私は、ゼルダと兄妹のように育ちました。ですから——」

何かに耐えるようにグノーシスはぎゅつとこぶしを握り締め、うつむきました。

データは彼の言葉を裏付けています。女王は心弾ませながら、

「続きを申せ」

「私は——一目でいい。もう一度会いたいです」

女王へ向けられた目は彼の想いを雄弁に語っていましたが、それでも、彼はその想いを言葉にしませんでした。女王はのけぞるように椅子にかけ直し、にやけそうな口元を隠すため扇を取り出し、

「ふん。幼馴染に会いたいなどと言う理由で、そなた、我に敵国の王女をさらえと?」

「私は会いたいです!」

きつと女王を真っ向に見つめ、グノーシスは言いました。女王は諭すように、

「そなた、現在の情勢をわかつておらぬようだな。ベガはリーラズル政府、言い換えれば我がガニメデの敵ぞ? その国の王女にただ一目会いたいなどという浅薄な理由

で会えるものではない。どうじゃ？ そなたの申すことは不可能であろう？ 別の望みを——」

「会わせて下さい！」

周囲は水を打ったように静まり返りました。女王の言葉を遮るなど、極刑ものの出来事です。女王は寛大なお方でしたが、激しい気性も持ち合わせておりましたから、皆、それを恐れたのです。

「——ほう」

女王が発した声はとても恐ろしいものでした。笑うように細められた目は鋭く輝き、誰もが震え上がるほどです。

「データだけで……データが私の全てを語っているとは限りません」

搾り出すような声色でしたが、静まり返った場にその言葉は響きました。グノーシスの学者らしくない言葉に、ガニメデの女王は扇の向こうでやりと笑い、

「そなたの人生に私の知らぬ何がある？」

「私はゼルダに会いたいです。一目だけでもいい」

「では、ゼルダ王女に会って、そなた、何をいたす？」

打って変わって女王は優しい口調になったので、グノーシスは不意をつかれた顔をしました。

「何も。ただ、会いたいです」

「ゼルダ王女のことを想っている？」

グノーシスは戸惑うように目を泳がせていましたが、やがて顔を上げ、女王を真つ向から見つめて肯定しました。彼の瞳は決意に満ちていました。

その時周囲にいた人々のストレスを推し量るすべはありません。長期入院した者もいたと言う話ですから、相当のものだったのでしょう。

女王はその言葉を吟味するように目を細め、グノーシスをまじまじと見やりました。瞳の炎は鋭くなり、猛獣でさえその瞳の前に姿を隠してしまいそうなほどです。沈黙はその場にいた人たちからすれば永遠に思えるほど長く続きましたが、実際は三分もかかっています。けれどガニメデの女王がこれほど考え込まれるのは大変珍しいことです。

「面白い」

女王は一体のアンドロイドに何事か耳打ちしました。パタリと扇を閉じ、ニヤリと微笑むと、グノーシスに言い渡しました。

「そなたがゼルダ王女に会えるよう手配してやろう。だがな、この研究所を出た時点で、研究者としては二度と日の目を拝めぬと思え」

グノーシスは重い肩の荷を下ろしたように、柔らかな微笑を浮かべ、一礼すると先ほど女王に耳打ちされていたアンドロイドと共に研究所を後にしました。

その後のことはあなたも良くご存知でしょう。

リーラズル暦百五十二年。婚礼の為、偽装商船に乗ってフェンリル家に向かったゼルダ王女は何者かの手によつて船もろとも連れ去られ、今もつて行方は知れません。将来を有望視されていた若き学者グノーシスもまた、時を同じくして行方知れずです。

その後、ベガは切り札になるはずだったフェンリルと仲違いし、リーラズル政府との力の拮抗が崩れ、三百年戦争と言われたサーリオン星域第五次戦争はあつという間に収束へ向かったのです。

どうしたんです、お嬢さん。私の物語は面白くありませんでしたか？——違うう？ ああ、そうですね。宙賊グノーシスと婚礼前にさらわれた悲劇の王女……チエスト側、特にベガ周辺ではそう語られているようですね。

グノーシスは今どこにいるかつて？ それは私の知るところではありません。ゼーレにいる世界と隔絶した暮らしをする名も知れぬ若い学者とその妻がそうじゃないかつて？ そうかもしれないませんが、もうその二人はゼーレにいないでしょう。

怒らないで下さい。あなたは勘違いされています。二人の行き先を知っているとすれば私ではなく、宇宙でただ一人、ガニメデの女王様くらいのも。それより、あなたのような若いお嬢さんがいつまでも滅びた王家に忠誠を誓っているのは感心しません。ゼルダを連れ戻して王家を再建するだなんて馬鹿げたことです。

おやおや、あなたはよっぽど馬に蹴られたらしい。どこかの惑星の歌にあつたで

しよう、他人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んじまえて——おや、タイミング良く次のステーションターミナルコロニーに到着するようですね。

別に話をそらしたりなんてしていませんよ。あのステーションターミナルコロニーが建造された時はまさかこんな風に一般の人間が使用できる時代が来るだなんて誰も思っていませんでした。あれは元々——おっと連絡船に乗り遅れそうだ。話の途中で悪いのですが、ここで失礼を。

銀河物語4

アーヌングの語り手

『次は N178249-04-198 ステーション。アーヌング惑星、中央ステーションです。燃料補給と貨物の上げ下ろしの為、数時間停泊いたしますが、降りることはできません』
この先には数個の、鉱物採集のための惑星しかない。観光地もないから、貨物と客を同じシャトルに乗せる。客のほうがおマケ。事実、広くは無い乗客室、私その他には数えられる程度。休暇明けの労働者か、本社からの視察社員だろう。退屈そうに時間をつぶしている。

手荷物片手に立ち上がり、通路を進む。トイレを通り過ぎ、自動販売機——数百通りのメニュー登録された飲料と食事の合成調理販売機——の横を通り抜け、外へと続くエレベータへ乗り込む。黒いロングコートを羽織り終えたところで、デジタル音声が響く。

『このターミナルは、降りる事が出来ません』

嫌味のない女性の声が繰り返す、レトロな合成音声に微笑む。数度繰り返したところで、この星の概要を説明する声が変わる。要約すれば、目ぼしいものは何も無い、ただの岩の塊。酸素も資源も鉱物も、もちろん原住民もいない星。

「知ってるよ」

私はそれを懐かしく思いながら聞き終え、ドアをすり抜ける。こんなことが出来る有機生命体は、宇宙広しといえど、私以外に聞いたことが無い。

そこは巨大なドーム倉庫。複数の路線の中継地点。昼間のように明るいライトが

闇を消そうとしているが、貨物コンテナの陰は暗い。

酸素は満たされていないようで、作業員達はそれぞれ宇宙服を着込み、ヘルメットを被っている。酸素を必要としない種族でも、宇宙空間で活動できるものは少ない。私は闇にまぎれるよう、コートの手立て、空中を歩くように進む。

ようやく、片側の岩壁へ到達する。昔よりずいぶん、この倉庫も大きくなった。

「帰りました」

ポカリと口をあけるように、岩肌が丸く闇色に染まる。ただ、夜のように暗い場所なので、その色の違いを気づくものはいない。

「お帰り」

遠くから、脳内に直接言葉が伝わる。音声ではないけれど、柔らかな声だと認識する。

「ただいま」

私は同じように答え、闇に消える。同時に、私に似た人影が闇から浮上し、シャトルに乗り込み旅立っていく。

長い長い闇色のトンネルを歩く。てくてく、自分の歩調で。遠くに白い光が見える。そこを指して歩き続ける。

トンネルを抜けると、白く輝く靄に満たされた空間に出る。

「ただいま」

「君の思考は理解できない」

霧は濃度を変え、中に浮かぶ、小さな星のような光がため息を吐くように点滅する。誰にも知られていない、この惑星唯一の生命体。彼女——もしくは彼。誰よりも年老いた、知的探求者。私にとつて絶対の存在。仕えるべき主人であり、親というより創造神。ずっと昔、有機生命体だったというけれど、それが真実であるのか、知る人は無い

「なかなか良いものですよ。宇宙船の旅行も」

「そうじゃない。どうしてトンネルを歩いて来た？」

そちらか。

「たまには良いでしょう。楽しいものですよ、歩くのも」

「おかげで数年、退屈だった」

すねるように言い、楽しそうに点滅する。トンネルは長いが、彼女の力を用いれば、一歩にも満たない距離。彼女の力をほんのわずかながら持つ私にとつても同じこと。

「あなたに時間感覚なんて無いでしょう」

「失礼な。私にだって時間感覚がありますよ」

笑うような、大きな濃度変化の渦ができる。そうは言うけれど、彼女にとつては百年も一日も大差ない。この宇宙で起こる出来事は、彼女にとつては物語と同じこと。

私は目を閉じ、語り始める。記憶することが私の特性だから、忘れることなんて無いけれど、一言も漏らさないよう注意して。セレスティンの宝石の物語、ガニメデの女王の物語、ベガの王女とグノーシスの物語、たくさんの人々のたくさんの物語。奇妙な話、偉人の話、恋の話、いろいろな話。

語り終えた私をねぎらうように、喝采するように、彼女は靄を渦巻かせる。光が踊り、実に幻想的な光景。

「アーリーか」

彼女は楽しげに笑う。

「イグナウシアを思い出すよ」

「そうですね」

私は答え、靄の中から、イグナウシアの歌の物語——光を探し出す。この光は、私が集めてきた物語を彼女が具現化させたもの。

「イグナウシアの歌は、ずいぶん色褪せてしまいましたね」

弱弱しい光。どんなに強烈な光を放っていても、やがて褪せて、消える。アーリー以上、この宇宙で強烈な光を放っていたイグナウシアも今では忘れ去られた。

「摂理、運命、終焉……」

彼女は言葉が続け、

「アーリーが、いつまで色褪せない物語であり続けるか、楽しみだね」

「イグナウシアよりも長く語り継がれますよ。きつと」

ジリリとベルが鳴り、私はコートの中ポケットから時計を取り出す。

「もう時間か」

彼女が名残惜しそうに言う。

「今回も実に楽しかった。時計を」

放り投げる。それは落ちることなく、宙へとどまり、回転し——光とともに姿を変える。

「見た目は君の懐古趣味を反映させて。中身はどんな時計より最新式に」

「今度は変な機能をつけていないでしょうね？」

時計を手に取り、よくよく見やる。今度はタイムスリップ機能はついてなさそうだが、前の時計は、知らず新しく付いたネジを回したり、ボタンを押したりしたところ、過去へ未来へと時間旅行してしまった。おかげでセレスティンの宝石の物語を知ることができたのだけれど、現在により近い時間の流れに戻るのが大変だった。現在は、常に未来から過去へ移り変わるものだから。

「さあ、新しい物語を探してきて」

私はその声に押されるように、歩き出す。黒い闇を抜け、久々のターミナルはすっかり姿を変えていた。リゾート地へ向う中継基地のよう。華やかで快適。

どうやら、彼女が近くの惑星にまた悪戯したらしい。彼女は生物を超越した存在。

このターミナルが寂れかけると、この惑星近くに良い鉱脈が見つかったり、新たな惑星へのルートが開拓されたりする。風が吹けば桶屋が儲かるような、とてもとても遠いところが変化して、このターミナルは使われ続ける。誰もそこに関連性を見出したりしない。

入れ違いに帰ってきた『私』から、記憶を受け継ぐ。彼女の元へと続く、トンネルの出入り口である闇。触れれば互いに記憶の交換ができる。

私という存在は、一人であると同時に複数。何人いるかなんて、わからない。彼女の退屈を紛らわせるため、宇宙を旅をし、物語を集めるのが仕事。私は、永遠に物語になることができない、語り手なのだ――。

銀河物語5

独りぼっちの異邦人

「おやおや。珍しいところで、珍しい人に会ったものだ」
低い女の声。驚嘆とともに漏らされた言葉。私は彼女以上の驚きに、目をしばたかせた。

次の惑星へ向うためのステーション内。構内は人であふれ返っている。まだ時間があるので私はベンチに腰掛けて、座席付属の個人用空中モニタを見ていたところだ。

女の顔に覚えはない。ごくごく平均的な顔立ちをした人間型。特徴らしい特徴は無い。平均的で、平凡な。混血だろうか。だが、どの種族の？

逡巡したがわからない。記憶すること、物語ることが私の全て。だから普通の人より、私の戸惑いは大きいものだった。

「どなたかと、お間違えではありませんか？」

「アーヌングの……息子と言ったほうが良いのか？」

そう言つて、女は笑う。どこにでもいそうな人物の、誰でもしそうな笑み。感じの悪いものではない。だから、余計に混乱する。どうして私の正体を知っているのか。

女は空いていた私の隣に腰を下ろす。

「昔、君に会ったことがある。正確には、端末の一個体と言った方が良いか。けれど、君には個性が無いのだから、別個体として認識する必要は無い。そうだろう？」

そう言つて、女は語り始めた。普段、物語るのは私のほうだから、それはとても奇妙な体験――

君と出会ったのは、ずいぶん昔の話。といつても、百年や二百年なんて昔じゃない。もつと、ずつと千年近い昔。寶石好きのゼクスの女王がカリートの海を干上がらせた、なんて物騒な話題が流れていた頃。

ああ、不思議そうな顔をしているね。確かに、このリーラズル銀河の人間型で、千年をこえて生きる種族はいない。君の母親は惑星並の寿命を持っているそうだが人間型ではない。私は君の母親ほどではないが、かなり長命なんだ。一度接触したものだと思いつつ、ずいぶん時が流れてしまった。惑星アーヌングは私の通り道に無いでね。

私のこの外見は仮のものさ。どんな姿にでもなれる。とはいうものの流動種では無い。共鳴、といったら良いのかな。未だに君達の言語に当てはまりそうな単語が存在しないのだから、説明が難しい。私の存在は君達からすれば、幻のようなもの――。

実体はあるよ。ほら、君の手を握ることもできる。体温も感じるだろう？ 私という存在を具現化させているのは、この場の全て。君もその要素の一人。わからない？ 私も君に説明する言葉をこれ以上みつけれないから、説明は終わりだ。学者があふれかえっている部屋で君に会うことができれば、その時は説明できるかもしれない。だが、今はそのときじゃない。私はここにいます。それでいいだろう。

君がまだ思いつけないうちと、もしかしたら私の会った君は惑星アーヌングへ帰り着けなかったのかもしれない。それとも、そんな昔の記憶は共有していないのか

な？ すまない。君のように上手く語れないので、脱線ばかりするかもしれないが、根気良く聞いて欲しい。

私と君が出会ったのは、私がクーガナル系の第五惑星オフィリアを経由して第二惑星デイスノミアへ向つてるときだった。あの頃は別の名前だったと思うが、あいにく私は覚えていない。栄枯盛衰。名前なんて、覚えた先から変わっていく。私が忘れっぽいのではないよ。この世の中が慌しくて、あまりにも忙しなだけ。

今まで、星の数ほどの人と出会い、こんな風に話をして別れた。世間話だったり、込み入った話だったり、様々な話。君もその中の一人だけれど、忘れられない人の一人だよ。星に輝きの強弱があるように、印象深い人もいれば、すぐに忘れてしまうような人もいる。まあ、君ほど変わった人もなかなかいないけどね。

ああ。そうだ、改めて自己紹介した方が良いね。私の名はコメット。旅をするのが私の人生。私にとつて旅とは呼吸と同じもの。旅をしているのが私にとつて通常の状態なんだ。君が物語を見出し、語るのが生きる意味だと言うのと同じだね。すまない。話が脱線しすぎたね。

あの日、私達が乗っていた定期宇宙船に一人の女性が乗っていた。第二惑星デイスノミアといえば、今では名高い商業地として栄えているが、当時は僻地。田舎も田舎。定期宇宙船とは言うものの、月に一度しかない船だったし、貨物船の一部を改造して人が乗れるようにしたものだった。しかも、座席は相席だね。短距離だとそういう

形式のものもあるけれど、長距離旅行だよ。あの頃でも個室が当たり前の時に、相席だったんだからその田舎つぶりがわかつてもらえらるだろう。

船は満員だった。私は窓際というのか、壁際でね。まともな窓も付いていなかった。個別モニタもなく、中型モニタがただ一つ、前方についていただけ。ろくな船じゃなかった。

彼女は私の隣、君はその隣。通路側にいた。そうそう、あのときの君にはずいぶん親切にしてもらったんだ。こまめに飲み物や食べ物を持ってきてくれたりね。君は通路際に座っていたし、座席の幅は狭くてね、まったく、よくあんな船に乗ったものだともだに思うよ。私も君同様、物好きなんだろうさ。

彼女がどこの惑星出身だったか——悪いが憶えていない。人間型だったのは間違いないが、私は外見的なものに興味が無くてね。彼女はよくある失恋からの傷心旅行で、第二惑星ディスノミアへ向っていた。全てを投げ捨てて、辺境惑星で人生を一回やり直すと書いていた。ずいぶん無茶をするものだよ。

私は共鳴する、と先ほど言ったね。通常、この空間にいるもの全てに対して共鳴するんだが、やはり、身近にいる者に一番影響を受けてしまう。あの時の私は、隣の座席にいる彼女に強く共鳴していた。全てがどうでも良いと思いつつ、過去を強く引きずっている彼女に。

長い旅、まして隣同士の席ともなると、なんとなく自己紹介をしてしまう。君が

名乗り、私が名乗り、促されて彼女が名乗った。彼女の名を聞いた君は、スイッチが入ったように物語を語り始めた。惑星デイスノミアの神話の一つ。彼女と同じ名前の終末とも破滅とも言われる女神の物語だ。

彼女同様、私も君の語り口調に引き込まれたよ。さすがに君は物語るのが上手い。その神話がどんな内容だったかだって？ はつきりとは憶えていない。何せ、大昔の話なんだから。

私達は惑星デイスノミアで別れた。君は彼女について行つたよ。私はそこからまた別の船で旅立った。私は旅をしていることが重要でね、観光やふれあいには不要なのさ。話はここで終わる、ように思うだろ？ ところが、別の場所で君にまた会つたんだよ。つまり、君に会うのはこれで三度目ということになる。私が君について知っているのは、二度目に会つた君に、端末の生態を聞いたのさ。

二度目の君に会つたのは、こんな風にステーションで宇宙船を待っているときでね、そのときの君は私のことを覚えていたよ。そして、隣に座つて彼女のその後の人生——思い出した。「レグルスの女神」の物語を君は話してくれたよ。そうそう、昔、あの惑星はレグルスという名前だったよ。懐かしい。

彼女が惑星レグルスに降り立った時というのは、世界の終末ともいえるような混乱期だったそうだよ。彼女は名前のせいもあるよ、ずいぶん苦労したと、君が言っていたけれど、その名前のおかげもあつて女神に祭られたのだから、世の中、どちらに転ぶ

かわからないね。

おやおや、この物語を知らない？ 私は君から聞いた物語なのだが……君は覚えていないのか。やはり、あまりに昔の記憶は共有しないのだね。

物語の結びはこうだった。破滅の後にあるのは、再生。神は両面を併せ持つ存在。

破滅の女神は同時に再生の女神でもある。ふふふ——君の言葉をそのまま繰り返し返しているのに、そんな顔をして聞かれるとおかしいな。

おっと、もうすぐ船が来そうだ。私は惑星シリアン方面に向うのでこれで失礼させてもらう。またいつか会うことがあれば良いな。

私に付いて来たい？ それはお勧めしない。私は君が好むような物語にはならないよ。二度目の君がしばらく私に付き添っていたが、興味なさそうな顔で離れていった——私は常に異邦人でしかないからね。

また、いつか会おう。私は終わらない旅を続けるから、そのうちに。今度は君の物語を聞かせてもらうよ。私の旅が終わるのは、私が消滅するときさ——ああ、ありがとう。またいつか。

作品介绍

- 「やさしい闇の」現代ファンタジー、恋愛、ヴァンパイア
二日酔いで目覚めたアユミは、知らない部屋にいた。
- 「魔法使いと黄色いペンギン」現代ファンタジー
魔法使いと魔法少女。
- 「マイペース」現代
マイペースすぎるチサトと、家族の物語。話を聞かない!!マイペースってわけじゃないのだけだ。
- 「灰色の雨」現代、恋愛
雨の日になると、何かを拾ってくる男と拾われた女。
- 「トリックスター」現代ファンタジー
学校からの帰りがけ、普通の女子高生ヒヨリは執事に呼び止められた。
- 「夫婦」現代
浮気が発覚して以来、妻と冷戦状態の夫視点。
- 「あの星が流れたら」現代ファンタジー
生活に疲れた男がたどり着いた海。

■「雪の色」現代ファンタジー

「スノーホワイト」の後日談、

■「冬」現代

冬は冷たい。冬の思い出。

■「ZとかMとか」現代

主人公が大嫌いな、頭文字 Z とか M とか言われている動物にまつわる物語。

■「紙飛行機」近未来、恋愛

恋人を失くした女性と、彼の甥っ子。

■「グレーは白か、それとも黒か」現代、青春？

何でも割り切れるのが好きな彼女が初めて味わう、グレーな感情。

■「天使が私を撃ってくる」現代ファンタジー。恋愛、

にぶすぎる彼女の恋心と、凄腕の恋のキューピットとの攻防。

■「セレスティンの宝石」SF 物語

宝石惑星セレスティンの真の宝石。

■「ガニメデの女王」SF 物語

宇宙に名だたるガニメデの女王と、その即位の様子。

■「ベガの王女とグノーシス」SF 物語

ベガ王家と、王女と学者の駆け落ち。

- 「アーヌングの語り手」SF 物語
語り手と惑星アーヌングの彼女。
- 「独りぼつちの異邦人」SF
古い物語を聞かされる語り手。

『 宵闇色の空 』
夏樹夕 (C)Yuu Nastuki

2011年7月15日発行

空色惑星
<http://sorairowakusei.yu-nagi.com/>

